長野県埋蔵文化財センター年報 5

1988

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報

1988

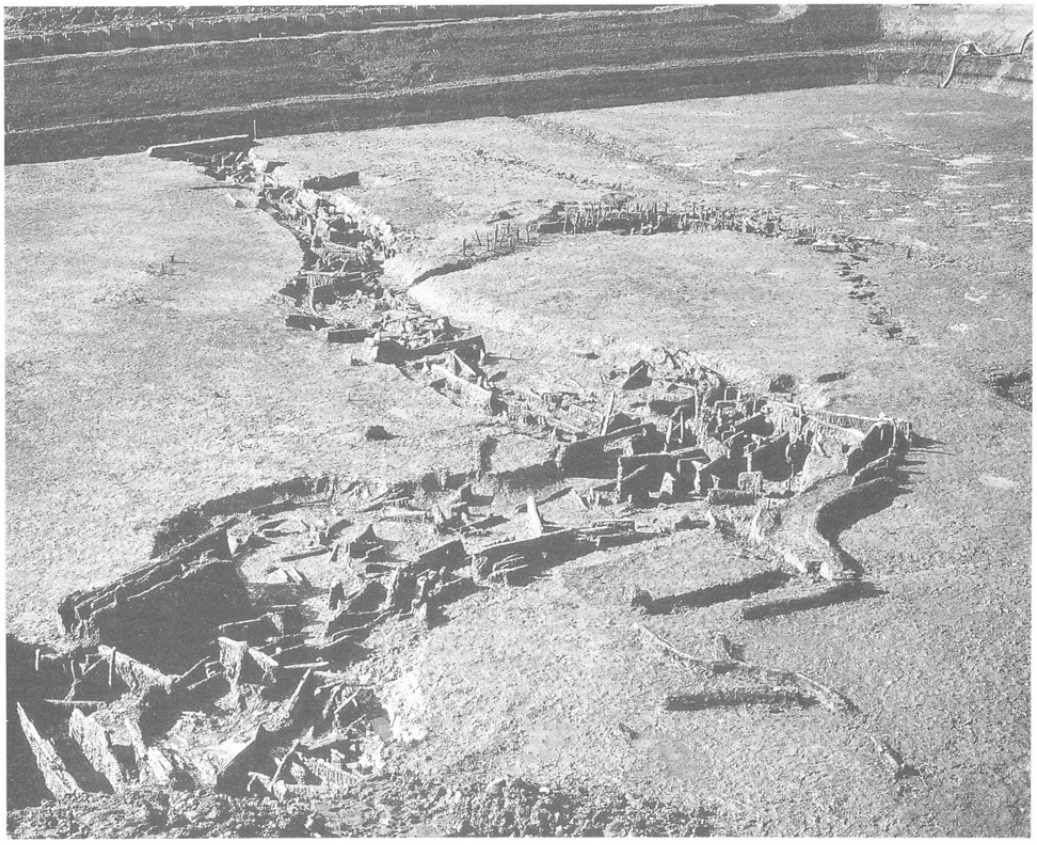
財団法人

長野県埋蔵文化財センター

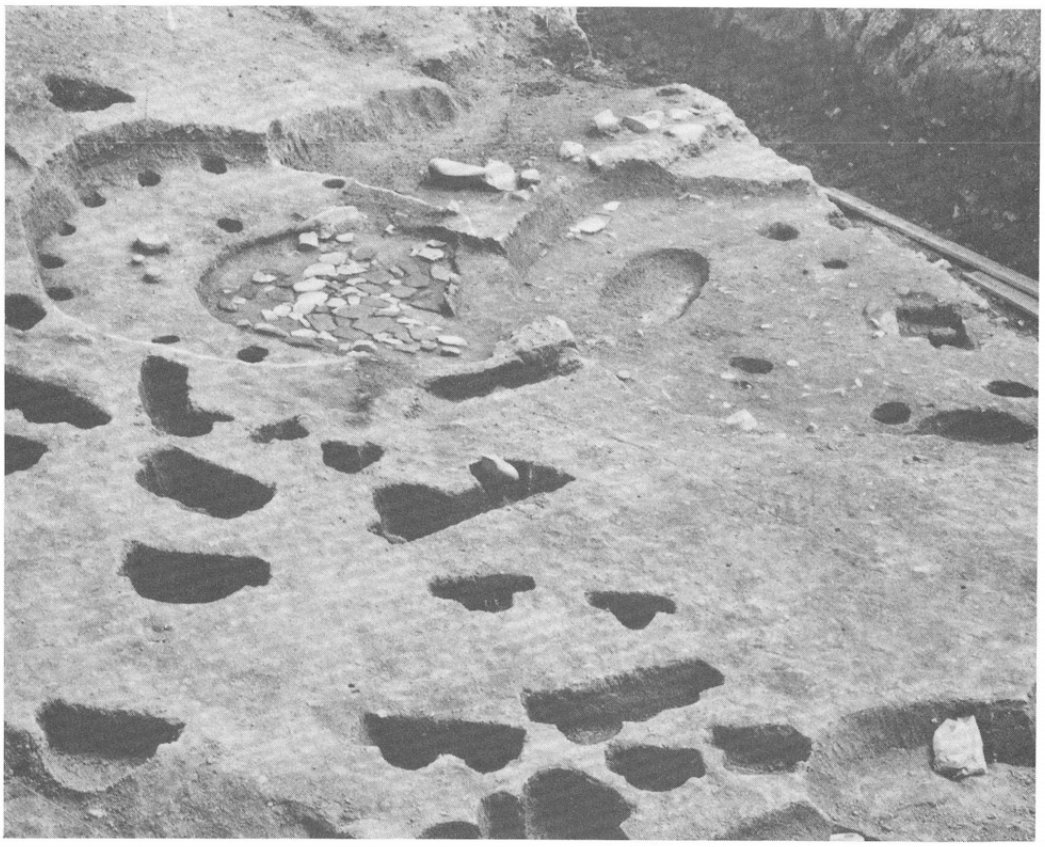
1　佐久市下茂内遺跡Ｂ地区出土槍先形尖頭器

2　佐久市下茂内遺跡Ｂ地区ブロック内出土槍先形尖頭器

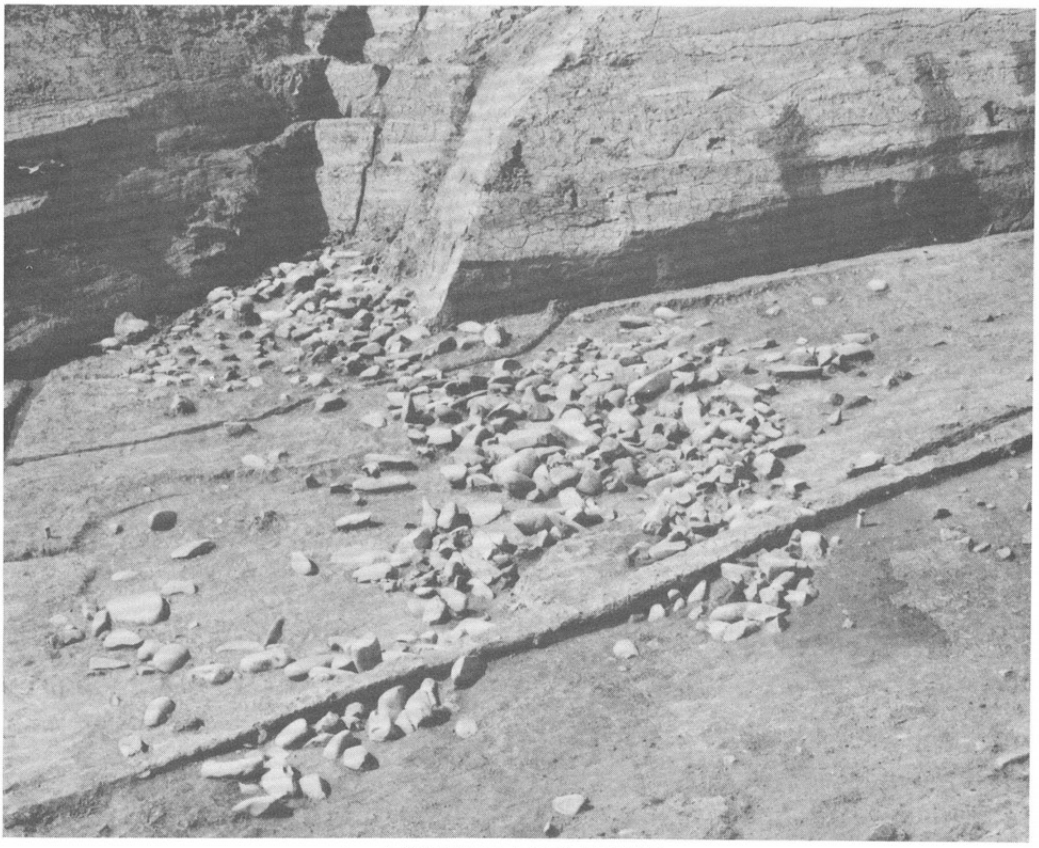
3　長野市石川条里遺跡⑪・⑮区水田址検出状態（平安時代）



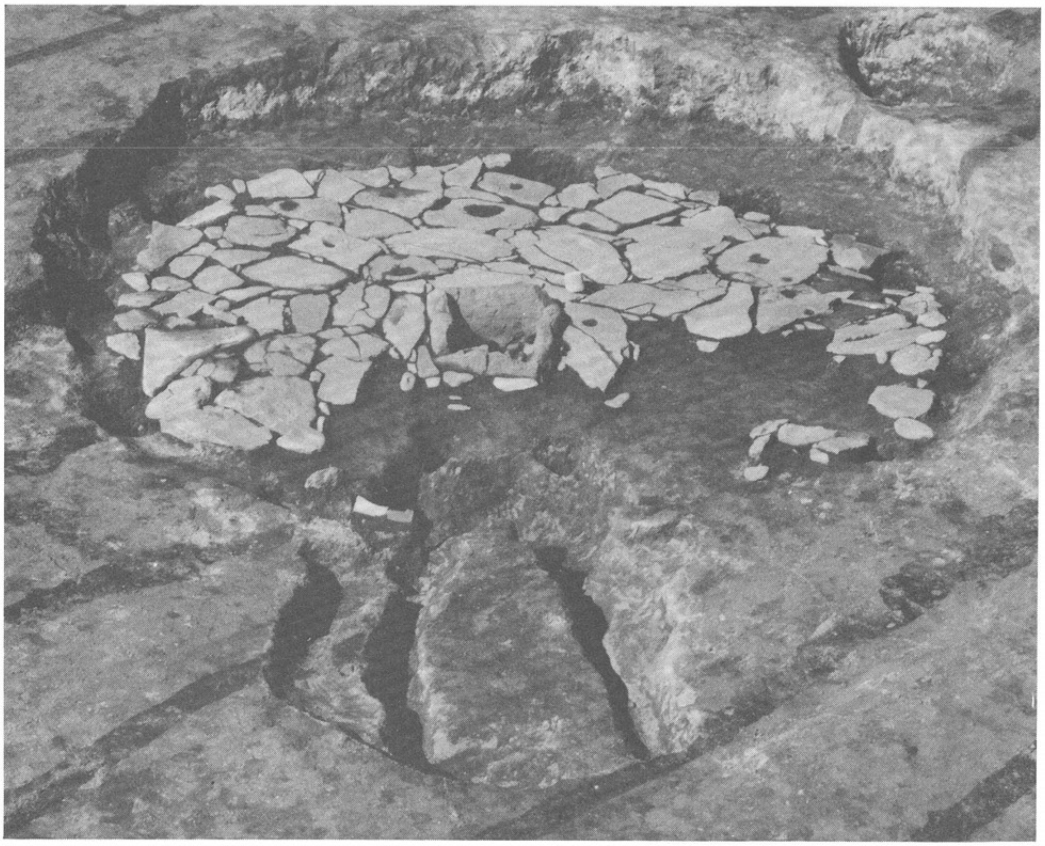
4　石川条里遺跡⑮区3004号溝（弥生～古墳時代）



5　明科町北村遺跡複合する住居址や土坑群



6　北村遺跡配石（土坑）検出状態



7　佐久市吹付遺跡９号住居址

8　佐久市大星尻古墳群１号墳

9　大星尻古墳群近世墳墓内墓坑検出状態

10　佐久市北山寺遺跡遠景

序

㈶長野県埋蔵文化財センターも，昭和57年発足以来，ここに７年目を迎えました。

本年度は，昨年度同様に「長野調査事務所」「松塩筑調査事務所」「佐久調査事務所」の３調査事務所で事業をすすめてまいりました。

長野調査事務所では，長野自動車道建設に係る東筑摩郡坂北村・長野市塩崎地区の４遺跡の発掘調査，松塩筑調査事務所では，同じく長野自動車道建設に係る東筑摩郡明科町の１遺跡の発掘調査及び塩尻市，松本市，南安曇郡豊科町の12遺跡の整理作業，佐久調査事務所では，上信越自動車道建設に係る佐久市の16遺跡の発掘調査を実施し，多大の成果をおさめることができました。

個々の調査成果については，本文でふれますが，なかでも長野市塩崎地区所在の石川条里遺跡では，当初は弥生時代以降現在に至る水田跡の遺跡であろうと予想していましたが，あらたに，縄文時代以降の生活域のあることが判明しました。とくに，古墳時代の大溝に区画されるであろうと思われる土坑群や，中世居館跡の発見は，水田跡の調査の成果とともに，地域史解明のうえで貴重な発見といえるでしょう。また，佐久市下茂内遺跡では，先土器時代から縄文時代への過渡期の石器製作跡が発見され，大いに学会からも注目されています。

石川条里遺跡の調査は４ｍにも及ぶ軟弱土の間に何層もの文化層がある低湿性遺跡であり，下茂内遺跡もまた，複数の文化層を順次，調査せざるをえず，このため調査期間が冬期に及んでしまいました。厳寒，軟弱土という悪条件のなかで発掘調査に従事した調査研究員，作業員のみなさんに，敬意を表するとともに，厳しい工事工程の中で，こうした事態を理解し，御協力をくださった，日本道路公団をはじめ関係各位，地元のみなさんに深く感謝します。

発掘調査と同時に，普及・公開活動として，現地説明会，出土品展なども開催し，多数の方々の参観をいただきました。また，「長野県埋蔵文化財センター紀要」は第２号が発刊でき，軌道にのってまいりました。こうした文化財保護思想の啓蒙活動は，まだまだ十分とはいえませんが，今後とも努力をつづけていきたいと思います。

刊行にあたり，御協力をいただいた関係各位に対し，深く感謝し，今後とも御支援と御協力をお願いいたす次第です。

平成元年３月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　**樋　口　太　郎**

目　　次

口　　絵
序
目　　次
Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要
1　長野自動車道関係……1
〔長野調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……1　(2)　整理作業の概要……2
〔松塩筑調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……3　(2)　整理作業の概要……3
2　上信越自動車道関係……4
〔佐久調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……4　(2)　整理作業の概要……5
3　発掘調査遺跡……9
〈長野自動車道〉
(1)　北村遺跡……9　(2)　十二遺跡……13
(3)　赤沢城跡……13
長野市塩崎付近の地形と地質……16
(4)　鶴前遺跡……19　(5)　石川条里遺跡……22
〈上信越自動車道〉
(1)　下茂内遺跡……28　(2･3)　木戸平Ａ遺跡・吹付遺跡…33
(4･5･6)　上中原遺跡・鶉ヲネ遺跡…37　(7)　大星尻古墳群……39
東林遺跡
(8)　丸山遺跡……42　(9)　北山寺遺跡……44
(10･11)　東大久保遺跡……46　(12)　腰巻遺跡……47
西大久保遺跡
(13)　栗毛坂遺跡……49　(14･15･16)　西赤座遺跡・中久保田遺跡 52
枇杷坂遺跡
Ⅱ　普及・研究活動の概要
1　現地説明会……54
2　展示会……56
3　研究会・学習会……58
4　刊行物……60
Ⅲ　機構・事業の概要
1　機　構……61
(1)　組　織　(2)　事務所所在地
2　事　業……61

(1) 理事会及び会計監査　(2) 調査事業
(3) 事業費　(4) 普及活動
(5) 職員研修
昭和63年度役員及び職員 …… 65

口　絵

1 佐久市下茂内遺跡Ｂ地区出土槍先形尖頭器
2 佐久市下茂内遺跡Ｂ地区ブロック内出土槍先形尖頭器
3 長野市石川条里遺跡⑪・⑮区水田址検出状態（平安時代）
4 長野市石川条里遺跡⑮区3004号溝（弥生～古墳時代）
5 明科町北村遺跡複合する住居址や土坑群
6 北村遺跡配石（土坑）検出状態
7 佐久市吹付遺跡９号住居址
8 佐久市大星尻古墳群１号墳
9 大星尻古墳群近世墳墓内墓坑検出状態
10 佐久市北山寺遺跡遠景

第１図 長野市石川条里遺跡⑤区1016号溝（古墳時代） …… 2
第２図 長野自動車道に係る坂北村内遺跡分布図 …… 5
第３図 長野自動車道に係る長野市内遺跡分布図 …… 6
第４図 長野自動車道に係る明科町内遺跡分布図 …… 6
第５図 上信越自動車道に係る佐久市内遺跡分布図 …… 7
第６図 北村遺跡調査範囲概略図 …… 9
第７図 北村遺跡Ｅ区遺構配置図（古代） …… 10
第８図 北村遺跡出土遺物実測図 …… 11
第９図 採集狩猟民食糧摂取割合 …… 12
第10図 赤沢城跡調査範囲図 …… 14
第11図 赤沢城跡Ｃ区及び主郭・竪堀群 …… 15
第12図 長野市石川条里遺跡土層断面図 …… 17
第13図 長野市塩崎地区周辺の地質図 …… 18
第14図 鶴前遺跡遺構配置図 …… 20
第15図 鶴前遺跡４号住居址実測図 …… 20
第16図 鶴前遺跡遠景 …… 21
第17図 鶴前遺跡70号土坑 …… 21
第18図 鶴前遺跡４号住居址 …… 21
第19図 石川条里遺跡概略図 …… 22
第20図 石川条里遺跡⑮区弥生・古墳時代の水田址 …… 23
第21図 石川条里遺跡⑪・⑮区平安時代の水田址 …… 24
第22図 石川条里遺跡⑤区1033号土坑 …… 26

第23図　石川条里遺跡生活域（微高地）遺構配置図 …… 26
第24図　石川条里遺跡水田域と居住域の境界の遺構配置図 …… 27
第25図　下茂内遺跡全景 …… 29
第26図　下茂内遺跡Ｃ地区石棺墓 …… 30
第27図　下茂内遺跡Ｂ地区遺物出土状態 …… 30
第28図　下茂内遺跡Ｂ地区出土の槍先形尖頭器 …… 31
第29図　下茂内遺跡Ｂ地区ブロック分布図 …… 32
第30図　木戸平Ａ遺跡・吹付遺跡（東側）遺構配置図 …… 34
第31図　吹付遺跡（西側）遠景 …… 34
第32図　吹付遺跡９号住居址実測図・同出土土器実測図 …… 35
第33図　吹付遺跡４号住居址 …… 36
第34図　吹付遺跡５号住居址出土土器実測図 …… 36
第35図　上中原遺跡・鶉ヲネ遺跡・東林遺跡調査範囲図 …… 37
第36図　鶉ヲネ遺跡出土遺物実測図 …… 38
第37図　大星尻古墳群出土土器実測図 …… 39
第38図　大星尻古墳群１号墳墳丘実測図・同石室実測図 …… 40
第39図　大星尻古墳群近世墳墓 …… 41
第40図　丸山遺跡全景 …… 42
第41図　丸山遺跡３号住居址実測図 …… 43
第42図　丸山遺跡１号土坑遺物出土状態 …… 43
第43図　北山寺遺跡遺構配置図 …… 44
第44図　北山寺遺跡８号住居址実測図 …… 45
第45図　北山寺遺跡６号住居址 …… 45
第46図　北山寺遺跡出土ナイフ形石器実測図 …… 45
第47図　腰巻遺跡遺構配置図 …… 48
第48図　腰巻遺跡出土土器実測図 …… 48
第49図　栗毛坂遺跡年度別調査範囲図 …… 49
第50図　栗毛坂遺跡Ｂ地区遺構配置図 …… 50
第51図　栗毛坂遺跡Ｂ地区572号土坑 …… 51
第52図　572号土坑出土土器実測図 …… 51
第53図　栗毛坂遺跡Ｂ地区159号住居址出土土器実測図 …… 51
第54図　栗毛坂遺跡Ｃ地区・西赤座遺跡・中久保田遺跡・枇杷坂遺跡遺構配置図 …… 53
第55図　現地説明会風景 …… 54
第56図　展示会風景 …… 56
第57図　展示会風景 …… 58

第１表　昭和63年度　長野自動車道及び上信越自動車道関連事業一覧 …… 8
第２表　講師招へい及び来所による指導・学習会 …… 58

Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要

昭和63年度は，57年度以来継続している長野自動車道と，61年10月から開始された上信越自動車道関連事業が中心であるが，長野自動車道の北上などにともない，松塩筑調査事務所は整理作業が，長野・佐久調査事務所は発掘作業が主体であった。

以下，３調査事務所ごとにその概要を述べる。

１．長野自動車道関係

〔長野調査事務所〕

(1)　発掘調査の概要

調 査 区 域　　坂北村・長野市

調査遺跡数　　４遺跡（坂北村十二遺跡・長野市赤沢城跡，鶴前，石川条里遺跡）

調査総面積　　46.750m²（十二1,500m²，赤沢城5,950m²，鶴前5,900m²，石川条里33,400m²）

調 査 期 間　　昭和63年４月18日～昭和63年12月26日

本年度の当初計画では，調査対象遺跡は坂北村２，更埴市１，長野市塩崎地区３の計６遺跡であった。しかし，用地買収をはじめ種々の理由により，調査可能な遺跡は限定され，このため大多数の遺跡の調査開始時期が大幅に遅れた。加えて，赤沢城跡の新規追加もあり，当初の計画は大きく変更せざるを得なかった。また，石川条里遺跡がきわめて軟弱な低湿性遺跡であり予想を上まわる情報量をもつことが判明するに及んで，調査が難行し，文化課及び松塩筑調査事務所からの応援をもとめて，かろうじて年内に，ほゞ予定した調査を終了することができた。なお，石川条里遺跡については，ＪＲ篠ノ井線及び聖川の保全上，調査できなかった部分を，平成元年１月23日から１週間にわたって，補助調査を実施した。

坂北村十二遺跡は同村の向六工遺跡とだき合わせで調査計画をたてたが，前者はトレンチ調査の結果，路線内に遺構・遺物は認められず，後者も２日間にわたる試掘だけに終らざるを得ない状況にあり，坂北村の調査は短期間で終了した。なお，向六工遺跡は縄文～中世の複合遺跡であることが判明し来年度以降の調査にゆだねることになった。

長野市塩崎地区の調査は赤沢城跡及び鶴前・石川条里の３遺跡である。赤沢城跡は山麓裾部で空堀の一部を調査し，中世山城の空堀の構造の一部を明らかにしえた。鶴前遺跡は篠山山系の東斜面上にあり，東に石川条里水田跡を眼下に見おろす位置にある。縄文前期，古墳時代初頭，奈良・平安，中世の集落跡が検出された。石川条里遺跡をとり囲む，集落跡の一部を構成するもので，生産の場と生活の場を明らかにする上で重要な調査となった。なお，約半分は来年度継続調査を実施する。

石川条里遺跡は路線内７haに及ぶ弥生時代以降現代に至る水田跡であることが，長野市教育委員会のほ場整備にともなう調査ですでに明らかにされていたが，その具体像につい

ては必ずしも明らかにはされていなかった。軟弱地盤のうえ，水田営農地帯を調査するということで，種々の手だてが必要であった。主として重埴土の互層の中で水田面を検出しなければならないという調査上の問題点とともに，水田地帯の調査上の手だてのための労力が強く求められた。止水防止用の矢板工事をはじめ排土・排水及び安全対策など多くの課題を負っての調査であった。調査の結果，現在はフラットな水田地帯であり，過去においても同様であったであろうというわれわれの予想に反し，微地形が複雑に出入り，それに応じて人間の自然への働きがけが多様であることが理解された。水田跡では弥生・古墳時代を面的に押さえる見通しができたこと，条里水田が遺跡全面にあることとその後の変遷がかなり把握できそうであること，また，微高地上では古墳時代の特殊な大遺構，中世の居館跡，さらに縄文時代前期初頭の小集落を検出しえたこと，微高地（生活域）と水田地帯との関係など多大な成果をあげえた。が，課題も多く来年度に予定されている調査の中で解決してゆくことになろう。遺物では木製品や土器が多量に出土し，その他古墳時代の装身具など，従来県内で知られなかったものが多く注目される。なお，プラント＝オパール分析調査は重植上の水田跡の調査にはきわめて有効であった。

(2) 整理作業の概要

発掘調査の終了後，ただちに整理作業を３月まで実施した。内容は記録類の整備および遺物の洗浄と注記等である。

第１図　長野市石川条里遺跡⑤区1016号溝（古墳時代）

〔松塩筑調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調 査 区 域　　東筑摩郡明科町

調査遺跡数　　１遺跡（明科町北村遺跡）

調査総面積　　4,692㎡

調 査 期 間　　昭和63年４月８日～７月28日，昭和63年９月５日～９月26日

調査は，前年度から継続のうち，工事用道路・農業用埋設水路・宅地等未収去の構造物が残されていた部分が対象となった。また，構造物収去状況にかかわり，調査期間を２期に分けて行ない，９月26日をもって前年度来の現地調査を終了した。なお，調査の実施に当たり，前年度の経緯にもとづき，４月～６月の間は長野調査事務所及び当所整理作業班の調査研究員を含めた，変則的な体制で調査に臨んだ。前年度調査結果と併せ用地内に見られる各時代集落の展開は，以下のようにとらえられた。

縄文時代中頃，離水が完了した犀川右岸段丘面山麓裾に，東方長峰山地斜面が崩積しカマボコ状の張出しが形成される。この頃最初の集落が形成されたらしいが，状況ははっきりつかめていない。縄文後期初めから中葉にかけて，カマボコ状張出し部裾から用地内中央部付近まで，東西約200ｍの間に敷石住居・配石墓，土坑群等からなる集落が継続して営まれるが，分布は張出し部裾で濃密に，西に寄るに従って稀薄となる。縄文後期面はやがて２ｍほどの黄褐色・暗褐色粘質土に覆われるが，これの下層に弥生時代末の集落が用地内東北部へ営まれる。さらには上層へ用地内西端を除くほゞ全面に古代の集落が広がるようになる。調査範囲から各時代とも，南北方向への広がりについては不明である。本年度調査の成果については，「Ｉ－３－(1)北村遺跡」の項にゆずる。

２年度にわたる調査成果から，縄文面で検出された人骨を伴う配石墓群は特に注目されるところであるが，高い資料性にかんがみた課題や成果の集約は，今後の本格的な整理作業を通して検討していきたい。

(2) 整理作業の概要

ア　塩尻市内の整理

(ア)　塩尻市内その２

塩尻市内吉田川西遺跡の整理作業は，昭和61年度から３年間を費やして報告書刊行にこぎつけた。時期による多少の濃淡はあるものの，古代から現代に至る集落跡が継続してみられること，その間にあっては，特に墨書土器・緑釉陶器・輸入陶磁器・鉄器類資料が豊富であり，これらの分析を通した古代・中世村落の動向にかかわる資料提示に心がけた。

イ　松本市内・豊科町内の整理

松本市・豊科町内12遺跡が，奈良井川と一部梓川の川辺に近い沖積地帯に立地するという共通の空間域にあること，また，遺跡ごとの多少の振幅はあるものの，古代～中世

を中心とする，といった時間幅を示すことから，幅５～60ｍで南北10数kmの調査範囲を統括した視点から見通すことを課題として，整理作業をすすめてきた。そのために，分量の配分から事実記載を中心とした遺跡編６分冊中の松本市内その２－神戸・上二子・中二子遺跡，松本市内その７・豊科町内－南中・北中・北方・上手木戸遺跡の２分冊を本年度発刊し，以下下神遺跡，南栗遺跡，北栗遺跡，三の宮遺跡（新村島立条里）の４分冊と，本論編１分冊を来年度発刊の予定で鋭意作業を継続中である。

２．上信越自動車道関係

〔佐久調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調 査 区 域　佐久市東地々区・平根地区・岩村田地区

調査遺跡数　16遺跡（東地々区６遺跡・平根地区６遺跡・岩村田地区４遺跡）

調査総面積　138,170m²

調 査 期 間　昭和63年４月５日～平成元年１月26日

上信越自動車道建設に係る発掘調査は，昭和61年10月に開始し，昭和62年度，昭和63年度で，一部設計変更による未調査地区を残して，県境～佐久インターチェンジ間の発掘調査を終了した。各遺跡の調査状況は各項でふれるが，ここで，昭和63年度の発掘調査の概要を記したい。

ア　東地々区

八風山々系の南向き斜面に位置する木戸平Ａ，吹付，上中原，鶉ヲネ，東林の各遺跡と香坂川左岸の台地に位置する下茂内遺跡を調査した。

吹付遺跡では，縄文時代中期末～後期初頭の住居址10軒と土坑多数が検出され，中でも保存状況の良い敷石住居址２軒が検出されたことは注目される。佐久市内で今までに縄文時代中期の集落址の調査例が少ないだけに貴重な資料である。

下茂内遺跡は，調査に入る前は杉，カラマツにおおわれた山林であり，遺跡の広がり，性格など不明な点が多かった。調査の結果，縄文時代（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期），弥生時代（中期～後期），平安時代，中・近世の遺構・遺物が検出され，長期にわたって生活の舞台であったことが明らかとなった。標高900ｍを越える高所の山間部に位置しているが，各時代の人々の生活とどのように係った“場所”であったのか興味深いものがある。特に，縄文時代草創期に，香坂川に転がっている玄武岩を原材として，ポイント製作に係った遺跡であることが明らかになったことは，全国的に見ても，東京都の前田耕地遺跡などの数例が知られるのみであり，貴重な発見といえよう。また，下茂内遺跡では，時期は明確にできないが，等高線に直交するかたちで畝状（うねじょう）遺構が広い範囲にわたって検出されている。

下茂内遺跡，木戸平Ａ遺跡の山麓斜面で，陥し穴（おとしあな）と思われる土坑が数10基検出された。

イ　平根地区

平尾富士南麓の大星尻古墳群，丸山・北山寺の両遺跡，湯川東岸段丘上の東大久保，西大久保，腰巻の各遺跡を調査した。

大星尻古墳群は，当初，古墳状のマウンドが８基ほど認められていたが，調査の結果，古墳１基と近世の塚１基が確認されたのみである。古墳は古墳時代終末期のもので，内部主体は横穴式石室，副葬品等の遺物は，わずかに鉄鏃，須恵器が出土したのみである。近世の塚は，方形の石組の中央部に遺体と銅銭・仏具などが埋葬されていた。なお，周辺から縄文時代中期の土坑数10基が検出されている。

丸山遺跡は，25,000m²を越えるなだらかな斜面に位置する遺跡であるが，中央部分は河川の氾濫によって運ばれた巨石と礫が厚く堆積しており，居住域としてはめぐまれていなかった。縄文時代前期末の住居址１軒と土坑，平安時代の住居址２軒が検出された。

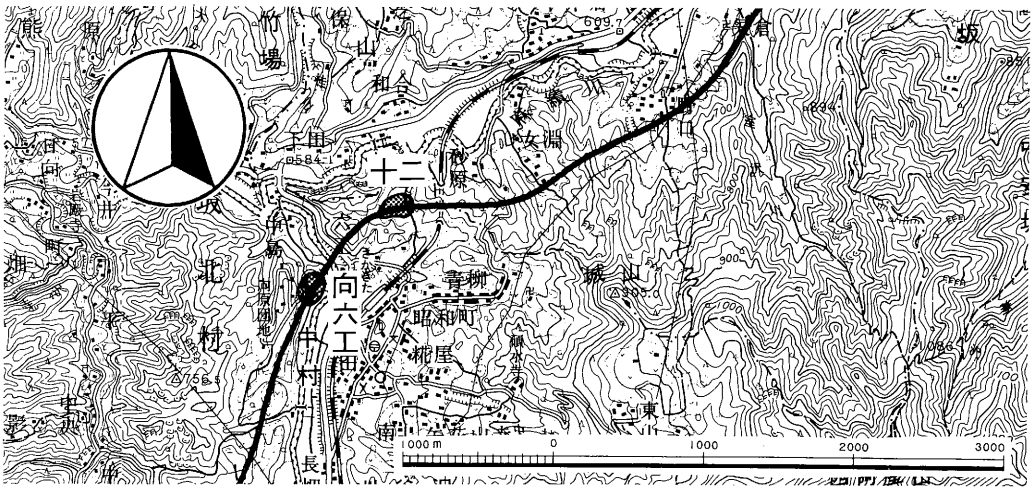
北山寺遺跡では，平安時代の住居址７軒，中世の所産と思われる住居址，竪穴状遺構，土坑などが検出された。

ウ　岩村田地区

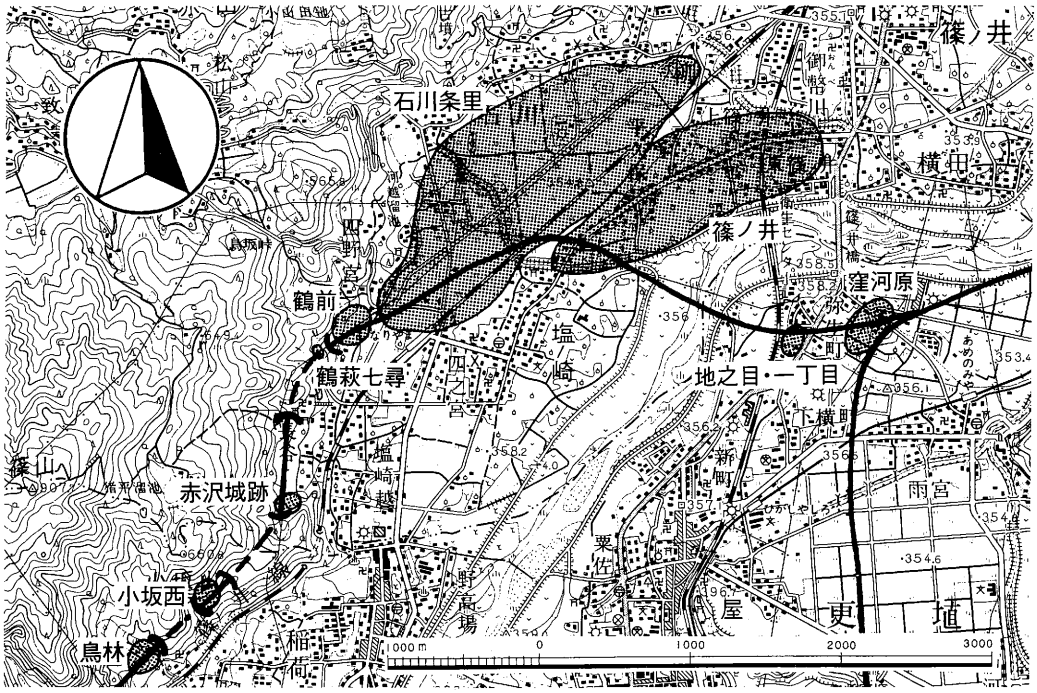
湯川右岸の栗毛坂，西赤座，中久保田，枇杷坂の各遺跡を調査した。中久保田遺跡以外は昨年度からの継続調査で，昨年度までの調査と内容的にはあまり変化はない。栗毛坂遺跡で縄文時代後期の土坑，弥生時代後期の小形住居址が確認されたのは新知見である。

(2)　整理作業の概要

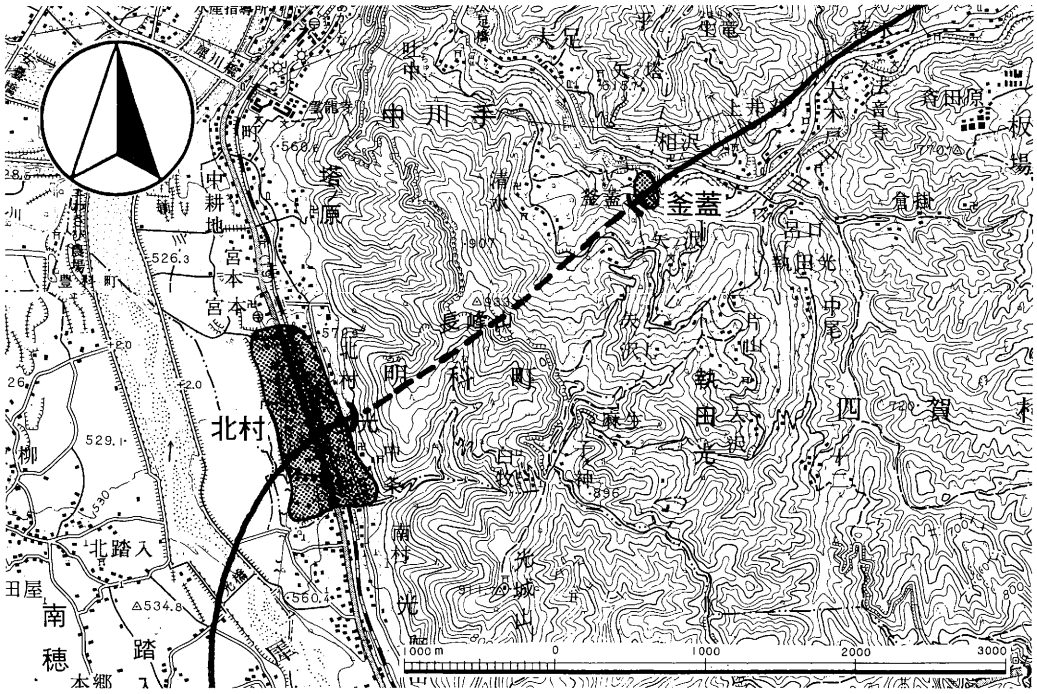
本年度は，一部11月より整理作業に入っている。現場で作成した実測図等の記録類の点検・修正・加筆及び遺物の洗浄・注記は終了し，各遺構出土遺物の検討，接合，復原等の作業に併せて，遺物実測等の記録化にも着手している。また，来年度本格的に始まる整理作業に向けての計画を立案している。



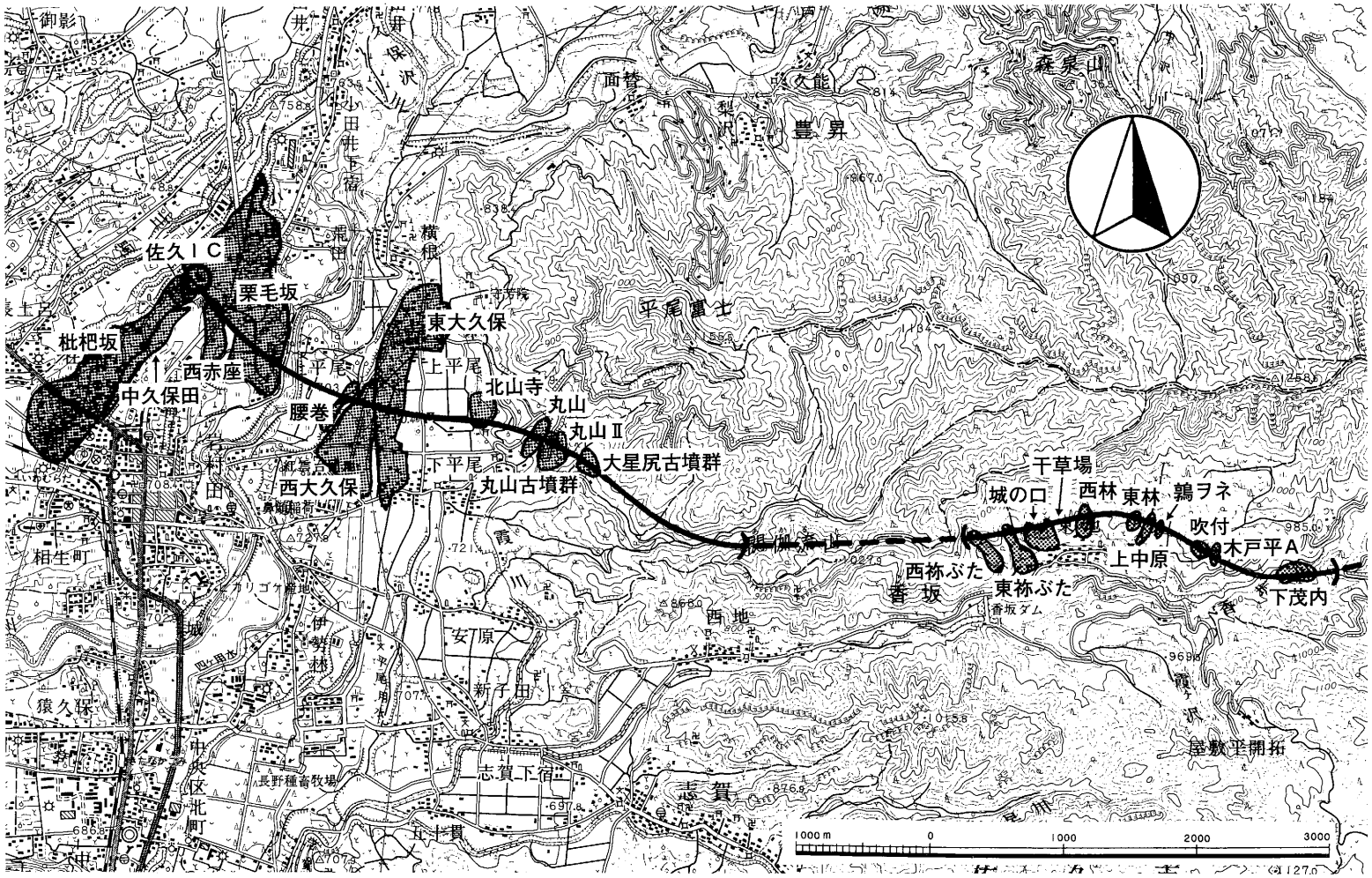
第２図　長野自動車道に係る坂北村内遺跡分布図（１：50,000）



第３図　長野自動車道に係る長野市内遺跡分布図（１：50,000）



第４図　長野自動車道に係る明科町内遺跡分布図（１：50,000）



第５図　上信越自動車道に係る佐久市内遺跡分布図（１：50,000）

長野自動車道 (1) 発掘作業

市町村	遺跡名	発掘調査面積 ㎡ 調査対象面積	63年度調査面積	発掘調査期間	日 調査日数	人 作業員数	発掘調査の状況
明科	1 北村	21,530	4,692	4．8～7．28 9．5～9．26	93	2,133	縄文～平安　住居址30、建物址6、土坑760、溝7　他
坂北	2 向六工	13,600	(試掘)	4．26～4．28	3	0	縄文～平安　土坑1
	3 十二	26,000	1,500	4．14～4．28	8	0	縄文～近世　遺物若干出土
長野	4 赤沢城	5.950	5.950	9．12～10．14	18	222	中世山城　堀1
	5 鶴前	11,300	5,900	4．18～8．2	58	1.072	縄文・古墳～中世　住居址35、建物址10、土坑142、溝6
	6 石川条里	33,400	33,400	6．20～12．26	113	10,575	縄文～近世　住居址3、建物址2、土坑607、溝36、水田　他
合計		111,780	51,442	4．8～12．26	293	14,002	住居址68、建物址18、土坑1,647　他

(2)整理作業

市町村	遺跡名	発掘調査面積㎡	整理作業の状況
1 塩尻市	吉田川西	25,100	『調査報告書3』平成元年3月31日刊行
2 松本市・豊科町	神戸　上二子　中二子　下神　南栗　北栗　三の宮　南中　北中　北方　上手木戸	278,730	『調査報告書5』(神戸　上二子　中二子) 『調査報告書10』(南中　北中　北方　上手木戸)　平成元年3月31日刊行 『調査報告書4・6・7・8・9』図版、原稿作成（継続中）
3 明科町	北村	15,677	諸記録の整理、遺物の注記作業（継続中）

2 上信越自動車道

地区	遺跡名	発掘調査面積 ㎡ 調査対象面積	63年度調査面積	発掘調査期間	日 調査日数	人 作業員数	発掘調査の状況
東地	1 下茂内	27,000	27,000	4.18～元.1.26	170	6.659	縄文～近世　住居址5、建物址4、土坑222、畠址6、縄文草創期石器製作址21　他
	2 木戸平A	3,000	3,000	8．17～9．30	22	125	縄文　土坑6
	3 吹付	10,300	10,300	6．23～11．15	120	970	縄文　住居址10、土坑80
	4 上中原	1,700	1,700	6．9～6．21	4	17	縄文　遺物若干出土
	5 鵜ヲネ	2,400	2,400	4．18～6．22	53	471	縄文　土坑8
	6 東林	7,900	7,900	5．9～6．20	17	26	縄文　遺物若干出土
平根	7 大星尻	20,000	20,000	4．18～9．14	107	1,006	縄文・弥生・古墳・平安　土坑30、古墳1、近世墳墓2
	8 丸山	25,300	25,300	7．27～10．28	58	568	縄文・平安　住居址3、土坑17
	9 北山寺	5,100	5,100	4．25～7．26	61	583	平安～中世　住居址9、建物址1、竪穴状遺構3、土坑52、溝3
	10 東大久保	8,700	8,700	4．7～5．6	19	100	縄文・平安　遺物若干出土
	11 西大久保	6,400	500	12．1	1	6	縄文・平安　遺物若干出土
	12 腰巻	5,300	2,000	10．14～12．10	42	294	縄文～近世　住居址5、土坑50、溝3
岩村田	13 栗毛坂	78,500	7,800	4．5～12．2	182	2,910	縄文～中世　住居址50、建物址52、土坑258、溝8　他
	14 西赤座	6,700	1,000	10．13～12．5	17	74	奈良～近世　土坑10、溝1
	15 中久保田	7,800	7,800	10．8～11．14	3	10	遺構・遺物検出されず（田切り地形内）
	16 枇杷坂	16,000	7,670	10．8～11．30	21	81	平安　住居址5、土坑1、溝1
合計		232,100	138,170	4.5～元.1.26	897	13,900	住居址82、建物址63、土坑732　他
発掘調査合計		343,800	189,612	4.5～元.1.26	1,190	27,902	住居址150、建物址81、土坑2,379　他

第1表　昭和63年度長野自動車道及び上信越自動車道関連事業一覧

3．発掘調査遺跡

〈長野自動車道〉

(1) 北村遺跡（きたむら）

所　在　地：東筑摩郡明科町大字光北村341番地ほか

調 査 期 間：昭和63年４月８日～７月28日・９月５日～26日

調 査 面 積：4,692m²（総計21.530m²）

遺跡の立地：犀川右岸段丘面の沖積扇状地上

時代と時期：縄文時代中期・後期，弥生時代後期，古墳時代後期，奈良時代，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代中期後葉～後期中葉，弥生時代後期，古墳時代後期～平安時代の集落

主な検出遺構

時期＼遺構	住居址	掘立柱建物址	土　坑	土坑墓配石墓	溝	柱　列 柵　列	井　戸	集　石 配　石	焼土址	遺物集中箇所
縄　文	24 (63)		約500 (約4,000)	約80 (約385)				約50 (約225)	1 (1)	1 (7)
弥　生	1 (7)								4 (5)	
古　墳	4 (19)	6 (39)	約100 (約410)		7 (31)	1 (6)	(1)		(3)	
奈　良										(1)
平　安										
不　明		3 (5)			(1)		3 (4)			

(　)総数

主な出土遺物

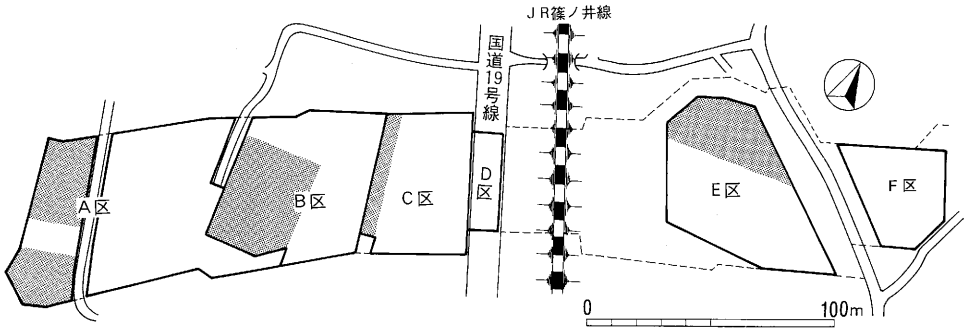
土　　器：縄文中期土器・縄文後期土器・弥生後期土器・土師器・須恵器・灰釉陶器

石　　器：打製石斧・磨製石斧・石鏃・凹石・磨石・石皿・石錐・石錘・石匙・砥石

土製品・石製品：小形土器・土偶・石棒・土製円板・棒状石製品

そ　の　他：人骨（人骨を伴う配石土坑数約73基）・獣骨

北村遺跡の位置およびその立地環境については，昨年度の調査概要報告に譲ることとし（長野県埋蔵文化財センター1988），ここでは，本年度の調査を踏まえ，新たにつけ加わった知見についてのみ述べることにする。

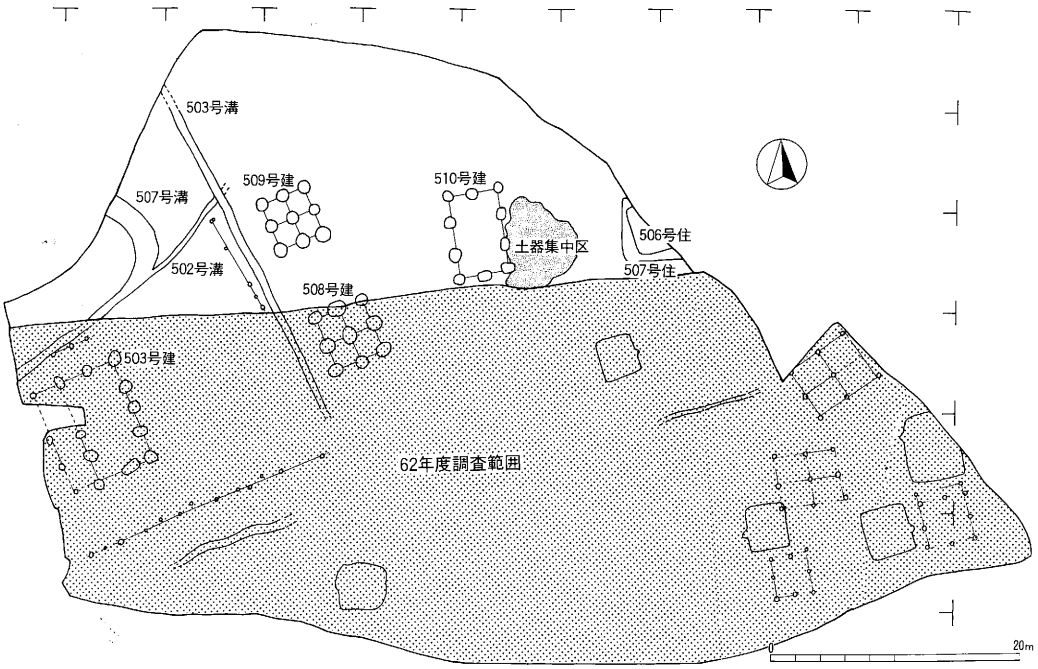


第６図　北村遺跡調査範囲概略図（1：3,000）（アミは63年度調査範囲）

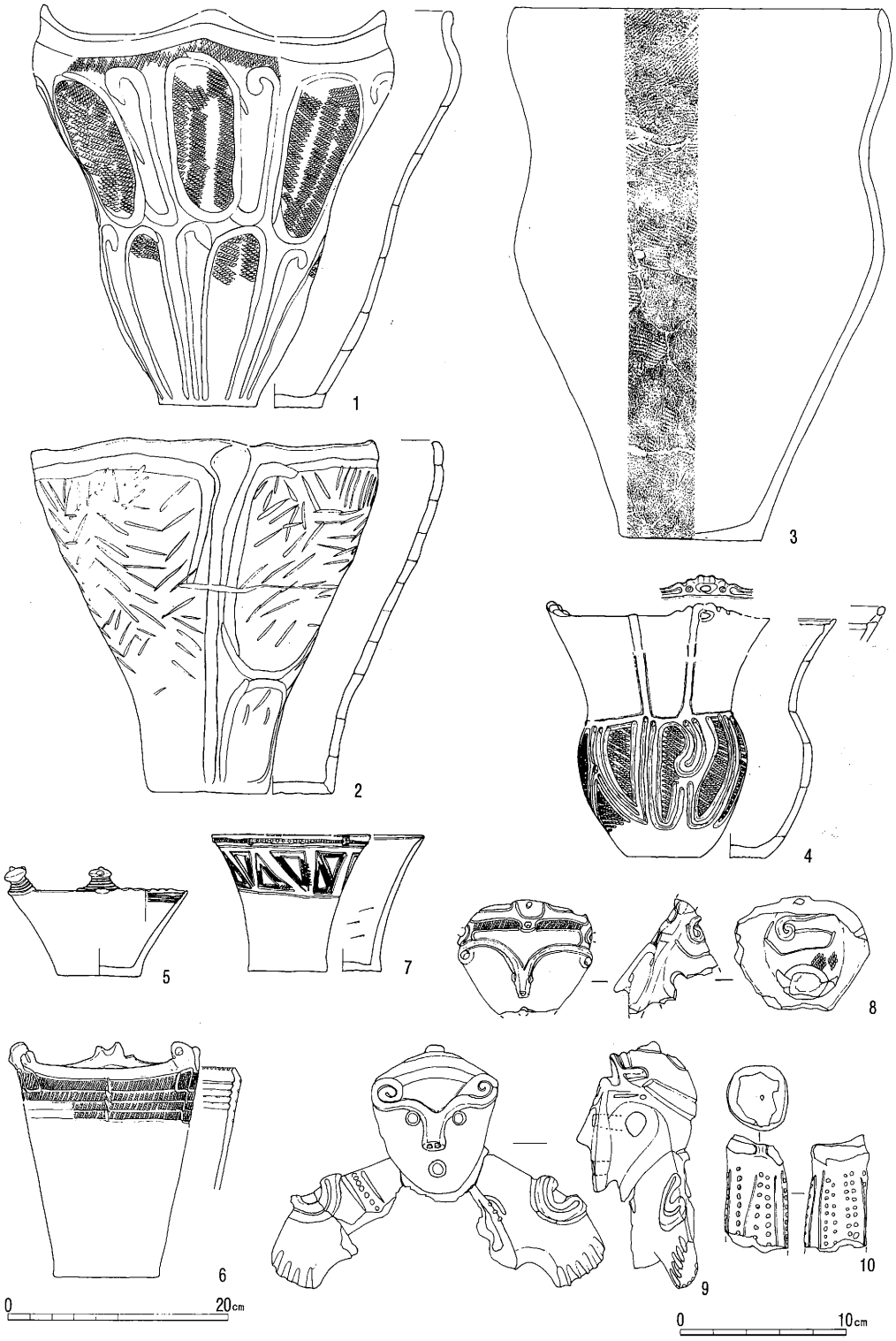
北村遺跡の地形形成過程について前掲書では，東部山地を主要な供給源とする地滑り性崩落層を，縄文中期以降比較的短時間に形成された段丘堆積物Ⅰ群と捉えてきた。しかるに，今回の調査によって，段丘礫層を覆うⅡ群堆積物が，Ⅰ群堆積物の下に見られること，Ⅱ群堆積物が無遺物層であることを主要な根拠として両者を入れ替え，Ⅰ群堆積物＝奥沢扇状地の初期的堆積物，Ⅱ群堆積物＝地滑り性崩落層と理解しておきたい。これによって，段丘堆積物Ⅰ群が形成されたのは縄文中期中葉以前，同じくⅡ群は中期後葉の比較的短い時間内ということに訂正される。

本年度の調査は，Ａ区・Ｂ区中央部・Ｃ区西端・Ｅ区北側を対象に行われた（第６図）。

Ｅ区古代面では，502・503号溝の続きが検出され，これにより，昨年度調査済み503号建物址が，２本の溝と１列の柱列によって囲まれることになった。また，508号建物址に対応する509号建物址が確認され，510号建物址等とともに比較的大きな柱穴をもつなど，極めて特徴的な掘立柱建物址の構成がみられる。510号建物址の東では，本址に切られる格好で土器集中がみられ，遺物はおよそ７世紀代に相当する。同様な遺物が，調査区東端の507号住居址からも出土しており，両者の対応関係が興味深い（第７図）。いっぽう502号溝に合流する507号溝は，側壁に平石を積み込むなど構造上特異性がみられる。弥生面は，調査区北東端において，竪穴住居址の一角が確認され，ほぼ同一面上に焼土址が散見される。縄文面では本年も，柄鏡形敷石住居址・配石・配石土坑を中心に検出され，集落を構成する遺構としては，昨年度の事例をほぼ踏襲する形となった（口絵５・６）。これらの遺構は，北東部に存在する地滑り性崩落層の高まりを



第７図　北村遺跡Ｅ区遺構配置図（古代）（１：800）



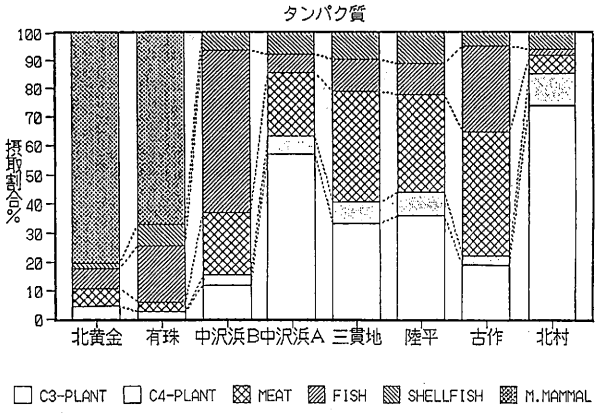
第８図　北村遺跡出土遺物実測図（１～７＝１：６，８～10＝１：４）

取り巻くように分布する。ただ，この高まり上からも数10基の土坑や単独埋甕が検出されており，これらの土坑が，何らかの建物を構成する要素ともみられるため注意を要する。また，北西部における住居址のあり方はこれまで以上に稠密度を加え，住居占地に一定の規制が働いていることが予想される。

Ｂ～Ｃ区の古代面では，昨年度からの延長で特に見るべきものはないが，該期集落の西縁がほぼ確定したといってよい。弥生時代の生活址については今回も確認されず，縄文面は，102号住居址西側についての情報が得られた。

なお，本年度は，独協医科大学・明治大学・東京大学に委託してきた人骨にかかわる調査・鑑定の中間的な報告が行われた。ここに，その概要を示すが，なお継続的に調査を進めていく予定であるので，あくまでも仮の報告であることをあらかじめお断わりしておきたい。

まず，独協医科大学で行われた形質人類学の鑑定によると，鑑定個体13例中，男性が５体（うち３体未確定）女性が４体（同じく１体を含む）である。特に昨年度報告の503・504号配石墓については，いずれも女性であるとの結果が得られた。年令は，６才以下のもの１体・６～12才が１体・12～20才が３体と，相対的に若年のものが多い。身長は，平均で男性が156.4cm，女性が149.7cmで，いずれも縄文人の平均身長と大きく隔たりがないとのことである。



第９図　採集狩猟民食糧摂取割合
（東京大学へ委託したコラーゲン分析の中間報告資料より転載）

いっぽう明治大学からは，人骨クリーニング後に行われた実測・撮影等の記録が届けられた。それによると，出土時における観察結果と大きく異なる点はなかったが，副葬品として，骨角製品が伴っている可能性について指摘があった。

また，東京大学が行ったコラーゲン分析による食生活の復原によると，タンパク質の供給源としてＣ３植物を専らとし，ほかにＣ４植物・陸上草食動物・貝・魚が加わるという画期的な報告がなされた。こうした傾向は，ほぼ同時期の海岸地帯に住む縄文人と比べてみると，極めて特徴的な様相を示しているという（第９図）。

以上，本年度調査の概要を示したが，整理作業は緒についたばかりである。今後，さらに取り組むべき課題を明確にし，慎重な分析によって中部内陸地における縄文人の実態に迫っていきたいと考えている。

（平林　彰）

参考文献

㈶長野県埋蔵文化財センター　『長野県埋蔵文化財センター年報』４　1987

(2) 十二遺跡

所　在　地：東筑摩郡坂北村字十二3246ほか
調 査 期 間：昭和63年４月14日～同年４月28日
調 査 面 積：1,500㎡
遺跡の立地：四阿山西麓の山間窪地
時代と時期：縄文時代，近世
主な出土遺物：打製石斧，磨石，近世陶器

本遺跡は三方を山に囲まれた日照のよい傾斜面で，現状は大部分が畑地で谷底は天水利用の水田が営まれ，かつては全面桑畑だったという。分布調査では石鏃，剥片など少量の遺物が採集されたというが，遺跡の範囲，内容は不明であった。今回の表面採集でも上記の遺物が得られたにすぎない。このため調査区全体にかけて幅２ｍ，総延長約700ｍのトレンチを設定し，重機で試掘を行った。この結果，一部に風倒木痕がかかったのみで遺構，遺物は検出されず，面的な調査は不要と判断されたため，土層断面を実測して調査を終了した。従ってこの遺跡はきわめて稀薄な遺物散布地とみられる。なお本遺跡の地形形成は，湖底堆積の砂・粘土が隆起し，浸食されて表面が土壌化したものと推定される。

（綿田弘実）

(3) 赤沢城跡

所　在　地：長野市篠ノ井塩崎越
調 査 期 間：昭和63年９月12日～同年10月14日
調 査 面 積：5.950㎡
遺跡の立地：篠山山系の先端，城山の西側斜面および谷部
時代と時期：弥生時代後期，平安時代，中・近世
遺跡の特徴：中世山城および弥生・平安・近世の遺物散布地

主な検出遺構

遺構／時期	溝
中　　世	1

主な出土遺物

土器・陶磁器：弥生土器，須恵器，中世の土器，中・近世陶磁器
石　製　品：石臼，砥石
金 属 製 品：寛永通宝，キセル

千曲川は善光寺平に入る直前で大きく屈曲し，北東方向に流路を変える。その屈曲部を眼下に望む千曲川左岸，城山上に赤沢城跡が存在する。今回の調査対象地はこの城山の西側斜面及び谷部である。

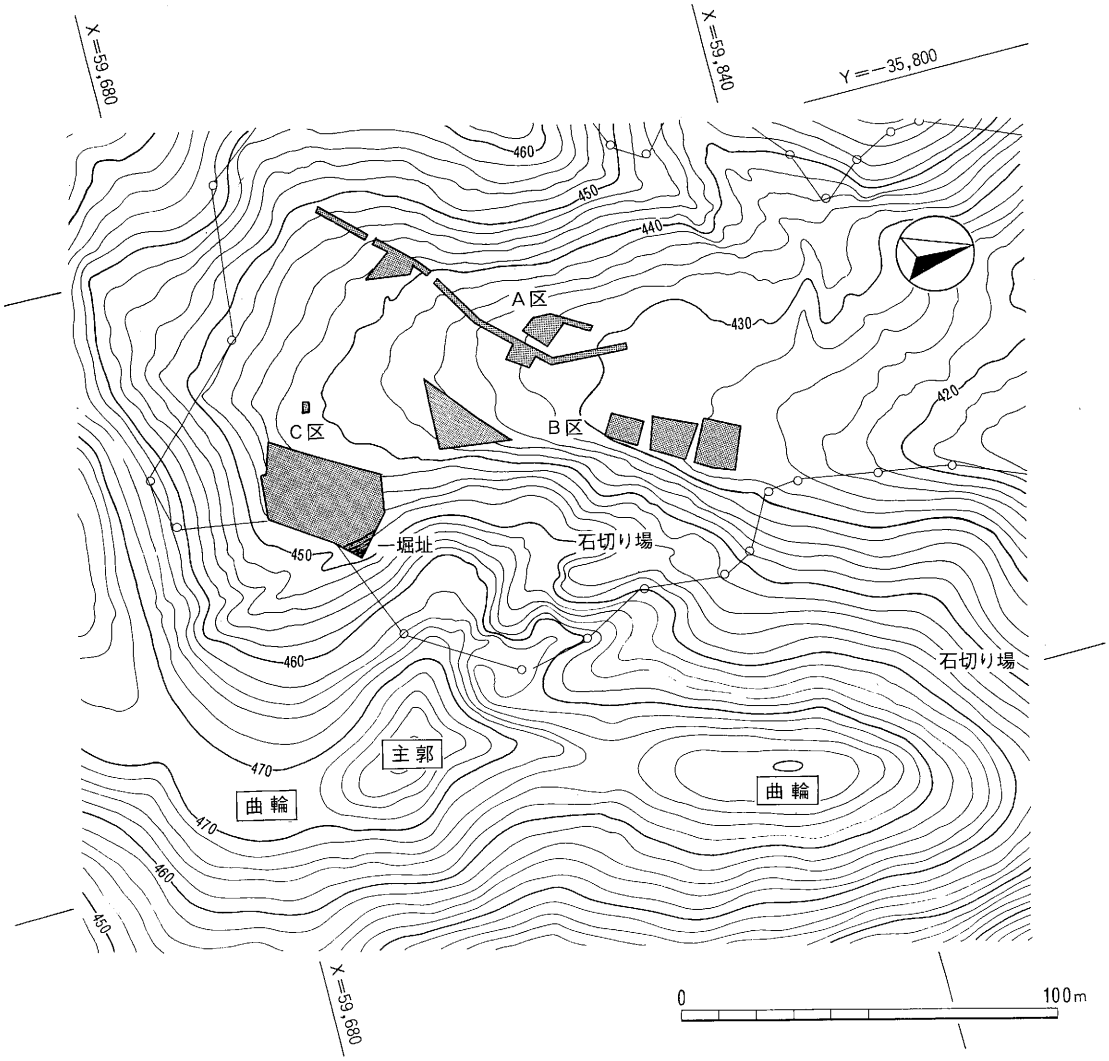
赤沢城は14世紀末には小笠原系の赤沢氏によって使われており，その後村上氏にわたり，川中島の戦いでは武田方の陣所に使われた可能性があると言われている。また，西側の谷部は千曲川沿いが湿地であった時期の古道が通っていたとされている。今回の調査では，城および古道関係の遺構の検出を主眼とした。

調査区は３ヵ所に分かれるが（第10図），各地区ともに後世の攪乱が激しく，遺構が確認できたのは長期間道として利用されてきた堀の一部だけであった。

弥生時代に関しては，Ａ区から箱清水式土器が数点出土したのみである。

平安時代についても遺構は存在せず，Ａ・Ｃ区で須恵器の破片が出土したにとどまる。

中世の遺物は最も多く，各地区から出土している。鎌倉時代にさかのぼる青磁が一点認めら



第10図　赤沢城跡調査範囲図（１：2,000）

第11図　赤沢城跡Ｃ区及び主郭・竪堀群

れるが，その時期の遺構が確認されなかったため，伝世品の可能性もある。多くは，15～16世紀の陶磁器および内耳土器・かわらけである。Ｂ・Ｃ区で比較的多く出土したが，建物や柵などの遺構は確認できなかった。

赤沢城の堀は，その大半が調査区外に存在し，調査区内では石切り場の攪乱によって失われている。この堀は赤沢城と後方の山とを分断する堀切りの延長部に当たり，主郭後方の２本の堀切りと２本の竪堀（計４本）がこの堀に集斂している（第11図）。堀の断面は，堀全体をＶ字状に掘ったのち溝底部分をさらに深くしたものである。調査区内では確認されなかったが，より上位では堀の外側に土塁が認められる。規模は，堀上面の幅が3.5ｍ，溝底の幅0.5ｍ，残存高1.3ｍを計る。

当初，Ｂ区の石垣の一部やＣ区の段状の部分が城に関係する可能性も考えた。しかし調査の結果，前者は近代，後者は近世以降であることが判明した。

近世にかかわる遺物は中世についで多く，各調査区で出土している。しかし，遺構は確認されなかった。

今回の調査区では，石切り場や耕作による攪乱が激しく，堀以外の赤沢城にかかわる遺構の検出はなかった。赤沢城の本体は調査区の東側であり，今後，赤沢城本体とのかかわりでこの地区の評価を行う必要があろう。

（寺内隆夫）

長野市塩崎付近の地形と地質

長野調査事務所が発掘調査している赤沢城跡，鶴前遺跡，石川条里遺跡等は，長野市塩崎地籍にある。

長野市塩崎は，長野盆地の南西端近くに位置し，地形的には犀川丘陵地と呼ばれる丘陵性山地の東縁部と，千曲川及びその支流の堆積によって形成された低平な沖積平野とから成っている。犀川丘陵地の東縁部に当たる塩崎地区の西部山地は，高雄山々地に属する。以下，山地・山麓・低地の各部について述べる。

Ⅰ　塩崎地区の地形

(1)　高雄山々地

山間部は聖川の東側に位置する篠山・高雄山山塊からなり，鮮新世の火山岩類から構成されている。又，その堆積地層は北西側に緩く傾いている。このため，両山塊共に北西側へ流れる沢が数多く発達し，北西側斜面が緩く傾斜をし，南東側は盆地側に平均20～30°の急斜面をなして落ち込んでいる。

また，聖川や佐野川の流れる方向は，篠山，高雄山を結ぶ方向に一致し，二つの川の支流は，本流に直交する方向を示している。

(2)　山麓部

山麓部は，崖錐性の堆積物からできている。緩斜面を呈し，NNE－SSW 方向に直線的に帯状に発達している。

この山麓緩斜面は長谷で200ｍの幅があり，地形断面は約 2×10^{-1} の勾配で，主に分級度の低い裾花凝灰岩の角礫と砂質土壌から構成されている。長谷寺の参道はこの地形の状況をよく表わしている。また，見林，四野宮でも，長谷付近とほぼ同様である。

これらの山麓緩斜面の地形は，背後の山腹を該む小渓流沿いに上流に向って湾入していることから，小渓流沿いに押し出した土石流状の堆積物によって形成された，扇状地と崖錐との中間的な性格を示す堆積地形である。

(3)　低地部

低地部は主として千曲川氾濫原である。

千曲川の流路は更埴市付近において北西から北東へと大きく転ずる。この流路の転換部より千曲川は，長野盆地に入り河況も変わる。即ち，これより上流は河床勾配が 3.8×10^{-3} と急で，網状に流路が広がり，河床堆積物は粗粒である。流路が北東に転じ長野盆地に入ると，河床勾配は，1.0×10^{-3} とゆるやかになり，川幅はぐっと狭まり蛇行状態となり，河床堆積物も急に細粒となりその分級度もぐっと良好となる。

塩崎地区はこのような千曲川の転換部のすぐ下流に位置するため，千曲川の氾濫時には，上流からの洪水の直撃を受けやすかったと思われる。このような氾濫のくり返しにより典型的な氾濫原が形成され，自然堤防や後背湿地などが発達した。

県道沿いに列状に並ぶ，上町，角間，山崎，平久保，旧篠ノ井の各集落は，千曲川左岸の自然堤防上に立地したものであり，後背湿地帯は，水田として利用されている。

後背湿地帯は自然堤防より約0.4～1.5m低く，地盤は細粒の粒土，シルトからなる軟弱地盤（N値１）でボーリング調査によるとその層厚は，少なくとも10m以上である。

この地帯の土層断面図（第12図）から堆積土層全般に言えることは，南西から北東にかけて緩やかな傾斜地形である。第⑤区付近では，隆起によるものと思われる微高地が，又，聖川付近では，その天井川に由来する微高地々形がみられる。

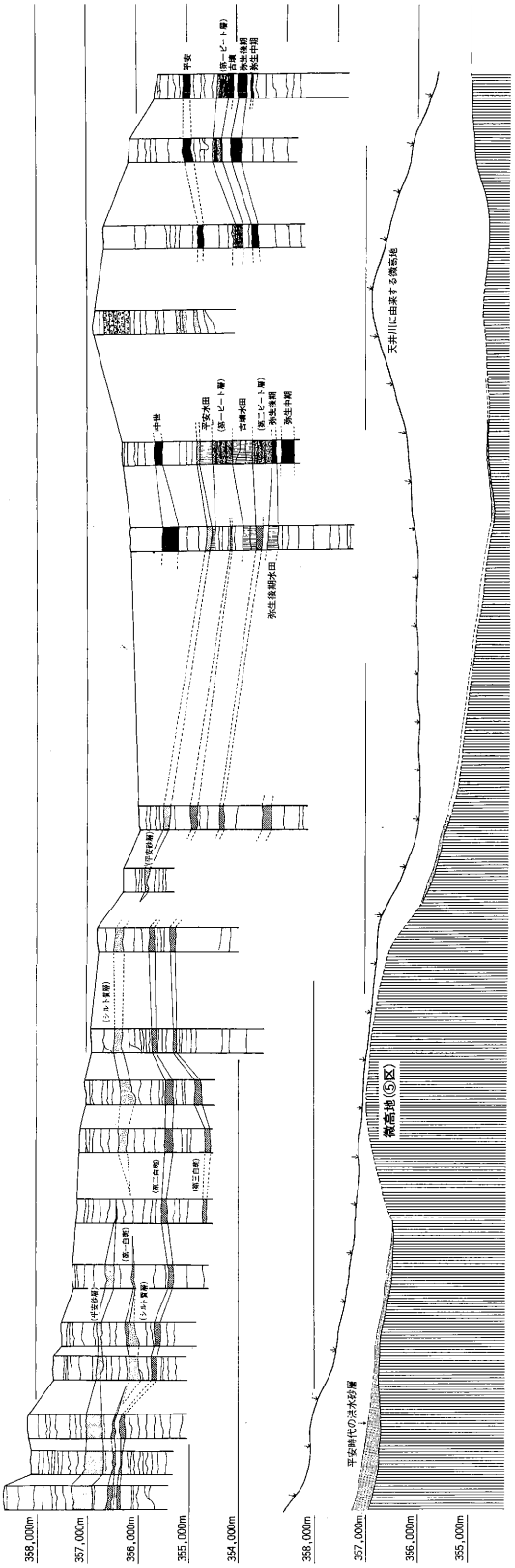
また，平安の洪水砂層を境に，それ以降に周辺の土砂の流れ込みが見られるが，それ以前には見られない。平安の洪水砂以前の土層は，その主体が重埴土もしくは，シルト混じりの粘土であることから，細粒の粘土が長年月間，ゆっくり，ゆっくり堆積したものである。

平安砂層は，粒径分析結果の分級度の平均は1,284を示し良好なこと，無色鉱物の割合が聖川のものと比べて多いこと，混入している細レキが，佐野川の物によく似ている。このことから，給源は，佐野川の影響を受けた千曲川であると言える。

II　塩崎地区の地質

高雄山々地を構成する地質は，裾花凝灰岩及び，篠山火山岩類である。裾花凝灰岩層は，長野盆地西縁に沿って帯状に分布する。当該地区においては，裾花凝灰岩層は，盆地側に面する斜面に，500～800mの幅で分布し，より西方の山地は，裾花凝灰岩層を不整合に覆う篠山火山岩類からできている。

聖山火山岩：下部と上部に分けられる。下部はしそ輝石・普通輝石安山岩の熔岩と同質の凝灰角礫岩からなる。上部は，聖峠



第12図　長野市石川条里遺跡土層断面図

の西の尾根から山頂に至る間に露出し，主としてカンラン石・普通輝石玄武岩の熔岩と同質の火山角礫岩からなる。全岩層は北に緩く傾斜している。

高雄山火山岩：全山がしそ輝石，普通輝石安山岩からなる。

篠山火山岩：カンラン石・普通輝石玄武岩の熔岩，凝灰角礫岩からなる。

佐野・中原の裾花凝灰岩：ほとんど全域に渡って熱水変質を受けて粘土化している。顕著な熱水変質帯は，ＮＷ方向に発達している。

三ツ峯火山岩：主として，黒色ち密なしそ輝石。普通輝石安山岩熔岩と同質の火砕岩からなるが，熱水変質を受けて，著しく粘土化した部分が見られる。また，ボーリング調査によるとこの岩層は隋所に砂岩や泥岩の薄層を介在していて，水中噴出物である可能性が大きい。

旧地すべり崩土：三ツ峯山体の崩壊によって生じたもので，“田毎の月”と呼ばれる特異な地すべり地形を呈している。堆積物の大部分は，安山岩礫を多量に含む安山岩風化粘土からなっている。

この他，盆地の西縁部には，押出し堆積物が発達しているが，ほとんど裾花凝灰岩のものである。

なお，塩崎付近の地質等については斎藤豊氏から文献提供ならびに有益な御教示を受けた。

（越川長治・中村敏生）

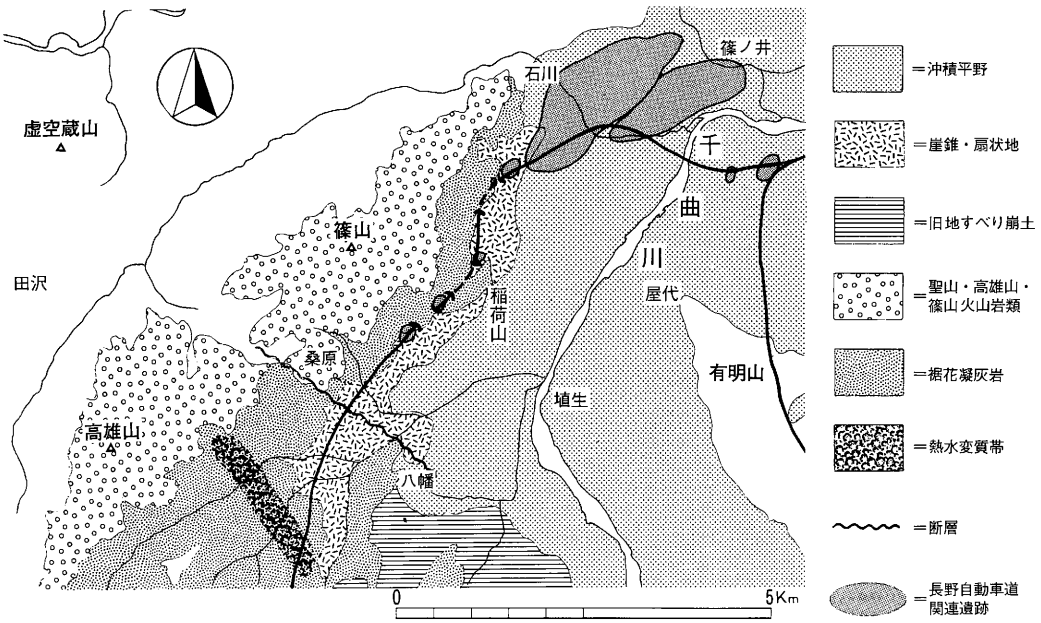
参考文献

斉藤豊・小林詢：『中央道長野線との関連よりみた，塩崎地区の地形・地質』　1979

加藤碩一・赤羽貞幸：『長野地域の地質』　1986

更級埴科地方誌刊行会：『更級埴科地方誌，自然編』　1968

経済企画庁：『土地分類基本調査―長野』　1974



第13図　長野市塩崎地区周辺の地質図（1：100,000）

(4) 鶴前遺跡

所　在　地：長野市篠ノ井塩崎字鶴前1583番地ほか

調 査 期 間：昭和63年４月18日～同年８月２日

調 査 面 積：5,900m²（総計11,300m²）

遺跡の立地：篠山々系の東向斜面

時代と時期：縄文時代前期，弥生時代後期，古墳時代初頭，奈良・平安時代，中・近世

遺跡の特徴：弥生時代末～古墳時代初頭の集落，平安時代の集落

主な検出遺構

遺構 / 時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	溝	井戸	その他
縄文	1					
弥生末～古墳初頭	24		18	4		
奈良・平安	12	1	32			土坑墓２
中世以降		3		1	1	山削り跡２
不明	1	1	81			

主な出土遺物

土器・陶器：縄文前期土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，灰・緑釉陶器，内耳土器，瀬戸，山茶碗

石　　器：石鏃，石斧，石匙，剝片

石 製 品：管玉，石棒

鉄・青銅製品：刀子，銅釧，銭貨

そ の 他：人骨，ガラス玉

はじめに

本遺跡は，篠山々系の山麓の東向き斜面に立地し，現水路及び市道湯之崎・四野宮線を挟んだ東側に隣接して石川条里遺跡が位置する。本年度はII地区（周知遺跡調査範囲）に，試掘トレンチ調査の結果遺構の広がりが判明したＩ地区（周知外）の1,400m²分を加えた5,900m²が調査対象面積となった。この内，II地区の中央を横切る市道犬石・湯之崎線直下は，来年度の調査に持ち越しとなった。検出された遺構は，縄文前期～中世のもので，そのすべてが裾花凝灰岩等の崖錐性堆積物層の上面で確認されている。そして，その上層部は，広範囲の時期にわたる土器を含む黒褐色土の包含層で覆われていた。弘化４年の善光寺大地震による土砂崩れの影響はみられなかった。検出面の傾斜角は，Ｉ地区で10°II地区で５°程度の値を示す。

以下，今回の調査概要を時代別にまとめ，若干の考察を加えることとする。

縄文時代　前期前半の住居址１軒をＩ地区で検出した。この他，石棒・山形押型文土器片・諸磯Ｃ式土器片と石器類が少量採集されているが，これに伴う遺構は確認されていない。

弥生末～古墳初頭　検出された遺構は，出土遺物からみると，弥生後期～末葉の在地土器に，外来系，特に北陸方面の系譜を引くと思われる土器群が加わる時期に集落を形成していたものと思われる。この集落は，石川条里遺跡側に土地の利用率の高さを認め，遺構の最大重複関係から３，４時期あったものと想定できる。この地が，生産域としての石川条里遺跡と深く係っていたものとして，注目される。

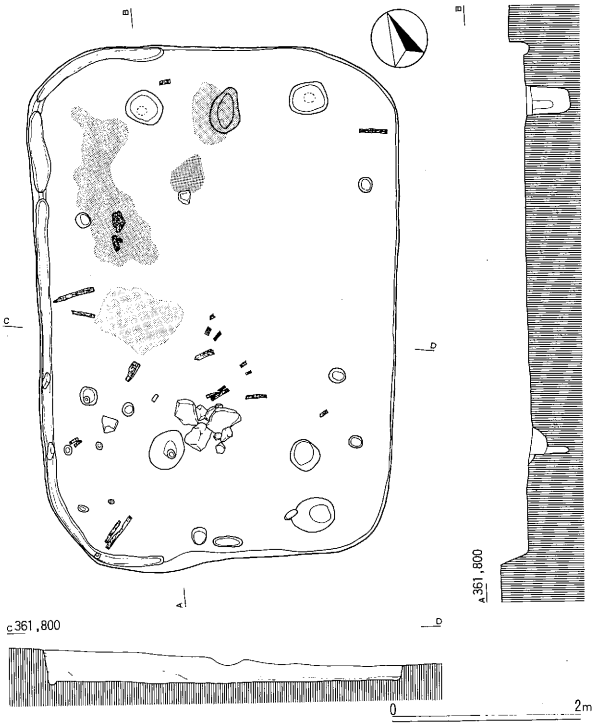
奈良・平安時代　奈良時代初期の遺構としては，Ｉ地区から住居址１軒を確認した。平安時代に属する遺構は，前代と比較すると山側に広く展開しており，自然環境下での集落の変遷が

第14図　鶴前遺跡遺構配置図（1：1,600）

窺える。東端には灰釉陶器を伴う墓址が1基存在し（第17図），その構築場所を本集落の墓域と位置付けるか，あるいは，私有地化の現れとみるかは，現段階では判断しかねた。

建物址は，遺構の切り合い関係から一棟は確実に存在している。

中世以降　中世に属する遺構は，明確には検出されなかった。Ⅰ地区において，山削りの跡を二カ所確認したが，土地の区画を意味するものか否かは不明である。時期不明建物址についても，その平面規模，構造，柱穴の形状等から，この時期に位置付けられるのかもしれない。来年度調査予定のⅠ地区西側には，弘化2年に屋敷を建てたと言われる所があり，その井戸が残る。弘化4年の善光寺大地震により倒壊したらしい。Ⅰ地区とⅡ地区の間の市道長谷北線直下から検出された溝址は，これに



第15図　鶴前遺跡4号住居址実測図（1：80）

伴う遺物がなく，覆土層から近世に構築された遺構と判断した。

まとめと今後の課題

今回の調査の結果，弥生時代末～平安時代に共通していることは，傾斜地上を利用して集落をかたち造っているという点である。個々の住居址は，谷側の東壁が削平や流失によりほとんどのものが明確な姿をとどめないが，残存率の高い遺構から南北方向に長軸をとる隅丸長方形が一般的で，平担地の集落と対比すると，時期による主軸方向の制約を受けず，自然地形を利用した独特な変化発達が細部に窺える。

また，検出された溝址の向きと住居址の分布状況をみると傾斜地上に形成された集落の性格を解明する上で，道址の存在をまったく否定するものではない。中世の遺構の存在と，その性格にしても，まだ不確実な点が残り，近世の遺構も今後の調査にまたねばならない。

したがって，鶴前遺跡の全容は，来年度の発掘調査の成果を得た上で，周辺遺跡との係りを含めて十分検討し，その性格を明らかにしたい。特に，この遺跡は，古墳時代初頭の土器編年上重要な時期に現れる集落といえ，善光寺平における古墳文化成立の手がかりを得る資料として，今後重要な位置を占めるであろう。

（伊藤友久）

第16図　鶴前遺跡遠景

第17図　鶴前遺跡70号土坑

第18図　鶴前遺跡４号住居址

(5) 石川条里遺跡

所　在　地：長野市篠ノ井塩崎3845-1番地ほか

調 査 期 間：昭和63年６月20日～同年12月26日

調 査 面 積：33,400㎡

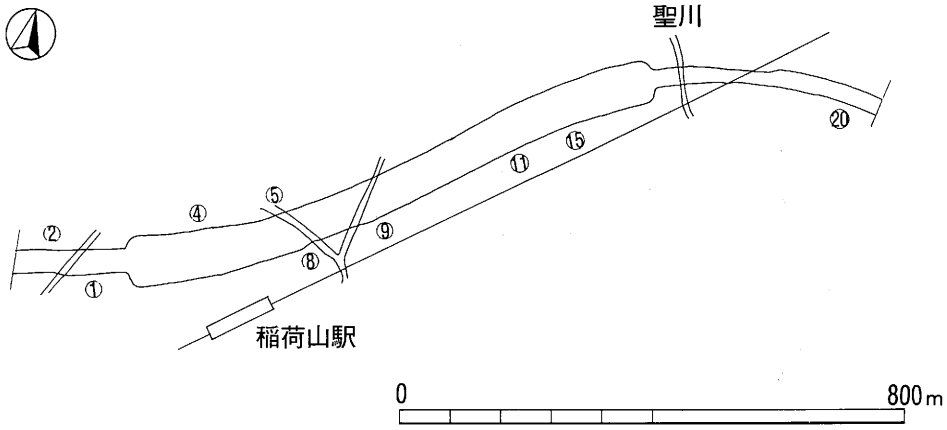
遺跡の立地：千曲川自然堤防西側の後背湿地

遺跡の概観：更級郡旧塩崎村の南西部に広がる現水田地域で，篠山山系の山麓に立地する鶴前遺跡と千曲川の自然堤防上に立地する篠ノ井遺跡群の間に位置し，千曲川の後背湿地にあたる部分に広がる遺跡である。

本調査に先立って，前年の12月に県教委による範囲確認調査が行われ，水田層と縄文の包含層の存在が確認されていた。また長野市埋蔵文化財センターの調査では，弥生時代までさかのぼる水田層の存在が確認されていた。

本遺跡全体が水田域と考えられていたが，ＪＲ稲荷山駅の北西部にあたる地域（⑤・⑧地区）は微高地部になっていて，水田面はそれを挟む南西部と北東部に広がっていた。

以下に，水田域・微高地・篠ノ井遺跡群につながる地域とに分けて調査の概要を述べる。



第19図　石川条里遺跡概略図（１：12,000）

１　水田域

主な検出遺構

遺構／時期	畦畔	杭列	溝
弥生･古墳	1	17	9
平　　安	44	1	3
中・近世			8

主な出土遺物

土器・陶磁器：弥生中期～後期土器，須恵器，灰釉陶器，内耳土器，中・近世陶磁器

石　　器：打製石包丁，石錘

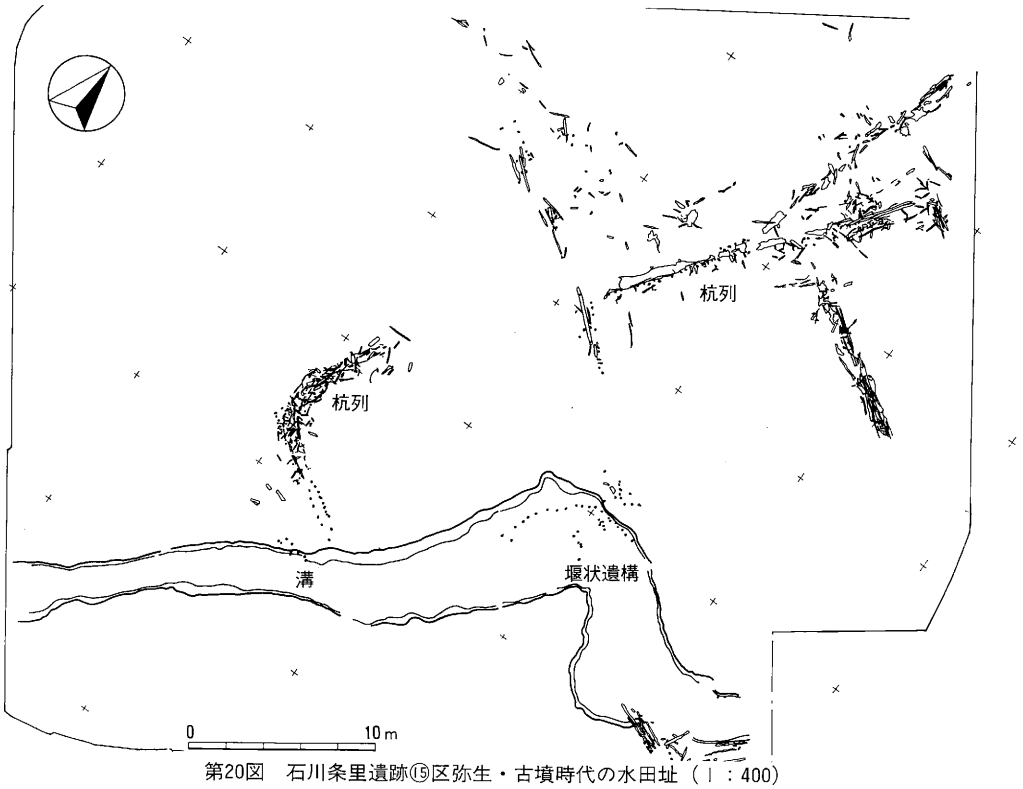
石 製 品：勾玉

木 製 品：斉串，農工具，建築部材，琴

自然遺物：獣骨，胡桃，籾米

弥生・古墳水田　水田遺構は聖川寄りの調査区を中心に検出された。水田面はプラント・オパール分析結果と出土遺物から，弥生中期まで遡ることが確認されたが，本年度の調査で弥生中期の遺構は溝址を検出したにとどまった。弥生中期の暗褐色土層，上層に20～30cmの灰色粘土層を耕土とする弥生後期水田面，更に泥炭層を挟んでその上層に暗灰色粘土層を耕土とする古墳水田面がそれぞれ検出された。弥生後期水田面は泥炭層にパックされた状況で検出され，大小の溝址，杭列が確認された。東西に伸びる大溝址は，灌漑施設となる水路と考えられ，うねりをもっている。古墳時代にも同じ水路が引き継がれており，堰状遺構となり得る杭列が，４ヶ所で確認され，護岸施設と考えられる杭列が古墳時代のもので６ヶ所確認された。遺物は，堰状遺構付近に集中しており多数の木製農具，箱清水期～古墳初頭の高杯，甕等が出土している。水田面は，杭列と手畦畔によって区画されたと考えられ，弥生後期水田に伴う杭列は９ヶ所，手畦畔は１ヶ所で検出された。これら杭列は古墳時代にも引き継がれたと考えられ，杭が数回にわたって補強されたかと思わせる杭の密な箇所もみうけられる。杭列は２列以上の並びを基本とし，杭と杭の間に，丸太材，板材，木皮，枝材を渡したり敷く状態にするものであった。杭材としては，板材，割り材を中心に，仕口をもった建築部材が使用され，２ｍを越す材もあった。杭列の中には幅１ｍを越す規模の大きなものがあり，本遺跡の杭列が水田を区画する機能だけではないことを示唆している。

今後の調査では，水田面の規模，灌漑施設等稲作技術の解明を中心に，稲作の起源，画期の解明を課題として追究していく必要があろう。



第20図　石川条里遺跡⑮区弥生・古墳時代の水田址（１：400）

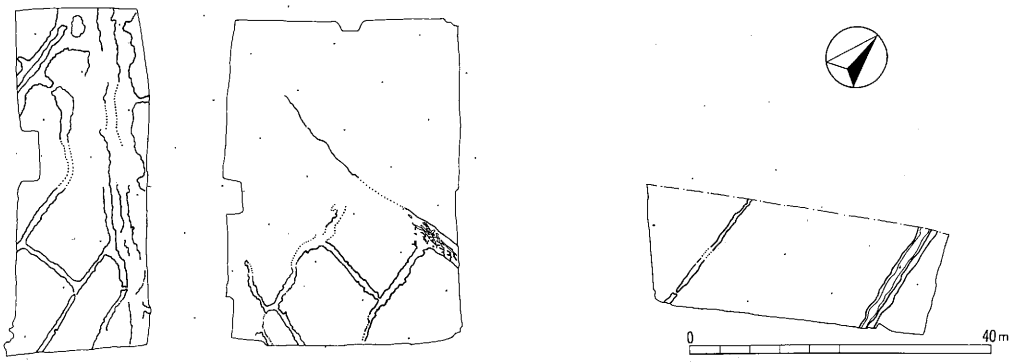
平安水田　本遺跡水田調査区全域で，類似する特徴をもつ「平安砂層」が確認され，その下層より黒褐色または暗黄褐色の埴壌土～重埴土を耕作土とする平安水田面が検出された。水田面とともに南北26条東西18条の大小畦畔も検出された。

平安砂層及び水田面からは，８世紀末葉～９世紀後半までの時期と考えられる遺物が出土している。また，ほぼ一時期に田面を覆った平安砂層は，千曲川を主たる供給源と考えられるが，水田埋没年代，要因に関しては慎重に究明したい。

条里地割は南北軸を基準としており，西に最大９°最小３°ずれている基軸となる。地割は半折形，長地形，更に長地形を２分した区画をもつ水田もある。聖川寄りの調査区においては，坪を画するとみられる畦畔が確認された。この畦畔の間はほぼ109ｍあり，中を約10ｍ間隔で割った畦畔が等間隔で検出された。この調査区の畦畔からは，畦畔の芯材，祭祀として使用された斉串や木簡等が出土している。更に現水田景観とこの坪境と思われる畦畔がほぼ一致することも確認された。

水田面は凹凸が著しくみられ，足跡，耕作痕と考えられるが明瞭に確認できなかった。畦畔には，水口施設を有するものもあり，今後の調査で水田規模，灌漑技術，条里地割等が解明されると思われる。

（臼居直之）



第21図　石川条里遺跡⑪・⑮区平安時代の水田址（１：1,000）

2　生活域（微高地）

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	祭祀土坑	溝	その他
縄　文	3		27			
古　墳				435	10	遺物集中箇所1
奈良・平安			5		3	
中・近世		2			25	井戸104
不　明			144			

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文前期初頭土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，灰・緑釉陶器，中世土器，中・近世陶磁器

石製品：紡錘車，勾玉，管玉，石釧，砥石，石臼，五輪塔，打製石斧，石包丁，抉状耳飾，石匙，石鏃

土製品：五徳，土錘，羽口，土玉

木製品：鋤，鍬，砧，鎌等農具類，板材，柱材，ハシゴ，杭等建築部材，カゴ類，曲物，漆器

その他：銅鏡，銅鏃，銭貨，鉄滓，人骨，獣骨

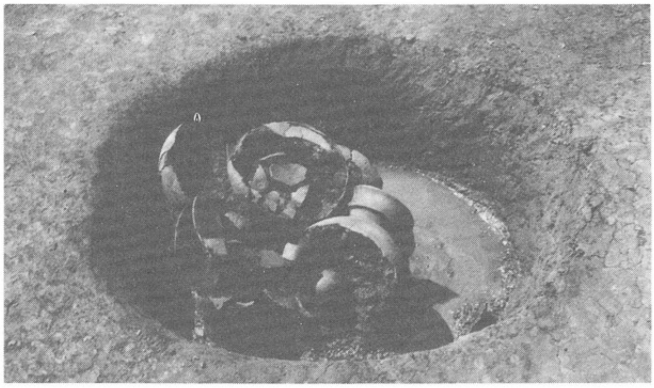
縄文時代　地表下約３ｍに，住居址３軒の他土坑多数が発見され，縄文集落の存在を明瞭にした。土器は繊維を含み縄文施文のされる尖底土器が大半で長門町中道，六反田遺跡例と共通し前期初頭花積下層式併行に比定される。集落もその時期に限定できそうである。なお，東西方向のトレンチにより，西側の限界はほぼ今年度調査で明らかになったと思われるが，東側については来年度調査への課題となった。

古墳時代　調査区東・西端にほぼ平行する形で，幅10～13ｍ，深さ約1.5ｍの大溝が発見された。この間約140ｍを測る。さらに調査区南端には，やはり大溝が前２者にほぼ直交する方向に検出された。結果的に，これらは一本の連結する溝で，この地区を大きく方形に区画するよう造営されたことが予測できた。この溝の年代は，出土遺物から古墳時代（４Ｃ末～５Ｃ）であることは明らかである。また，この溝の内側には同期の土坑が今年度400余基確認できた。古墳時代遺構の平面分布は溝と土坑の関係から，以上のように概観できる。次に，遺物及びその出土状況についてみたい。溝には１枚ないしは２枚の炭層がレンズ状に厚く堆積し，その面を中心に多数の遺物が分布する。小形丸底土器，高杯といった祭祀的色彩の強い土器をはじめ，管玉，銅鏃もあり，石釧・銅鏡片は特筆される。また溝下層部には農具である鋤，砧等の木製品や建築部材と思われる板材，柱材の多いことも見逃せない。この溝の内部側には杭がほぼ等間隔に打ち込まれている状態で検出されており，溝の機能を物語る施設と考えられる。土坑は例外的に深く大きいもののある他は，直径１ｍ前後の円形ないしは楕円形を呈し，深さ50cm前後の規模が一般的といえる。土坑内部にも溝同様，多量の炭と共に多くの遺物を含む例が多い。小形丸底土器，高杯，器台といった土器の他に勾玉，管玉，小玉といった装身具類を持つ土坑もある。いずれにしろ，本地区における古墳時代の遺構のあり方は，内容，規模共に特筆されるべきものと思われる。特に一帯には川柳将軍塚をはじめとする古墳が多く，溝が開口するまさにその方向約400ｍには前方後円墳である中郷古墳も位置する。本地区の性格は，そうした多角的な検討の中から得られると考え，同時にその歴史的意義付けが重要な課題となる。

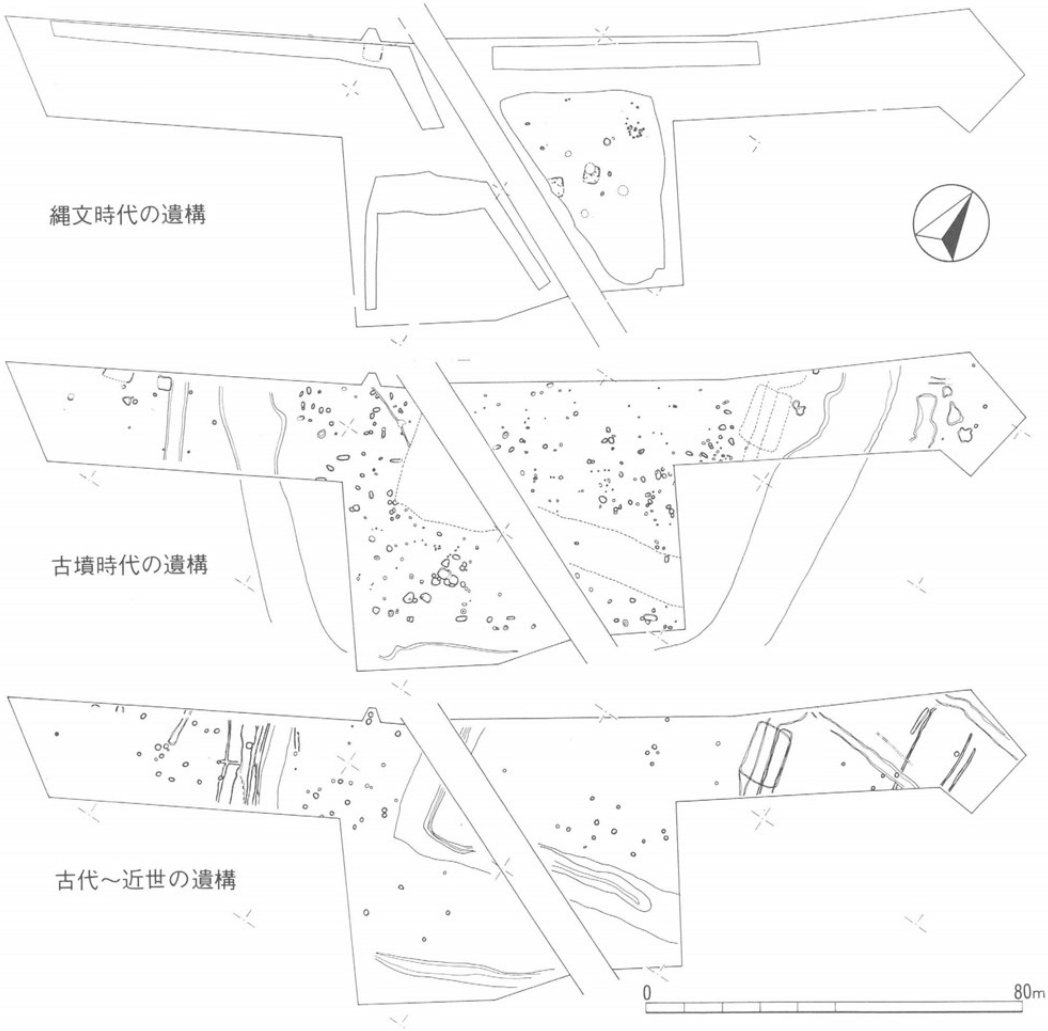
古代～中・近世　古代以降，この微高地上が本格的な人々の居住域として利用されていった可能性が強い。該期の遺構の時期的帰属については現時点で，遺物，層序等の検討が進んでおらず不確定な要素も多いが，調査時の所見に基づいて各時期を大雑把に概観してみたい。奈良・平安時代に調査区東端に数基の井戸と溝３本が現れる。この溝は水田を画する遺構である可能性も強く，土地利用，区画意識を探るうえで興味深い。中世前半（12～14世紀）には流水の認められる溝のあることに注目したい。このことは大規模な水路の回し事業があったと推定された。これを裏付けるかのように遺物量も増大する。中世後半（15～16世紀）になると防衛と考えられる溝が配され，館の構築が想定でき，居住域としての山場を迎える。大溝が２本あり，内側に方形に巡る溝（内溝と仮称），外にやや幅の狭い溝（外溝）が２重に方形に配される。この溝は西，南重視の配置をとり，特に内溝は大きく，西から南にかけてＵ字状に深さ約2.5ｍにも掘り込まれる。この溝によって空間は①外溝外（西部）・②外溝と内溝の間（西南部）・③内溝外（東部）・④内溝内部と分割可能で，各々に井戸，柱穴等の施設がある。この空間機能と施設との関係，空間々の関係は，館の性格やその主従関係を含めて意義深い課題といえる。

いずれにしろこの館の消長は，その背景に領主の統廃合や荘園の衰退と合わせて考えられると思われる。近世以降，枝溝のある溝が複数存在すること，細長い溝が多いことから水田に類する耕地と化したと想定でき，現景観に近い状況が作り出されたと考えられる。

（三上徹也）



第22図　石川条里遺跡⑤区1033号土坑



第23図　石川条里遺跡生活域（微高地）遺構配置図（1：1,600）

3　水田域と居住域の境界

主な検出遺構

遺構／時期	土坑	溝	杭又は杭列	遺物集中箇所	その他
弥　生		9	1		
古　墳	3	1	1	1	道状遺構1
奈　良	4		2		
平　安	17				

主な出土遺物

土　器：弥生土器，土師器，須恵器，灰釉陶器
石　器：打製石包丁，打製石斧，小形磨製石斧，大形蛤刃石斧
自然遺物：胡桃，籾米，種子類
そ の 他：管玉，土製紡錘車，木・漆製品

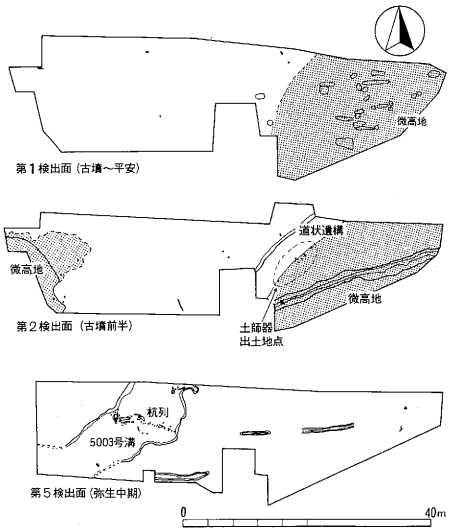
本調査区は石川条里遺跡と篠ノ井遺跡群の接点にあたり，水田域と居住域の境界を確認する目的で調査に入った。

弥生時代中期と考えられる面は第４，５，６検出面の３面である。第６検出面の東西溝からは，弥生土器・木製品・管玉・小形磨製石斧・打製石包丁等が出土している。第５検出面の5003号溝は幅10ｍ程で，これに直交する形で杭列と木材が伴っている。本址からは弥生土器・土製紡錘車・打製石斧，そして多量の胡桃が出土している。第４検出面で検出された東西溝は第３検出面でのそれとほとんど重なり合う形で検出されている。

弥生時代後期と考えられる第３検出面では，調査区の東西に微高地が，中央部に湿地が確認され，東側微高地において３本の東西溝が検出されている。

古墳時代前半期と考えられる第２検出面では，東西の微高地と中央部の湿地の高低差がさらに大きくなる。湿地には10～20cmほど泥炭層が堆積していたが，本層の性格を確認することによって当時の湿地の状況を理解することができよう。東側微高地では縁辺に道状遺構が検出され，これに沿って土師器が出土している。

古墳時代から平安時代にかけての土坑群が第１検出面にて検出され，これらは第２検出面での東側微高地に乗る形となる。なお，多量の籾米を出土した平安時代の土坑を検出している。



弥生時代より平安時代にかけての遺構や面をとらえたが，その地形変化と土地利用の変化をみることができた。弥生時代中期には微高地が形成されておらず，調査区内全体に溝が存在する。しかし，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて微高地が形成され，東側微高地と湿地の利用方法が明確となる。そして，特に平安時代に至っては，これまでの湿地より西側が水田域，東側微高地より東側は居住域となるようである。

（西山克己）

第24図　石川条里遺跡水田域と居住域の境界の遺構配置図（１：1,200）

〈上信越自動車道〉

(1) 下茂内遺跡（しもうち）

所　在　地：佐久市大字香坂字下茂内34-内ほか

調 査 期 間：昭和63年４月18日～平成元年１月26日

調 査 面 積：27,000m²

遺跡の立地：香坂川に接する寄石山北西麓緩斜面

時代と時期：縄文時代草創期～近世

遺跡の特徴：縄文時代草創期の石器製作に深くかかわった遺跡，縄文時代の狩猟場

主な検出遺構

時期＼遺構	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	溝	石器製作址	遺物集中箇所	焼土址	その他
縄文			129		21	11	3	石棺墓１
古墳	1					1		
平安	4	2	3					
不明		3	75	16				道址２　畝状遺構６

主な出土遺物

土　器：縄文時代草創期～晩期土器，弥生時代中期～後期土器，土師器，須恵器他

石　器：槍先形尖頭器，石鏃，石匙，スクレイパー，打製石斧，磨石他

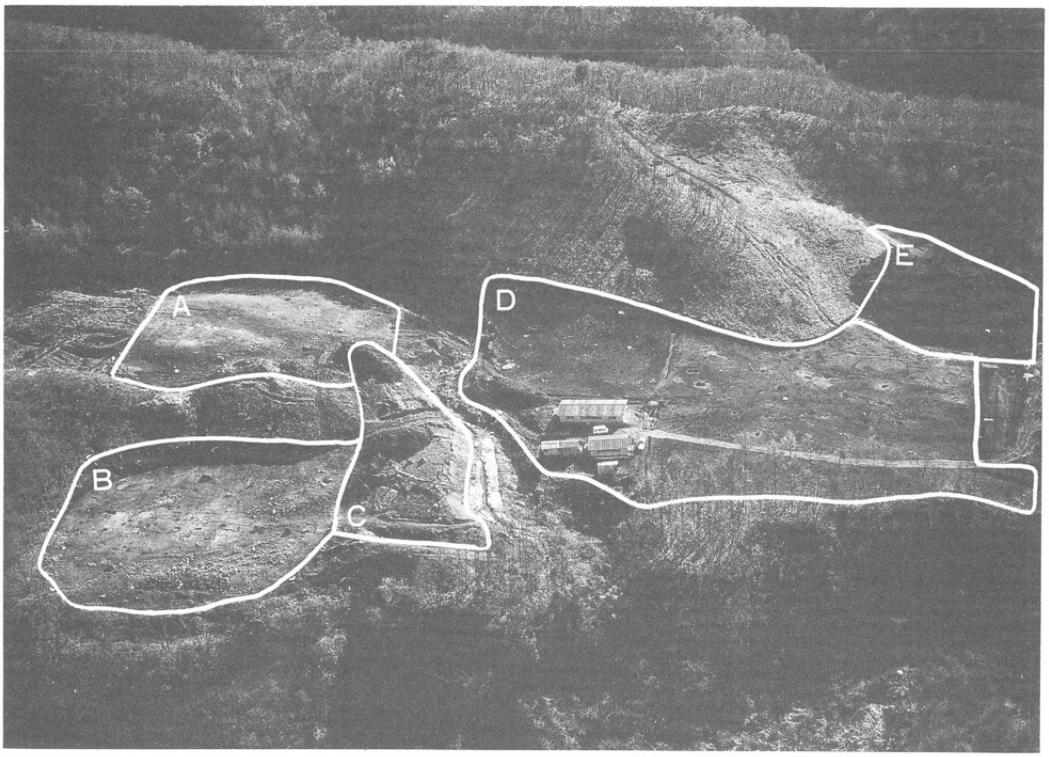
本遺跡は，寄石山の北西山麓緩斜面に占地している。西流する香坂川に北面し，香坂川と合流する茂内沢が流れるこの一帯は，標高900ｍを超える山間地である。

遺跡内の地形は，このふたつの河川の侵食によって形成された緩傾斜面とそれに接する小規模な尾根群から構成されている。調査対象範囲は，当初，茂内沢を挟んだ２地点の4,550m²に限られていたが，不明確点が多く，まずは，遺跡の広がりをおさえる目的でトレンチによる試掘調査を実施した。結果30,000m²を超える広大な遺跡であることが判明し，そのうち，用地内27,000m²を日本道路公団，県教委の協議により，調査対象範囲とすることになった。調査にあたって，地形の小異から調査対象区をＡ～Ｅ区に５分割したが，Ｄ，Ｅ地区については，内容からひとまとまりにして捉えたほうが良さそうである。

なお，土層の堆積状況は，ローム層（Ⅶ層）まで，概ね共通層５～６枚に分層可能であった。うち，Ⅲ層（平安時代～中・近世）・ⅣＡ層（縄文時代後期）・ⅣＢ～Ⅴ層（縄文時代前期）が文化層として捉えられ，また，縄文時代草創期の槍先形尖頭器及び剥片類が出土したＢ地区に限っては，Ⅵ層（漸移層）～Ⅶ層と更にその下のパミス層（ⅩⅣ層）の下にも該期の文化層（ⅩⅤ層）が認められた。以下地区をおって概要を記す。

Ａ地区　茂内沢右岸に沿って，東西に伸びる尾根及び沢沿いの緩傾斜面をこれとした。沢との比高差は，２～15ｍを測る。かつて水田として利用されており，尾根の上部については，その影響が，遺跡に及ぼされている。

尾根上では，鞍部緩斜面を中心に遺構，遺物を検出した。ⅣＢ～Ⅴ層にかけては，縄文時代



第25図　下茂内遺跡全景

前期の遺物の集中をみた他，一部の土坑では，押型文土器や，諸磯C式土器を覆土中より検出した。他にⅣA層上面では，畝状遺構，土坑，溝址を検出している。

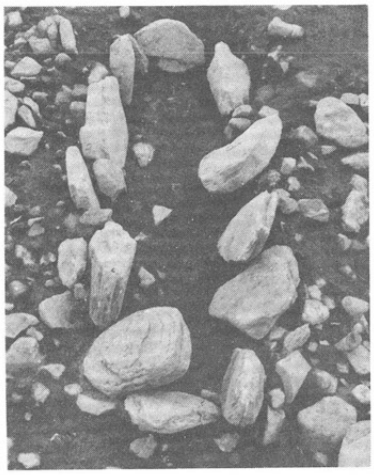
緩傾斜面では，9C後半～10C前半の竪穴住居址1軒，掘立柱建物址1棟がⅣA層上面で確認され，さらに同検出面からは，土坑，溝址等も検出されている。

B地区　茂内沢の右岸で，香坂川に面した緩傾斜面をこれとした。香坂川とは比高差5～10mを測り，東と南は尾根に囲まれている。ここでは，縄文時代草創期の石器製作址を認めた点で注視されるが，それについては後述する。

V層面では，縄文時代の土坑を70数基検出し，うち，少くとも10基は，陥し穴と考えられるものである。またⅣA層～V層にかけて，縄文時代前期～後期の遺物集中箇所を計8地点確認している。他にⅣA層上面では，2つの畝状遺構を検出した。東西及び南北に連なるもので前者のほうが，より新しい。プラントオパール分析を試みたが，イネ科植物の遺存は認められないものの，何らかの栽培植物の存在を示す結果が得られている。

C地区　茂内沢右岸の狭長に伸びる尾根をこれとした。尾根部の最大幅は，約15mで，茂内沢との比高差は6～9mを測る。

V層中では，縄文時代前期の遺物が，広範に認められ，あわせて，陥し穴1基を含む土坑10数基を検出した。しかし，縄文時代後期，弥生時代後期の土器も同層中から伴出することから再堆積によって成層した可能性が高い。



第26図　下茂内遺跡Ｃ地区石棺墓

Ⅳ Ａ層面では，扁平な礫を利用した縄文時代の石棺墓，平安時代の竪穴住居址（９Ｃ後半），土坑，溝址，畝状遺構を検出している。石棺墓は，尾根頂の中央に単独で存在していた。一部蓋石を欠失してはいるが，遺存状況の比較的良好なもので，周辺の出土遺物から察すれば，縄文時代後期の所産である可能性が高い。

Ｄ・Ｅ地区　茂内沢の左岸で，香坂川に面した山裾緩斜面をこれとした。茂内沢との比高差は９ｍ，香坂川との比高差は約23ｍを測る。

Ⅴ層面では，縄文時代の土坑・焼土址を53基検出し，地区の中央部で縄文時代前期の遺物集中箇所を確認した。土坑39基については，陥し穴と認定できるもので，山裾をとりまくように分布している。円・楕円の二種類，底部施設で小ピットが，０・１・３・３以上の４種類を看取するが，形態分類と覆土対比を行うことで数種のグルーピングが可能となろう。また焼土を伴う土坑のうち一基は，絡条体圧痕文土器と磨石が炭化物とともに出土していることから，一時的な屋外炉としての性格が推測される。

Ⅳ Ａ層面では，Ｓ字状口縁台付甕片が出土した古墳時代前期の竪穴状遺構，平安時代の竪穴住居址（９Ｃ後半），掘立柱建物址，焼土址，溝址，道址，土坑，古墳時代前期の遺物集中箇所，畝状遺構等を検出した。竪穴状遺構は，一辺２ｍ強の隅丸方形を呈し，各コーナーには柱穴を配すが炉はない。平安時代の竪穴住居址を２軒検出したが，他地区の点在する竪穴住居址も含めて「山褄み集落」の性格解明が問題になりそうである。畝状遺構については，Ｄ地区全体に広範な分布をみせており，これについても他地区と関連させながらその時期及び性格の解明が必要となろう。

縄文時代草創期の石器製作址について

現在遺物等の整理を始めた段階で，詳細については今後の検討に委ねることが多いが，発掘調査時での所見を中心に報告したい。

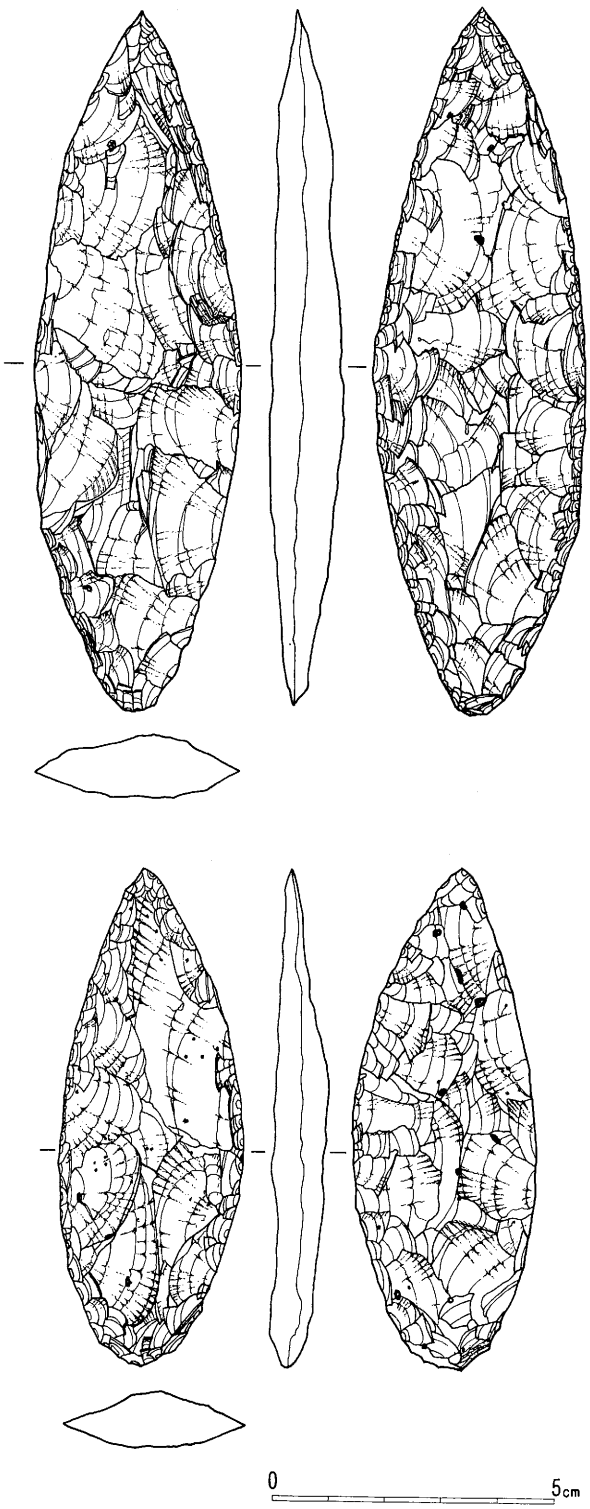
第27図の模式図にはⅦ層面のコンタ，パミス層下の東側の自然流路，にぶい黄色砂層（Ⅸ層）下の西側の自然流路及び，ブロックの範囲を示してあるが，ドット処理後のものではないので今後整理がすすむにつれて変更がありうることを予め記しておく。

第27図　下茂内遺跡Ｂ地区遺物出土状態

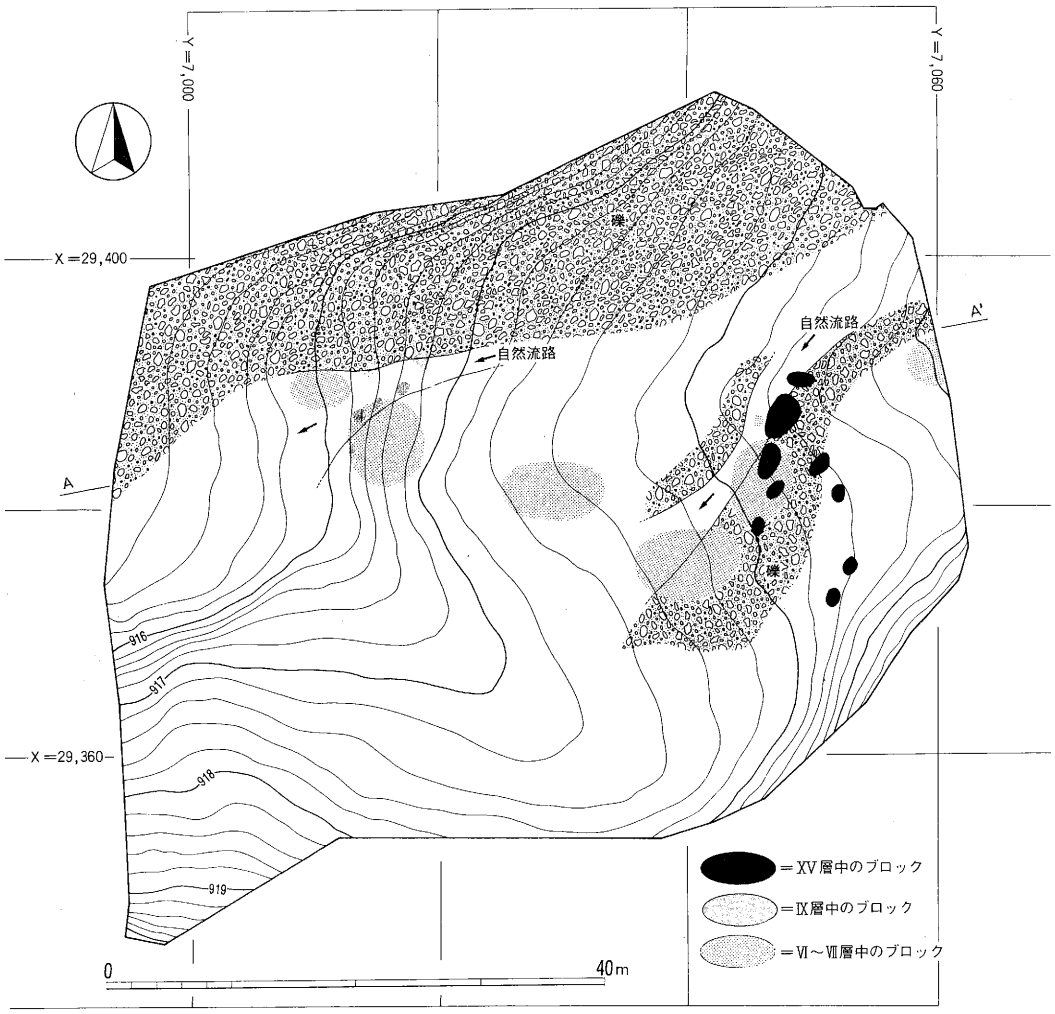
層位は，本地区全体をⅥ層がパックし，下

は中央部の台地の南側にⅦ層，北側でにぶい黄色砂に覆われる。その下は，A－A'のラインから南側にかけて降下したと考えられる表面黄色のパミスの無遺物層があり，さらにその下には，ややきめの細い砂質土がある。またA－A'のラインから北側は，パミス層は認められないものの主にⅦ層，にぶい黄色砂層と砂層が複雑な堆積をみせている。特ににぶい黄色砂はかなりの厚さがあり，数枚に分層され台地北側の自然の礫を包み込むように堆積している。ブロックは，無遺物層であるパミス層の上部，Ⅵ～Ⅶ層を中心としたものが６つ検出された。規模10～20ｍ，遺物は，ブロック内でやや小さなまとまりを示すもののやや散漫して検出された。東側では，パミス層の下で９つ，状況は異るが西側で６つ，ともに旧流路の縁辺を中心に検出された。規模50cm～３ｍと小さく，遺物は，２ｍグリッドで，ドット処理した数が，4,000点を超える場所もあり，土よりも遺物が多いという形容があてはまった。

合計21のブロックから出土した槍先形尖頭器は，木葉形のものが多く，完成品，製作途中のものが約200点，ドット処理した剥片類は30,000点にも及んだ。詳細な検討はしていないが，槍先形尖頭器製作時に生ずる特徴的な剥片が大小かなりの量認められ，スクレイパー類も見受けられる。さらに石質は，黒色でつやのある玄武岩が使用され，他にチャート製の槍先形尖頭器一点，黒曜石片10数点等で玄武岩以外のものは極めて少ない。玄武岩は，本地区の北側を流れる香坂川で現在も採集が可能で，ブロック検出時に露呈



第28図　下茂内遺跡Ｂ地区出土の槍先形尖頭器（３：４）



第29図　下茂内遺跡B地区ブロック分布図（1：600）

した礫中にも何点か認められている。

槍先形尖頭器で図示した2点は，ブロックからはなれた地点のVI層中から一緒に検出された。ともに剥片を素材にしたものと思われ，やや湾曲し，主要剥離面の調整には，背面よりもステップフレイキングがやや多く認められ，周縁部には，細部調整が施されている。他の槍先形尖頭器は，剥片とともに，製作工程の各段階の変遷がたどれる可能性がある。

以上概観してきたが，県下でも希にみる玄武岩原産地の槍先形尖頭器製作址をほぼ全掘したことの意味は大きいと言える。石器製作を中心とした遺跡の在り方，製作工程の復原，編年的位置等，残された課題は多いが，今後の整理を通して究明していきたい。

（二木　明・小林秀行・臼田武正・近藤尚義）

（2・3） 木戸平（きどだいら）A遺跡・吹付（ふつつけ）遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字曲尾312番地・字茂内口190番地（木戸平A）
　　：佐久市大字香坂字曲尾311番地ほか（吹付）
調 査 期 間：昭和63年８月17日～同年９月30日（木戸平A）
　　：昭和63年６月23日～同年11月15日（吹付）
調 査 面 積：3,000m²（木戸平A）　10,300m²（吹付）
遺跡の立地：八風山々系の南向斜面
時代と時期：縄文時代（木戸平A）　縄文時代中期末～後期前半（吹付）
遺跡の特徴：縄文時代の狩猟場（木戸平A）
　　：縄文時代中期末～後期初頭の集落，後期の遺物散布地（吹付）

主な検出遺構

遺構／時期		竪穴住居址	土坑	陥し穴	屋外炉	焼土址	屋外単独埋甕	配石	遺物集中箇所
木戸平A	縄文			6					
吹付	縄文	10	68	3	1	4	1	1	1

主な出土遺物

（木戸平A）
土　器：縄文中期末～後期初頭土器

（吹付）
土　器：縄文中期末～後期前半土器
石　器：石斧，石鏃，磨石，石皿，凹石その他
土製品：土製円板
石製品：浮子，石棒，丸石

木戸平A遺跡と吹付遺跡は，八風山々系南麓端の緩斜面に営まれた縄文時代の遺跡である。同一尾根上に位置するが地形の小異から尾根頂部である東側を木戸平A遺跡，西側の小さな谷をとり囲んだ尾根縁辺部を吹付遺跡としている。

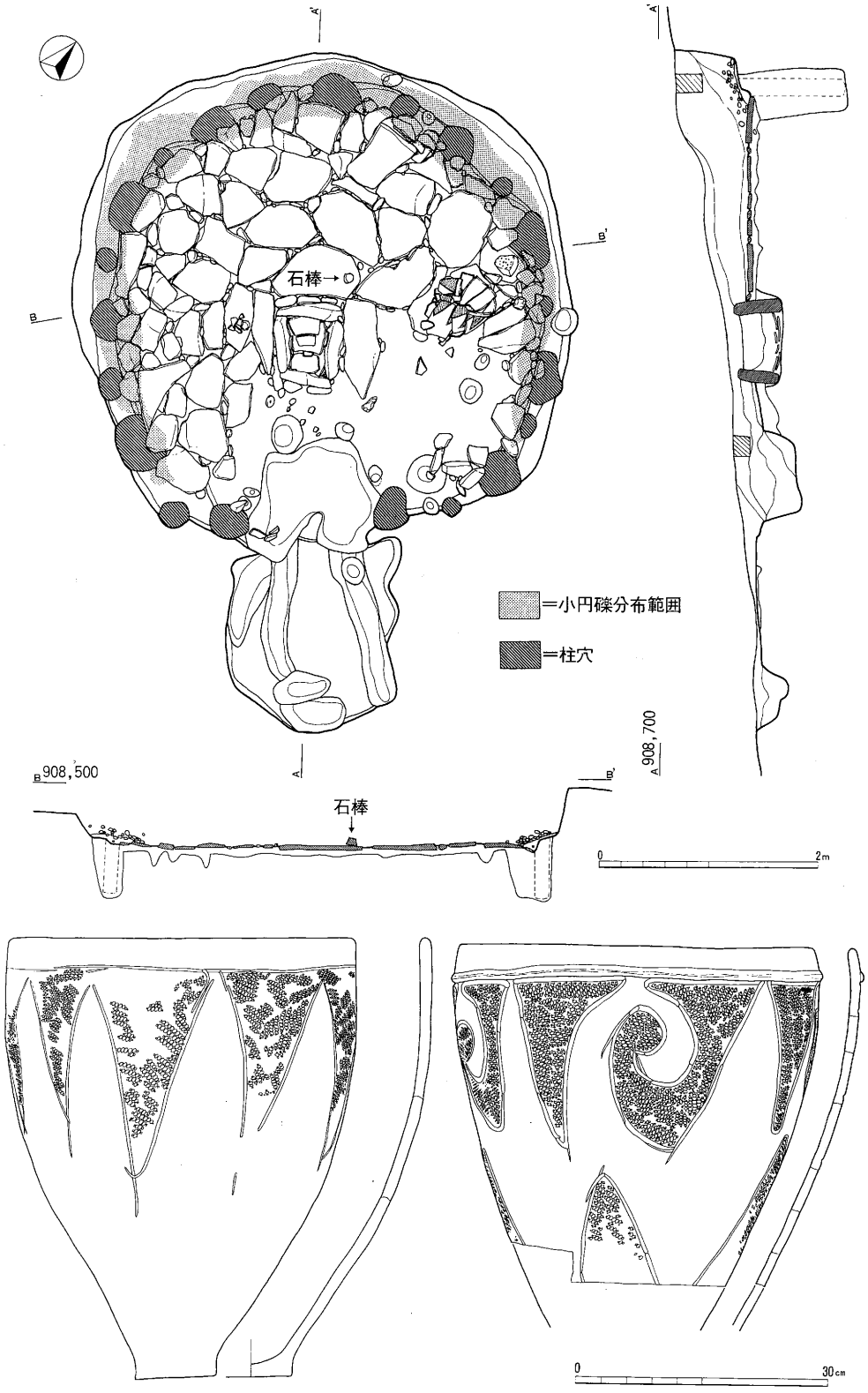
木戸平A遺跡　遺跡範囲の南端が調査の対象となった。試掘トレンチでは縄文時代中・後期の遺物を微量に採集したに過ぎないが，遺物出土箇所の面的調査によって対象区域東端から土坑６基を検出した。内５基は，規模・形状・底部構造・立地等近似するもので，いわゆる「陥し穴」として認定できるものであろう。平面形態こそ異なるが，残り１基も機能的には同様の可能性が高い。吹付遺跡東端からも同様な土坑を３基検出しており，これら陥し穴が木戸平A遺跡西端から吹付遺跡東端にかけて分布することが判明した。なお，時期の詳細は不明だが，吹付遺跡内に分布する陥し穴の覆土内遺物が皆無であることから，集落形成以前，すなわち縄文時代中期末まで下らない時期の所産と思われる。また，吹付遺跡より縄文時代早期後半の鵜ガ島台式土器が出土していることから，該期に位置づく可能性もある。

吹付遺跡　遺跡周知範囲のほぼ中央部分を横断する形で調査を実施した。谷を隔てて東西の地点で面的調査を行った結果，先の陥し穴を除く遺構・遺物の主要分布は，調査対象区域から遺跡南端にかけての範囲にあることがわかり，かつ，東西では内容が異なることも判明した。

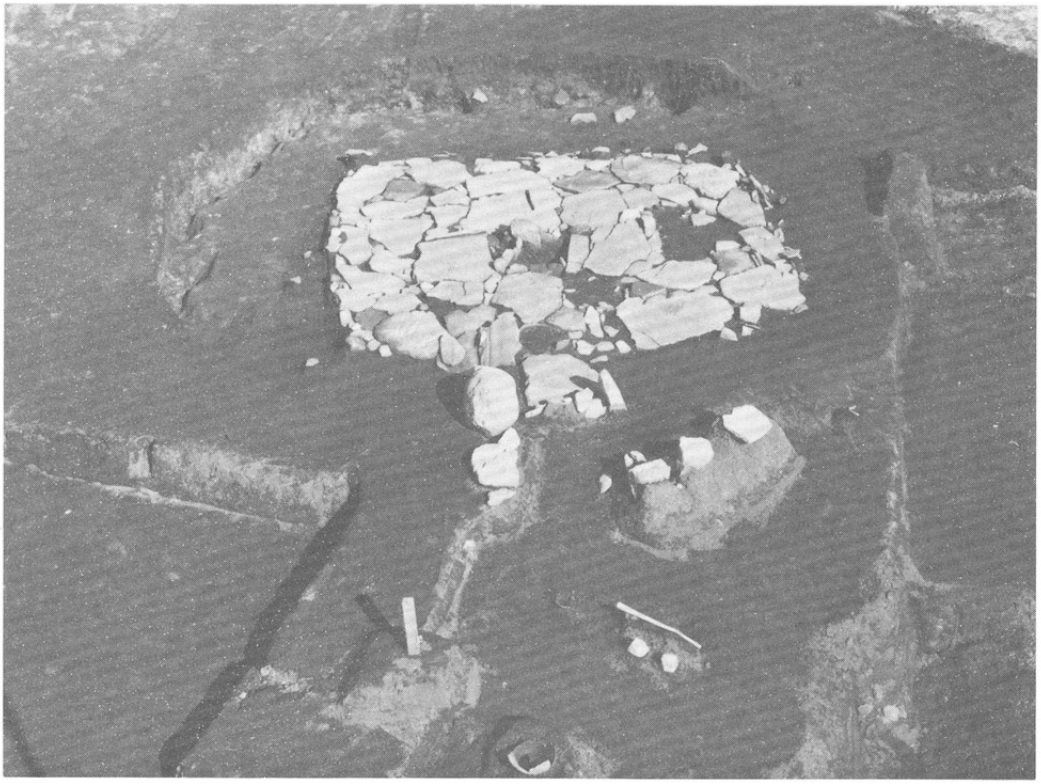
第30図　木戸平Ａ遺跡・吹付遺構（東側）遺構配置図（１：１,400）

東側は，木戸平Ａ遺跡が位置する尾根頂部と西側地点とを隔てた谷に沿う小起伏部に囲まれており，その最も低まった部分を囲むようにして縄文時代中期末～後期初頭の集落が営まれていた。ほかに，鵜ガ島台式，称名寺式，堀之内式土器の散布が若干みられた。集落は住居址10軒を確認したほか，住居址分布範囲内に散在的ながらも配石が認められ，一部範囲の外には墓坑ないし貯蔵穴と思われる土坑が群在する状況であった（９号住北側）。これらはすべて中期末～後期初頭の所産と考えられるが，伴出遺物から判断して少なくとも３段階の変遷が想定し得る。縄文時代の調査例が少ない佐久地方にとっては好資料となろう。集落論展開の面

第31図　吹付遺跡（西側）全景



第32図　吹付遺跡９号住居址実測図（Ｉ：60）同出土土器実測図（Ｉ：８）



第33図　吹付遺跡４号住居址

では言うまでもないが，特に柄鏡形敷石住居址２軒の検出は注視される。また，出土土器は加曽利Ｅ系を主体としながらも曽利系・唐草文系も少なからず伴出し，ここでの地域性を考える上で重要である。土器群の編年的位置づけも忘れることができず，あわせて集落の展開した様子を復原する試みも必要となってこよう。また，上信越自動車道建設に伴って既にいくつかの該期小集落を調査しているが，それらと相互関連づけて本遺跡の性格を明らかにする必要があるなど課題は多い。

第34図　吹付遺跡５号住居址出土土器実測図（１：３）

一方西側の地点では，やや急な斜面裾に堀之内式土器片の集中的分布をみたが，焼土址１基を検出したのみで明確な生活痕は確認できなかった。生活するには一見不向きな場と思えるものの，一般に該期には底地への進出が確立する一方で，斜面に遺跡の立地を求める傾向も認められており，そこに一例を加えることとなった。今後は当該期集落の立地の問題を考えていきたい。

（河西克造）

（4・5・6） 上中原遺跡・鶉ヲネ遺跡・東林遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字仙太郎369番地ほか（上中原）
　　：佐久市大字香坂字鶉ヲネ611番地ほか（鶉ヲネ）
　　：佐久市大字香坂字鶉ヲネ542番地，赤岩531番地，東山神946番地ほか（東林）
調 査 期 間：昭和63年６月９日～同年６月21日（上中原）
　　：昭和63年４月18日～同年６月22日（鶉ヲネ）
　　：昭和63年５月９日～同年６月20日（東林）
調 査 面 積：1,700㎡（上中原）　2,400㎡（鶉ヲネ）　7,900㎡（東林）
遺跡の立地：八風山々系の南向斜面
時代と時期：縄文時代早期～後期（鶉ヲネ）
遺跡の特徴：縄文時代遺物散布地（鶉ヲネ）

主な検出遺構（鶉ヲネ）

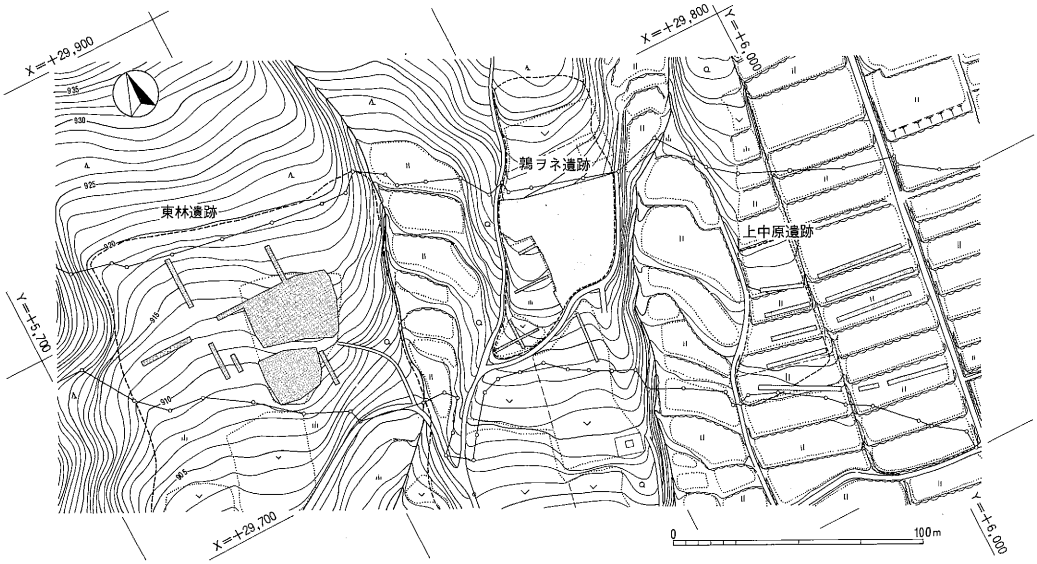
縄　　文：土坑１
時期不明：土坑７

主な出土遺物（鶉ヲネ）

土　器：縄文時代早期～後期土器
石　器：有舌尖頭器・スクレイパー

３遺跡はいずれも，八風山から閼伽流山に連なる山系より南方に伸びる尾根上に占地し，それぞれ小さな谷を隔てて狭い範囲に分布している。香坂川の右岸に続くこれら南向斜面は，畑地・田地として利用されており，造成の際に削平がなされたようである。また３遺跡ともローム層まで達するトレンチを入れたが，旧石器に係る遺物は認められなかった。

上中原遺跡　昭和初期において，かなり大規模な田地の造成がなされたようである。２ｍ幅



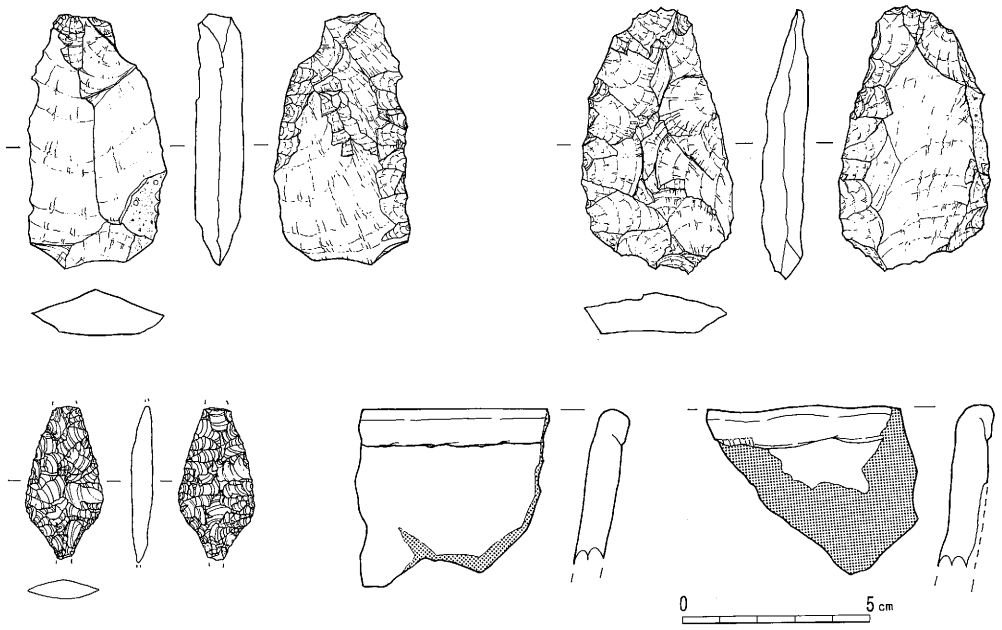
第35図　上中原遺跡・鶉ヲネ遺跡・東林遺跡調査範囲図（１：3,000）

のトレンチを入れ土層の観察を行ったが，その削平が遺物包含層である黒色土層の下部にまで及んでおり，また攪乱も広範囲にわたることが認められた。出土した縄文土器片も僅かであったことから調査を打ち切った。

鶉ヲネ遺跡　幅50ｍほどの狭小な尾根上に位置し，その中央部には旧谷状地形が認められる。主に流れ込みによる二次堆積によって，現地形が形成されたと思われる。その谷底に堆積した黒色土層中より，縄文時代早期の押型文土器や折り返し口縁をもつ土器片及び有舌尖頭器などが出土した。また黒色土層下のローム漸移層中に，玄武岩ないし安山岩質の石片が多く認められ，その内数点が表裏両面加工を特徴としたエンドスクレイパーないしサイドスクレイパーであった。ゆえに現地形の形成は縄文時代草創期～早期においてなされたと思われるが，二次堆積により成層した可能性が高いことから，文化層として捉えることには問題がある。

土坑を８基検出したが，谷状地形の肩部を中心に分布する。時期を判断し得るものは１基のみであり，縄文時代前期の所産と思われる。

今回の調査に先だち，200ｍほど南下方で佐久市教育委員会による調査が行われ，縄文時代後期の住居址５軒を検出している。本遺跡の調査対象区域は居住域外と判断できる。



第36図　鶉ヲネ遺跡出土遺物実測図（１：２）

東林遺跡　トレンチによる土層観察により，西半部は傾斜のきつい谷状地形で，崩落土などの堆積が認められた。比較的平坦な東半部に調査の主眼を置いたが，縄文土器片が数点出土したのみであった。分布調査の段階では平安時代の土器片なども表採されたが，調査対象区域内では遺構の存在は認められなかった。

（新海節生）

(7) 大星尻古墳群（おおぼしじり）

所　在　地：佐久市大字下平尾字大星尻2776番地ほか

調 査 期 間：昭和63年４月18日～同年９月14日

調 査 面 積：20,000㎡

遺跡の立地：平尾富士山麓の谷中斜面

時代と時期：縄文時代中期～後期，弥生時代後期，古墳時代，江戸時代

遺跡の特徴：縄文時代中期初頭～前葉の土坑群，弥生時代後期の土坑，古墳，近世墳墓

主な検出遺構

遺構 / 時期	土　坑	土坑墓	遺物集中箇所	その他
縄　文	27		1	焼土址１
弥　生	2			
古　墳				古墳１
近　世		1		墳墓１

主な出土遺物

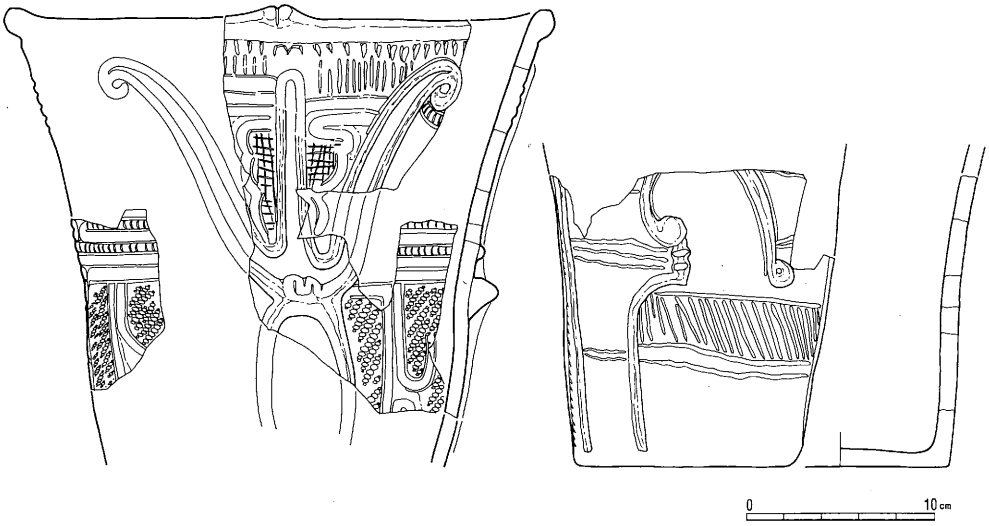
土　器：縄文時代中期初頭～前葉土器，弥生時代後期土器，須恵器

石　器：石鏃，石錐，打製石斧

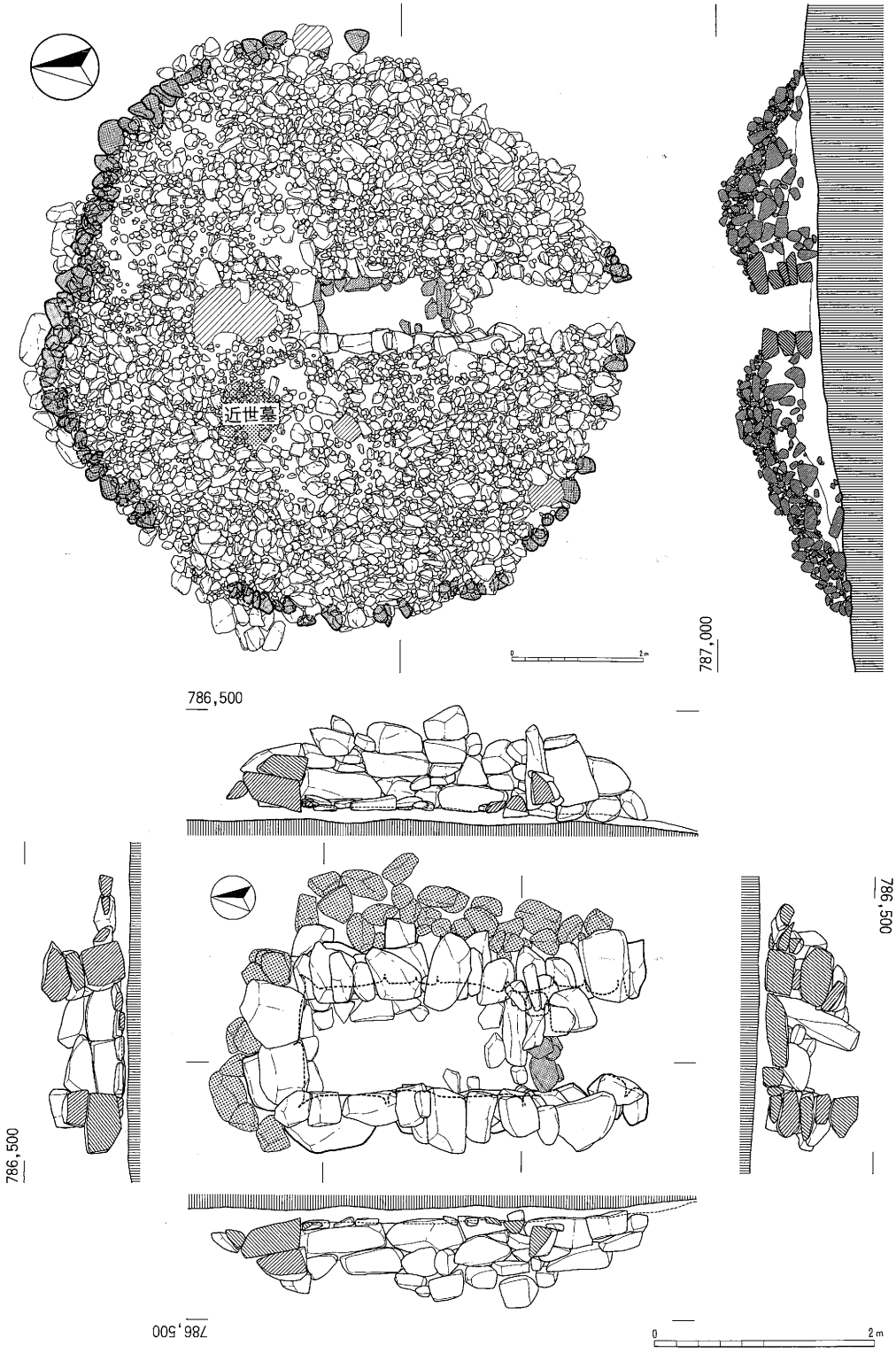
鉄製品：鉄鏃

その他：青銅製仏具，数珠，キセル，銭貨

大星尻古墳群は，平尾富士山麓に形成された尾根にはさまれる谷中斜面にある。西に接する尾根上には昨年度調査を行った丸山古墳群と丸山Ⅱ遺跡が所在する。南に向かって開くこの斜面は陽当りもよく，古くから開墾された様子がうかがわれる。今回調査の対象となったのは斜面上部で，古墳群北寄りに相当する。本古墳群は上信越自動車道建設に伴う予備調査等により，８基の古墳あるいは古墳様の石積みが確認された遺跡である。調査は上述した８基の石積みの精査・断ち割りを行う一方，それと並行して墳丘を削平された古墳の有無・遺物包蔵地の存否を確かめるため，調査対象区域全体の試掘調査を実施した。その結果，８基のうち２基を古墳



第37図　大星尻古墳群出土土器実測図（１：４）



第38図　大星尻古墳群１号墳墳丘実測図（１：100）同石室実測図（１：60）

及び近世墳墓と確認し，さらに縄文～弥生時代にかけての遺物包蔵地点を検出した。以下，それらの調査概要について，時代を追って記述する。

縄文時代の遺物包蔵地点は対象区域の東半部に検出され，拡張して調査したところ，大きく２つのまとまりをもつ遺物の分布とそれに重なる土坑群の存在が明らかとなった。時期は中期初頭～前葉を主体とし，若干中期後半～後期のものを含んでいる。土器群のうち中期前葉のものは，斜行沈線文を多用する土器や狢沢式・阿玉台式のほか千曲川流域に分布する土器あるいは日本海寄りの土器を含んでおり，地域性を反映していて興味深い。また，土坑群の中には土器や平石を伴うなど墓坑的な要素をもつものもいくつか認められている。総括的に見れば，縄文時代遺跡としての認定とその性格づけ，ならびに西方に隣接し時期的に併行する丸山遺跡との関係を探ることなど，今後に残された課題は多い。

弥生時代の遺構・遺物については，ほぼ縄文時代のそれと分布を同じくしていた。しかし，その質・量は共にきわめて乏しく，時期を弥生時代後期に特定しえるのみであり，ここでは多くを記すことはできない。

古墳は，主軸をほぼ北に向ける片袖式横穴式石室を主体部とする径９ｍ程の小円墳である。高さ約1,5ｍの墳丘を３段階に分け構築しているが，その最終段階に，転石として豊富にみられる溶結凝灰岩の角礫ないし亜角礫を積み上げていることからいわゆる「積石塚」と称されるものに類似する。墳頂からの盗掘を受けているため，石室側壁上端の一部及び天井石を欠失しているものの遺存状況は比較的良好であった。遺物は，主体部より長茎鏃数本分が細片となって出土した他，墳頂及び墳丘内より須恵器杯蓋，杯身の破片が出土している。在地須恵器窯による編年は決して確立したものではないが，須恵器の形式から察して，おそらく７Ｃ後半から８Ｃ初頭にかけての所産と思われる。占地する谷中斜面には，他に古墳は現存せず，単独墳の可能性が高い。丸山古墳群を初めとする尾根上に築かれた周辺の古墳群とは，群構成・占地・墳丘構造等で様相を異にしている点が興味深い。

近世墳墓は，長軸長約3,5ｍ，短軸長約3,0ｍの長方形を呈し，古墳同様溶結凝灰岩を利用して高さ約1,0ｍの墳丘を構築している。また，墳丘中央には頂が僅かに宝珠形となる無縫塔を造立させ，墳丘東側には階段状をなす２段の石積みを付属施設として有している。墳丘下部から石槨状の墓坑を検出し，墓坑内より数珠・青銅製仏具・キセル・寛永通宝等の副葬品を伴う男性人骨が出土した。石塔の形態的特徴及び副葬品から近世僧侶墓の可能性が高いと考えられる。近世墳墓の調査例は近年増加傾向にあるようだが，そこに一例を加えるとともに，今後は埋葬儀礼の類別化を通して，本墳墓の位置付けを明確にする必要があろう。

（百瀬忠幸・宇賀神誠司）

第39図　大星尻古墳群近世墳墓

(8) 丸山遺跡（まるやま）

所　在　地：佐久市大字下平尾字丸山2327番地ほか

調 査 期 間：昭和63年７月27日～同年10月28日

調 査 面 積：25,300㎡

遺跡の立地：平尾富士山麓の谷地形部分

時代と時期：縄文時代前期末～中期初頭・平安時代

遺跡の特徴：縄文時代前期末～中期初頭及び平安時代の居住域

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居址	土坑
縄文	1	17
平安	2	

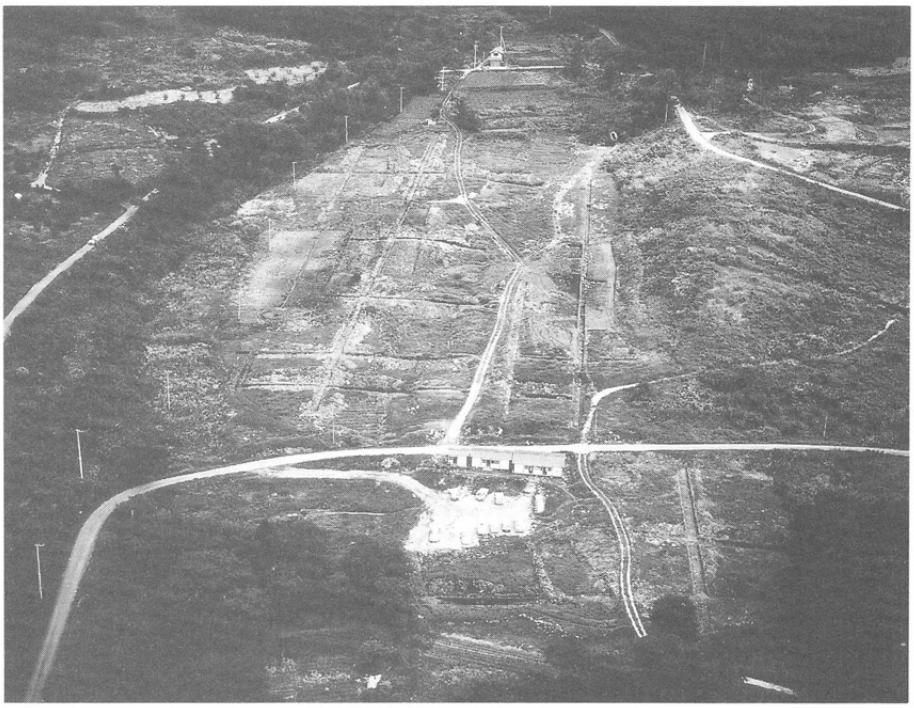
主な出土遺物

土　器：縄文前期末～中期初頭土器，土師器，須恵器

石　器：打製石斧，石鏃，石皿，凹石

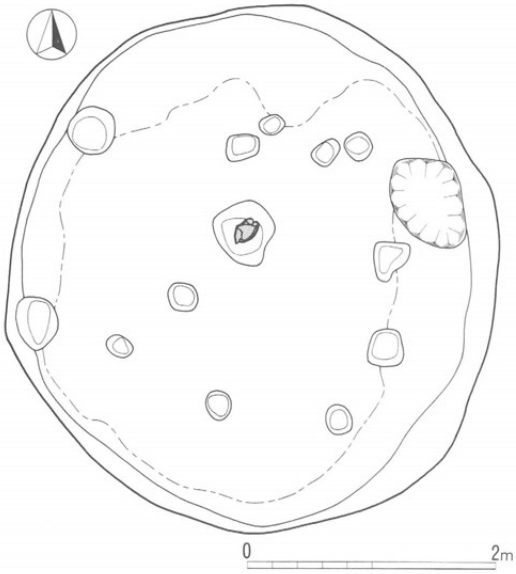
本遺跡は，平尾富士西山麓の谷部に立地しており，谷頭には下伴助Ａ遺跡が，東方の尾根には丸山古墳群，丸山Ⅱ遺跡が位置する。調査対象区域は，谷にそって南西に広がる遺跡の北半分にあたり，標高は765～800ｍを測る。

調査は，遺構の有無および土砂の堆積状況をつかむ目的で，人力と重機によるトレンチ掘りから開始した。その結果，現在一様に見える斜面も，旧地形においては中央部に小さな谷状地



第40図　丸山遺跡全景

形をもっており，その部分を中心に大量の巨礫を含む土砂の押し出しにより現地形が形づくられていることが判明した。その押し出しにより，広範囲にわたって地山や古い堆積層が削られているが，調査区のほぼ中央部，標高780～790ｍ付近に，縄文・平安時代の遺物を含む黒褐色土の堆積が認められた。このため，この部分の表土除去，遺構検出を行った。その結果，縄文時代の竪穴住居址１軒，土坑17基，平安時代の竪穴住居址２軒を検出した。この遺物包含層は，中央の谷状地形をはさんで東西両側に堆積しており，検出された遺構も東西に分かれている。



第41図　丸山遺跡３号住居址実測図（１：60）

縄文時代の遺構は，すべて遺跡西側で検出された。住居址は遺構中央に埋甕炉をもつものだが，その埋甕炉は，１つの深鉢をそのまま埋めこんだものでなく，大きな２つの破片を炉の壁に張り付けた状態となっていた。この土器は縄文時代前期末に比定されることから，住居址もこの時期の所産と考えられる。前期末の住居は単独で営まれることが多く，この住居もその特徴をもつものである。また佐久地方には同時期の住居址の類例が乏しいだけにいっそう注目されるところである。土坑群は，その出土土器より，中期初頭と考えられ，前述の住居址より時期的にやや新しい。この時期の遺構は土坑群のみで，住居址はともなわず，このことは近くの大星尻古墳群の状況と同様である。その性格については，判定できないが，大形の土器破片をともなうものが数基みられることから，墓坑的性格も考えられよう。

平安時代は，２軒の竪穴住居址のみで，そのほか同時期の遺構は検出されなかった。住居址内から出土した土器は，土師器，須恵器で灰釉陶器等はみられなかった。土器の多くは土師器甕で，ロクロ調整の北信系のものが多くみられた。時期的には平安時代前葉に比定されよう。この２軒の住居址は，調査区の東端と西端に位置するが，時期的に同じ頃であることから，短期間に営まれた集落であると予想される。

第42図　丸山遺跡１号土坑遺物出土状態

（中野亮一）

(9) 北山寺遺跡（きたやまでら）

所　在　地：佐久市大字下平尾字北山寺2572番地ほか

調 査 期 間：昭和63年４月25日～同年７月29日

調 査 面 積：5,100m²

遺跡の立地：平尾富士の西山麓

時代と時期：先土器時代・縄文時代・平安時代・中世

遺跡の特徴：平安時代・中世の居住域と中世の墓域

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	その他
平安	7		1	溝B
中世	3	1	50	火葬墓１
近世				

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文前期・後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，内耳土器，青・白磁，中近世陶磁器

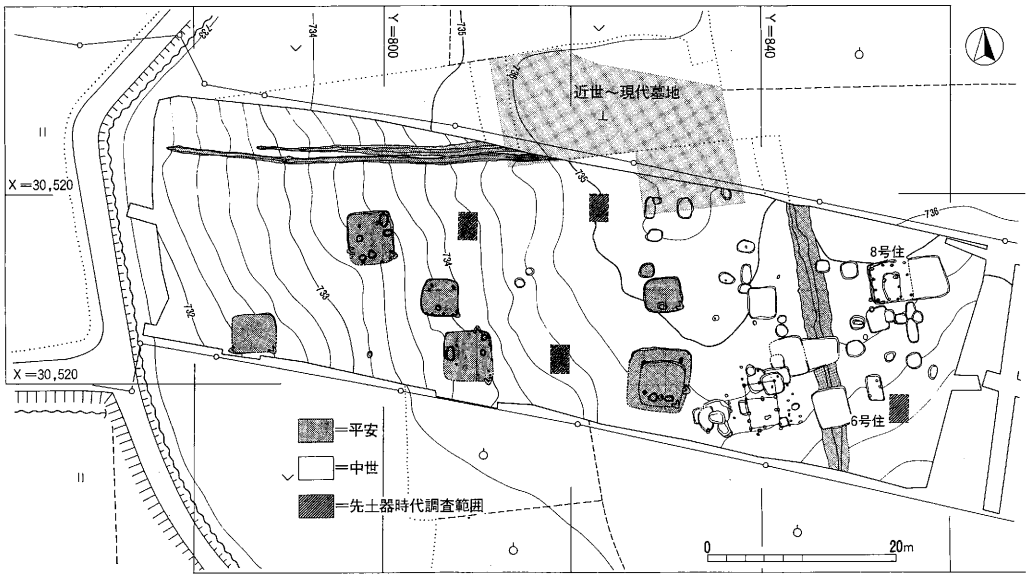
石　器：ナイフ形石器，石鏃，砥石，石臼

金属器：刀子，鉄鏃

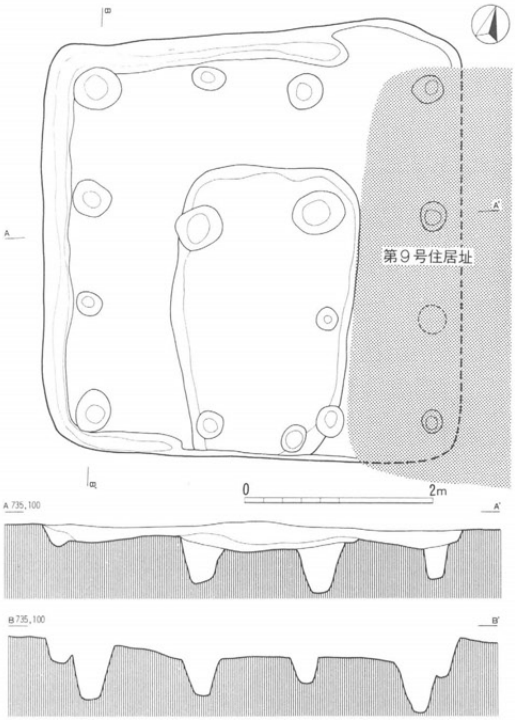
その他：苧引金具，太刀金具，銭貨

当遺跡は，平尾富士の西麓端に位置する。遺跡内の地形は比較的平坦で，一帯は果樹園となっている。眼前には，幅500ｍ標高差７ｍの南北に延びる低位の水田が広がり，湧水がみられる。背後の平尾富士山腹には，一本松・城古墳群が所在する。

試掘トレンチの結果，西半分からは遺構が検出されたが，東半分では深さ20cm位掘ると全面から湧水があり，踏査段階と同じく遺構の所在を想定しえなかったため調査対象からはずし，西半分を全面調査の対象とした。



第43図　北山寺遺跡遺構配置図（１：800）



第44図　北山寺遺跡８号住居址実測図（１：80）

第45図　北山寺遺跡６号住居址

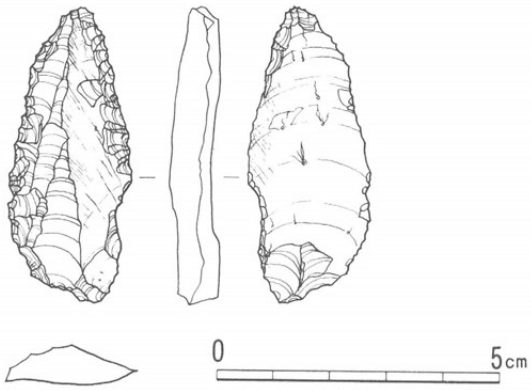
検出された遺構は，平安時代と中世の所産と考えられる。平安時代のものとしては，竪穴住居址７軒，溝３本，土坑１基である。発掘区の西側３分の２に広がり，住居址は直交すると思われる３本の溝の南西部にのみ検出されている。時期は９～11Ｃ頃に比定されそうである。

中世と思われる遺構は，竪穴状の家屋３軒，竪穴状遺構３基，火葬墓１基，土坑50基である。これらは，発掘区の東側に分布する。時期を推定し得る遺物は数少なく，竪穴状の家屋から宣徳通宝（1433年）が，火葬墓からは16Ｃ前半の大窯の小皿が副葬品として出土したのみである。

以上のことから，本遺跡が平安時代と中世の居住域及び中世の墓域であることがわかった。中でも墓域に関しては，発掘区中央北に近世から現在までの墓地が近接していることから，中世後半以降当地が墓域として利用されてきた可能性が考えられそうである。

なお，攪乱土中から先土器時代のナイフ形石器が１点出土した。遺跡確認のためローム層を掘り下げたが，遺物・遺構は検出されなかった。

（寺島俊郎）



第46図　北山寺遺跡出土ナイフ形石器実測図（３：４）

(10・11) 東大久保遺跡・西大久保遺跡

所　在　地：佐久市大字上平尾字東大久保745-1番地ほか（東大久保）
　　：佐久市大字上平尾字西大久保724-1番地ほか（西大久保）
調 査 期 間：昭和63年４月７日～同年５月６日（東大久保）
　　：昭和63年12月１日　　（西大久保）
調 査 面 積：東大久保遺跡8,700m²　西大久保遺跡500m²（総計6,400m²）
遺跡の立地：浅間山南麓の湯川左岸の台地

主な検出遺構（東大久保）

時期不明：溝１　土坑１

主な出土遺物（東大久保）

土　器：須恵器・土師器
石　器：打製石斧

両遺跡は，ともに湯川左岸の平尾富士南西麓に開けた台地上に位置している。遺跡はその高まり部分に占地するが，西端は，高位段丘の縁辺部まで達しており，また東端部以東は下降斜面となる。遺跡はこの段丘に沿って南北に隣接しながらのびている。佐久市教委による分布・発掘調査によって，縄文時代～中世までの長期にわたる複合遺跡であることが報告されている。

東大久保遺跡　調査対象区域は遺跡のほぼ中央部にあたる。トレンチ調査による土層観察では，ローム層直上まで耕土・客土・旧耕土等が20～50cmほど堆積していることが明らかとなり，古代の生活面を思わせるような包含層はみられなかった。このことより，この付近は耕作等によるかなりの削平を受けていることが想定された。その中でも比較的削平が少ない調査区中央付近に遺構の残っている可能性があると考え，表土剝ぎを4,500m²にわたって行ったが，遺構はその東端部において，溝１，土坑１を検出したほか，ロームマウンド10を確認したのみだった。遺物は須恵器・土師器の小破片が出土したが，磨滅が激しく，遺構等の時期決定は難しい。

また，遺跡東側の調査対象区外で遺物が表採されたため，遺跡の広がりをとらえる目的でトレンチをあけた。その結果，切・盛土されているものの旧地形がわずかに残っており，地表下130cmほどで打製石斧が２点出土した。このため，この付近を表土剝ぎし，検出を行ったが，遺構およびその他の遺物は確認されなかった。

西大久保遺跡　昨年度において残件となっていた宅地範囲500m²が今年度の調査対象区域となった。昨年度調査においては，遺物の散布がみられたものの遺構は確認されなかった。このため，本年度は遺構確認を目的として，路線方向に20mにわたってトレンチをあけた。しかし，遺物の出土はなく，遺構の存在も認められなかったため，調査を終了させた。

（中野亮一）

(12) 腰巻遺跡（こしまき）

所　在　地：佐久市大字上平尾字腰巻636番地

調 査 期 間：昭和63年10月14日～同年12月12日

調 査 面 積：2,000m²（総計5,300m²）

遺跡の立地：湯川左岸の低位段丘

時代と時期：縄文時代早期末～近世

遺跡の特徴：縄文時代の狩猟場・古墳時代から平安時代の居住域

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居址	土坑	溝	その他
縄文				陥し穴1
古墳	4(5)	2		竪穴状遺構(1) 畠址(2) 焼土址(1)
平安	1(2)			
中世			1	
近世			2(4)	
不明		47(48)		

（　）総数

主な出土遺物

土　器：縄文早期末・後期前半土器，土師器，須恵器

石　器：打製石斧，石鏃，スクレイパー

本遺跡は湯川左岸の低位段丘上に立地している。この段丘は，高位段丘から約17m下に，下位の氾濫原から約13m上に位置する幅40mの細長い段丘面を形成している。

今回の調査は，昨年度の調査に次ぐ二次調査であり，一次調査の北東側に接する地区である。今回の調査で発掘調査対象区の調査は全て終了した。

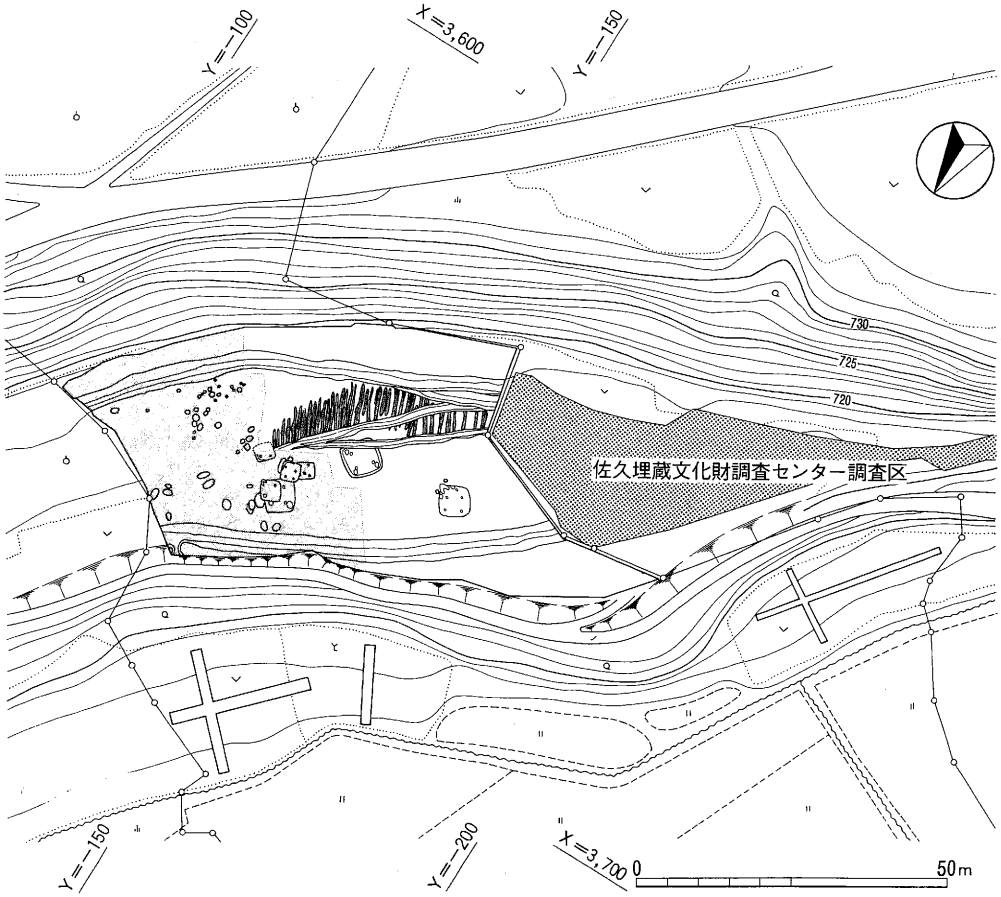
調査の結果，検出された遺構は，縄文時代の陥し穴，古墳時代前期の竪穴住居址・土坑，平安時代中頃の竪穴住居址，時期不確定の土坑47基である。その他，中・近世では一次調査で検出された3本の溝が段丘の縁辺部と断崖際で引き続き検出された。

古墳時代前期の遺構検出では，地山と覆土とが近似した黒色土であることから，遺物が出土しても遺構として確認できず炉や柱穴が検出されて初めて住居址と判断されるという状況であった。こうしてみると，一次調査において焼土址として取り扱った遺構も遺物の出土状況から住居址であった可能性も考えられる。この集落は伴出遺物からみて，一次調査のものも含め短期間に営まれた小規模な集落の様相を示している。構造的には，その規模に大小が認められ，主軸方向によっても2種類に分けることができそうで，相互には共通性はみられないものの，時期差としてその変化を捉えることも可能であろう。

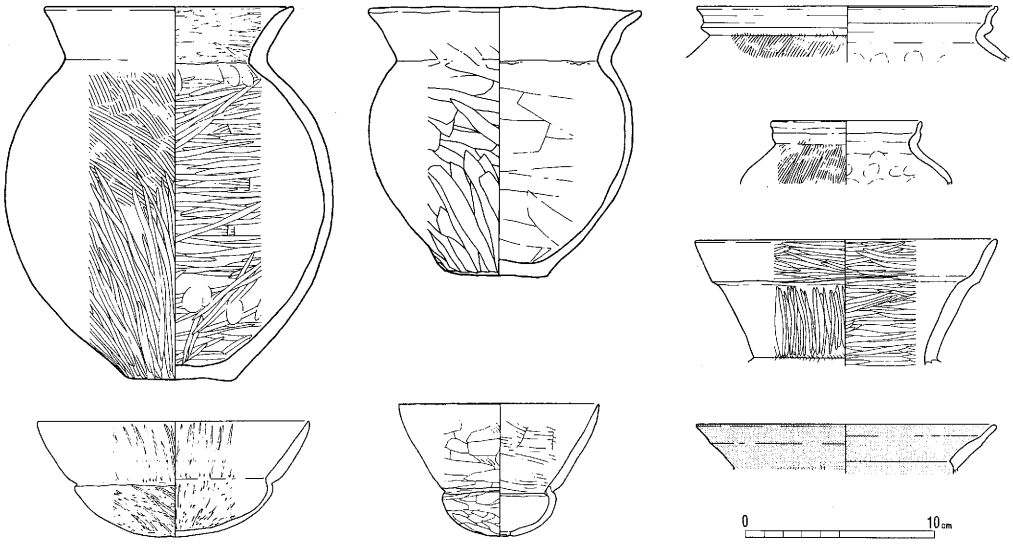
中世の所産と思われる段丘縁辺部の溝は，今年度，佐久市教育委員会によって調査された白岩城址（本遺跡の上流400m位の湯川左岸台地縁辺部に所在）から検出された堀の形状と類似していることから，この地が白岩城と何らかの関連があったことをうかがわせる。

今回，新たに縄文時代の陥し穴を検出したことは，狩猟場を決して山間部にのみ求めていたのではないことをうかがわせる。また，古墳時代前期の土器については，一括性こそ弱いが，概ね同時期の産物と考えられ，編年作業あるいは地域色解明の一助となるだろう。

（寺島俊郎）



第47図　腰巻遺跡遺構配置図（1：1,200）（無地アミは63年度調査区）



第48図　腰巻遺跡出土土器実測図（1：4）

(13) 栗毛坂遺跡（くりげざか）

所　在　地：佐久市大字岩村田字栗毛坂3969番地ほか

調 査 期 間：昭和63年４月５日～同年12月２日

調 査 面 積：7,800m²（総計78,500m²）

遺跡の立地：湯川右岸の河岸段丘，及び蟹沢の田切り地形に挟まれた台地

時代と時期：縄文時代中期～後期，弥生時代，古墳時代～平安時代，中・近世

遺跡の特徴：縄文時代後期の墓域，弥生時代後期から中世の居住域・生産域

主な検出遺構

遺構／時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	溝	遺物集中箇所	その他
縄文			(15)			集石(1) 土坑墓１
弥生	1					
古墳	7(24)			1		竪穴状遺構(1)
奈良	(8)	44(128)	(38)			畠址１(3)
平安	48(121)		19(39)		(1)	竪穴状遺構1(3) 鍛冶址１
中世	(4)	(12)	(56)	(5)		井戸(2) 柵列(1)
不明			261(772)	5(46)		焼土址１ 土坑墓１

（　）総数

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文中期～後期土器，弥生後期土器，須恵器，土師器，灰釉陶器，中・近世陶磁器

石　　器：打製石斧，石鏃，砥石

土 製 品：羽口

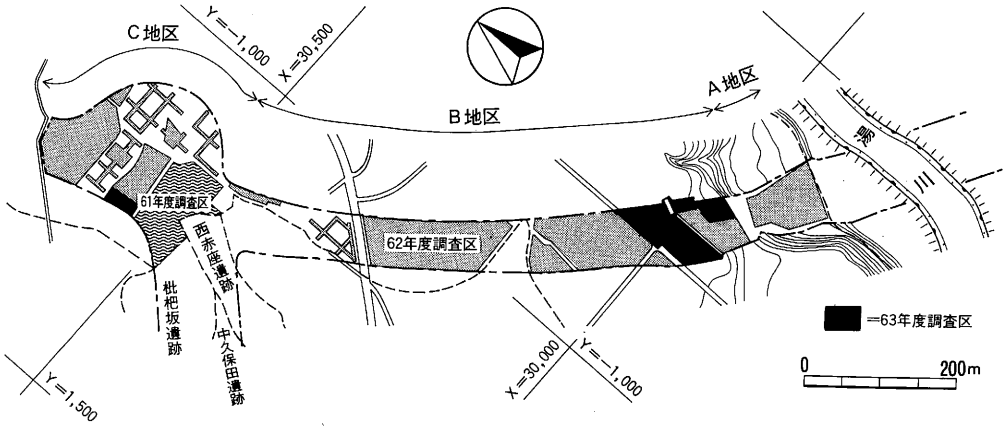
石 製 品：紡錘車，玉類

鉄 製 品：刀子，鉄斧，鎌，

そ の 他：銭貨

３年次目の調査にあたり，本年度で用地内すべての発掘調査が終了した。今年度の調査対象は，湯川高位段丘上のＢ地区東端部とＣ地区残件部分とである。調査面積は栗毛坂遺跡全体の１割と小さいものの，縄文時代後期，弥生時代後期の遺構が初めて検出されるなどの新たな発見と所見が得られた。以下，その概要を記す。

Ｂ地区の今年度調査箇所は，湯川高位段丘の縁辺部にあたる。調査区東端に深い段丘崖をもつこの一帯は，日当たりの良い立地条件に適した場所である。調査区中央には比高差５ｍ近い小段丘があり，調査区を上下段に分ける。検出された遺構は，竪穴住居址45軒，掘立柱建物址32棟，溝６本，土坑230基などで，時期は縄文後期から中・近世までと幅広い。

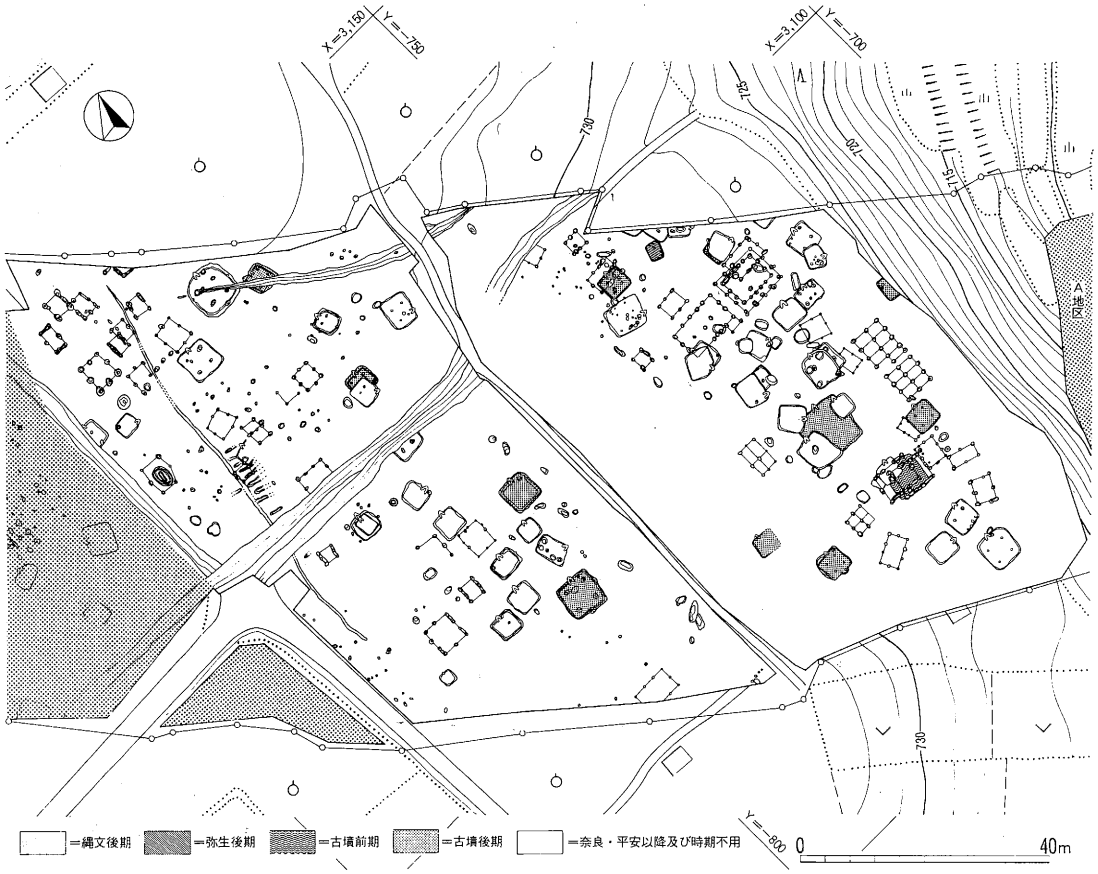


第49図　栗毛坂遺跡年度別調査範囲図（１：10,000）

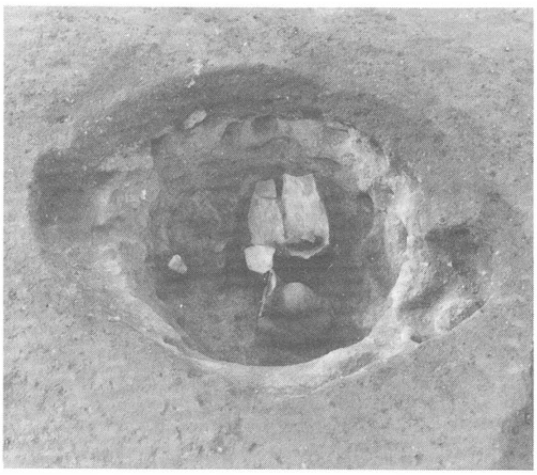
縄文時代は，後期初頭称名寺式土器を伴う土坑が一基，調査区上段中央部で確認された（第51図）。土坑は径約120cm前後の円形を呈し，覆土は埋めもどしの状況が認められた。完形に近い小型深鉢形土器（第52図）と無文大型深鉢形土器胴部片が中央部で出土したほか，検出面中央で石皿が出土している。これらの観察から，土坑墓である可能性が高いと考えたい。また，同様の覆土を持つ土坑が調査区中央の段丘際に数基認められたが，耕土直下の検出面であること，遺物が出土しなかったことから時期比定は困難と言わざるをえなかった。

弥生時代については，床面に多量の炭化材を残す特異な竪穴住居址が一軒検出されたのみである。長軸2.2m強の長方形を呈す小形なものであるが，後期末の甕・壺などが完形に近いかたちで出土しており，貴重な資料が得られた（第53図）。

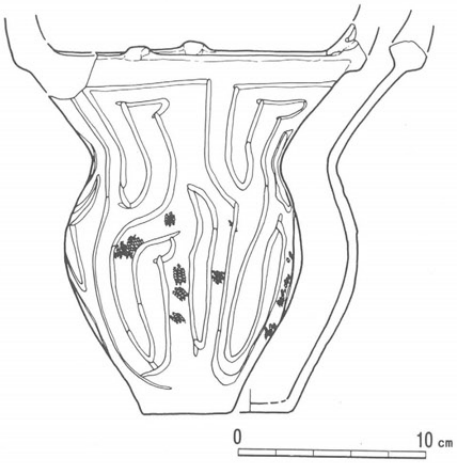
古墳時代の遺構は，竪穴住居址７軒，溝址１本，畠址１枚ほかが検出され，後期末の遺物が出土している。該期については，昨年度調査部分でも隣接地に遺構が認められ，特に下段部で大形の竪穴住居址が確認されるなど，この段丘縁辺部を中心に集落が営まれたことがわかった。さらに下段部で検出された大型の掘立柱建物址の存在は，いままで平安期の集落では検出されていないもので，かつ同遺跡内でも古墳時代の遺構が集中する地域でみられた点，該期の集落



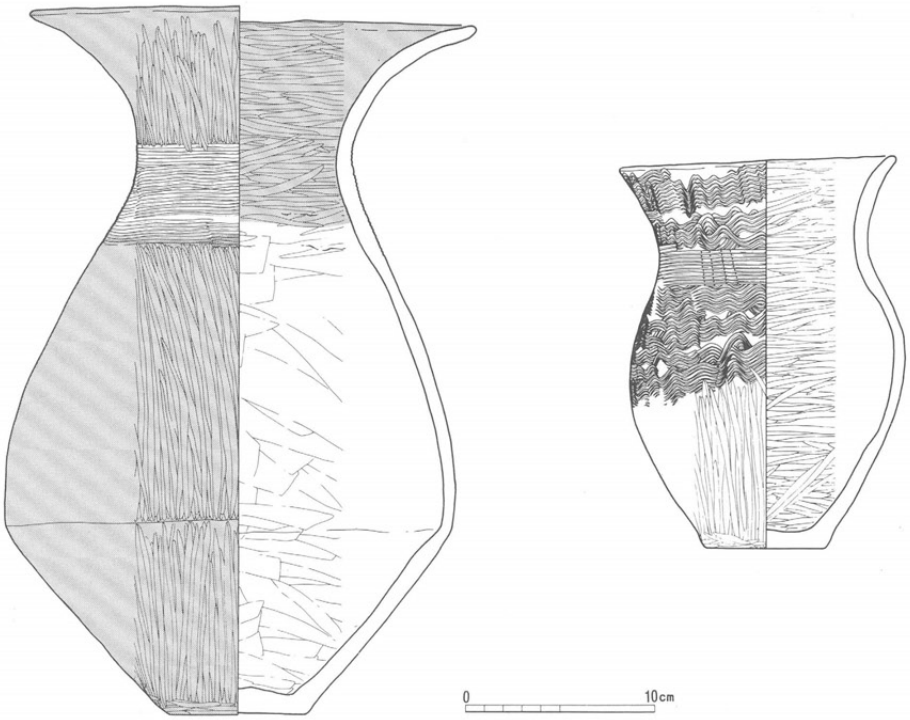
第50図　栗毛坂遺跡Ｂ地区遺構配置図（１：1,200）



第51図　栗毛坂遺跡Ｂ地区572号土坑



第52図　572号土坑出土土器実測図（１：４）



第53図　栗毛坂遺跡Ｂ地区159号住居址出土土器実測図（１：４）

の検討に際して大きな課題となった。

平安時代については，昨年度同様遺構密度が高く，本遺跡の性格を特徴付けるものであった。ただ，今年度の調査では，昨年度ごく少数しか検出されなかった平安時代後半の竪穴住居址の一群が認められ，集落の変遷に新たな所見が得られたことが大きな成果といえる。

Ｃ地区は，昨年度までの調査結果と同様，平安時代前半を主とする集落址を検出した。

（岡村秀雄）

(14・15・16)　西赤座遺跡・中久保田遺跡・枇杷坂遺跡

所　在　地：佐久市大字岩村田字大馬久保129-2番地ほか

調 査 期 間：昭和63年10月13日～26日，11月22日～12月５日（西赤座遺跡）

：同年10月11日，26日，11月14日（中久保田遺跡）

：同年10月８日～25日，11月４日～30日（枇杷坂遺跡）

調 査 面 積：西赤座遺跡1,000m²（総計6,700m²）　中久保田遺跡7,800m²

：枇杷坂遺跡7,670m²（総計16,000m）

遺跡の立地：浅間山南麓末端部の田切り地形に挟まれた台地

時代と時期：平安時代・中～近世

遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

	遺構／時期	竪穴住居址	掘立柱建物址	土坑	溝	その他
西赤座	中世			(43)		
	近世				1	
	近代					耕地整理址
	不明			10	(30)	
枇杷坂	奈良	(3)		(6)	(3)	
	平安		5			
	不明			1	1	

（　）総数

主な出土遺物

土器・陶磁器：弥生後期土器，土師器，須恵器，中・近世陶器

そ　の　他：銭貨

西赤座・中久保田・枇杷坂の各遺跡は，栗毛坂遺跡を含め，浅間山の南麓末端部の田切り地形に挟まれた台地上にあり，各々隣接している。各遺跡とも遺跡内に田切り形成跡がみられ残された台地部分でも，以前水田開発に伴う削平と埋め立てが行われたため，遺構の保存状態は良くない。以下各遺跡の概要を記す。

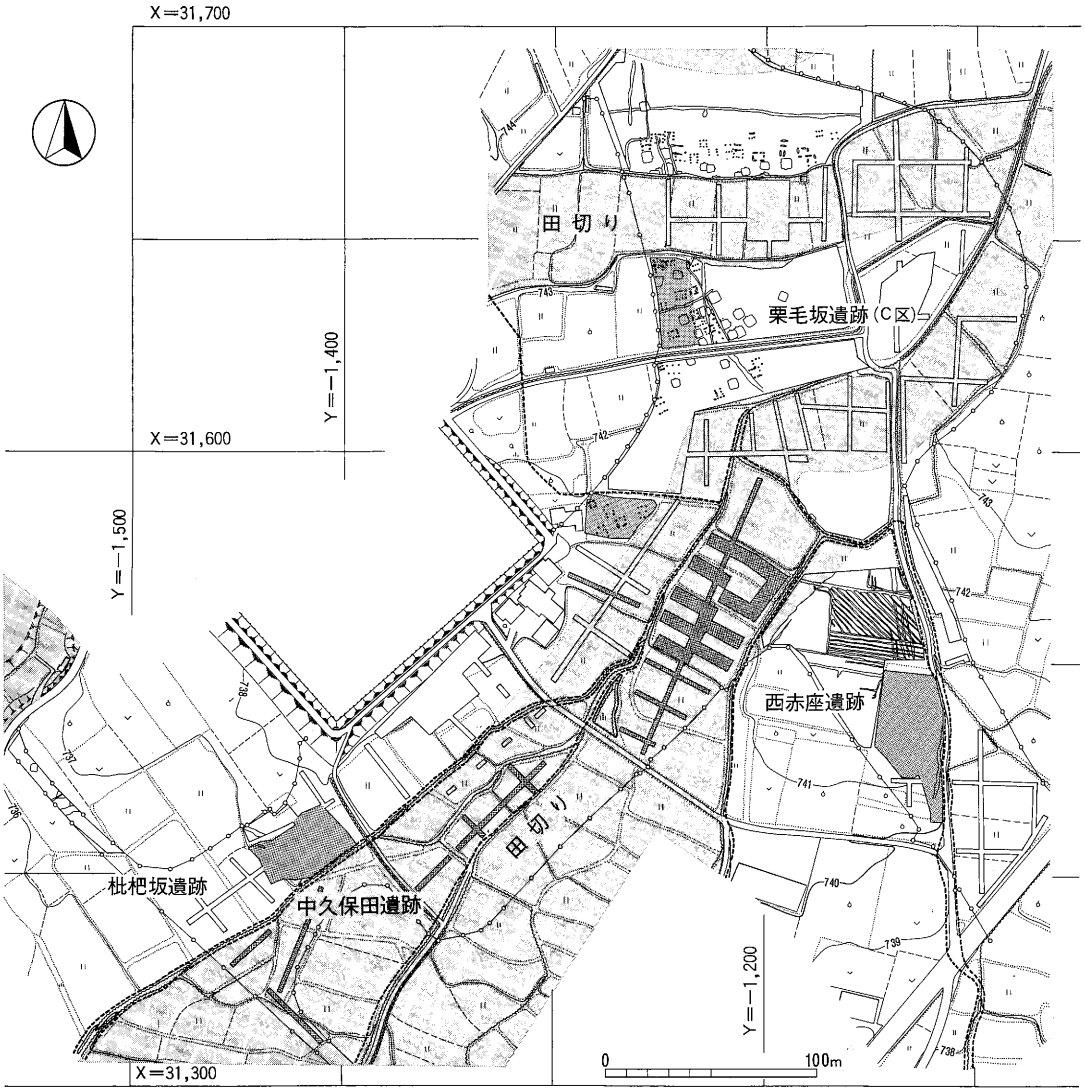
西赤座遺跡　調査対象区域は遺跡の北端部にあたり，昨年度未調査の残件部分である。調査前は宅地であったため，家屋のあった調査区中央は深く攪乱をうけていたが，家屋周辺の土層堆積の安定した部分では遺構を認めることができた。検出された遺構は土坑10基と瀬戸・美濃系の中世陶器片・山茶碗片が数点出土した溝一本とである。溝は方位を意識したように南北に走り，現在の農道に沿うようにあった。隣接する栗毛坂遺跡でも農道・市道下に同様の溝がみられ，現在につながる土地区画的性格も考えられなくはない。なお昨年度確認された耕地整理址は今回検出されなかった。

中久保田遺跡　遺跡は，表採資料及び周辺遺跡の所見から弥生時代から平安時代の集落址が予想されていた。今回の調査区域は，遺跡の北端部にあたり，遺跡名（小字）の示す通り細長い窪地となっている。調査は幅２ｍのトレンチを延べ150ｍにわたって設定し，遺構の有無と土層堆積状況の確認とを行うことから始めた。結果は，調査区全域で田切りによる深い削り込みと流入堆積とが観察され，遺構・遺物は認められなかった。さらに，本遺跡の北側用地内でも試掘を行ったが，同様の土層堆積を確認しただけである。得られた所見と隣接する各遺跡の土層観察結果とを照合すると，調査区一帯は北東方向から走る田切り内にあたり，極めて不安定

な土地であったようである。以上のことから，遺跡の中心は本調査区より南方田切り地形に挟まれた台地上に求められよう。

枇杷坂遺跡　本年度の調査対象は，昨年度調査を行った仙禄湖の南東部と南西部の未調査地である。南西部は，その大部分が田切りによる攪乱と水田造成の際の削平とを受けていたため残存する溝１本が検出されたのみであった。南東部は，栗毛坂遺跡に接する，田切りの影響をうけなかった600m²あまりの狭い区域で遺構が検出されている。遺構は，出土した遺物から平安期に属すると考えられる掘立柱建物址５棟の他に土坑１基が認められ，竪穴住居址はみられてない。また本地域周辺が田切り形成により攪乱されているため，遺構の広がりは明確に看取できないが，同じ台地上に該期の集落址が検出された栗毛坂遺跡との関連は，検討すべき課題である。

（井上城典・高田実）



第54図　栗毛坂遺跡Ｃ地区・西赤座遺跡・中久保田遺跡・枇杷坂遺跡遺構配置図（１：3,500）（アミは63年度調査範囲）

Ⅱ　普及・研究活動の概要

1．現地説明会

(1)　鶴前遺跡（長野市篠ノ井）

昭和63年６月５日，篠山々系の山麓に広がる鶴前遺跡Ⅱ地区で現地説明会を行った。

“柱穴に焼けた柱が残り，北陸系の土器・地床炉の検出を見た第１号住居址（古墳初頭）”では，遺物の残存状態から転居の際に焼いたのでは？との話しに深くうなずき……。“多量の炭化した種子，黒色土器の椀・須恵器のミニチュア土器（小壺）・灰釉陶器の椀及び緑釉陶器の破片など出土した第１号住居址（平安時代）”では，遠い都でも貴重品とされた陶器に驚異の目を。そして“カマド跡のある第３号住居址（平安時代）”に生活様式の今昔に想いを馳せた様子であった。

好天と休日，そして県埋文センターとしては北信で初めての現地説明会とあってか，地元の人々のみならず県下各地からの来場もあり，盛況の内に終了することができた。見学者150名。

第55図　現地説明会風景

(2)　石川条里遺跡①地区（長野市篠ノ井）

昭和63年８月７日，鶴前遺跡の眼下，石川条里①地区で平安時代水田址の現地説明会を開催した。平安時代の洪水砂層によって埋没した畦畔および水田面を中心に現場を公開するとともに，現地では出土遺物の展示も行い，調査研究員が説明にあたった。水田址としては初めての公開であり，地下に埋没した理由，石川方面の現条里景観との関係など，地域の歴史に対する強い関心がうかがえた。地元の方のみならず，条里制について関心の高い方々も訪れ，盛況の内に終了することができた。見学者150名。

(3)　石川条里遺跡⑤－１・２地区（長野市篠ノ井）

続いて，９月23日秋分の日，ＪＲ篠ノ井線稲荷山駅北西側の⑤－１・２地区で現地説明会を開催した。微高地上に位置する本地区では，中・近世の溝址，井戸址と古墳時代の溝址，土坑群を中心に発掘現場を公開し，調査研究員が説明にあたった。また，今回初めての試みとして，作業員さんの協力のもと発掘調査作業の様子も公開した。一方，現場プレハブにおいて，出土遺物の展示もあわせて行った。

地元塩崎地区をはじめとした155名余の方々が訪れた。そして前述（Ⅰ－３－(5)）の古墳時代の溝址，土坑群，およびそこからの出土遺物や，遺跡の立地等に関係した多くの質問

が出されるなど，地域の方々の郷土の歴史に対する関心の高さを感じた。また，発掘調査作業の公開についても，「発掘調査を実際に初めて見ることができてよかった」という声に代表されるように，おおむね好評であった。

(4) 北村遺跡（東筑摩郡明科町光）

縄文時代後期の人骨をともなう配石墓と敷石住居址を中心とした北村遺跡遺構群は，該期の墓制が明瞭に把握できる等きわめて資料価値が高く，昨年以来現地説明会など種々の機会を通して調査状況の公開をしてきた。今回は，調査日程などから最後の公開の場と考え，できるだけ多くの方々に調査内容を理解いただくとともに，埋蔵文化財の保護・活用意識の普及を目的として計画・実践した。

5月26日に，報道関係への現場公開を行い，調査の概況を公表するとともに公開説明会の計画を示した。各種報道によって調査の状況が伝えられ，遺跡の公開予定が報じられた。

5月29日は，午前中は一般見学者を中心にし，午後は研究者を対象とする説明会が催された。調査研究員が説明・案内をしながら調査現場を公開するとともに，プレハブを使って出土遺物の展示説明を行った。予定時刻前から，県下各地や県外から続々と見学者が訪れ，遺跡周辺に人があふれるほどの盛況となった。予想を上回る参加者により，午前中で用意した資料が足りなくなるなどの場面も生じたが，雨天となった午後3時の終了時刻には無事説明会を終えることができた。

調査日程が差し迫る時期の，全国的に注目されてきた北村遺跡の現場公開であったが，大盛況のうちに終了することができ，参加者へのアンケートなどでもおおむね好評であったことから，普及・公開の場としては成功したと考えられる。それとともに，1,000人を超える見学者を得たことは，テレビ・新聞等のマスコミの力も大きく働いた結果であり，今後の公開活動における報道機関の活用とその効果を示す好例となった。

(5) 栗毛坂遺跡（佐久市岩村田）

昭和63年10月16日(日)，栗毛坂遺跡Ｂ－ｂ地区の現地説明会を実施した。秋晴れに恵まれ，家族連れなどの見学者が訪れた。現場は平安時代を中心とする集落址の調査段階で，担当者の説明に熱心に耳を傾けていた。またプレハブでは今年度調査分の出土遺物を併せて展示した。見学者数は60名である。

多くの地域住民に見学していただくことを目的とした場合，今回の現地説明会を通して以下のことを考えさせられた。

1．農繁期や行楽の頃に実施することが果たして適切であるか。

2．遺跡や内容が前回と類似する場合には工夫が必要ではないか。

3．学校等の教育機関へのＰＲは現行の案内状の発送だけでよいか。

(6) 下茂内遺跡（佐久市香坂）

昭和63年11月21日(月)，空撮を終えた午後，東地地区の方を対象とする現地説明会を実施した。地区の有線放送の協力をいただき，多くの見学者が訪れた。中には87才のお年寄りも見学にこられた。現地を望める高台で担当者より説明を受け，メモをとる姿も見受けられた。また東地地区の遺跡より出土した土器も併せて展示し，「私の畑からも出ますよ」といった話しが交された。

2．展示会

(1) 長野自動車道塩崎地区遺跡出土品展示速報展

長野市立塩崎小学校の協力を得て，平成元年２月18日(土)に，同校被服室において本年度塩崎地区の遺跡から出土した，縄文・弥生・古墳時代の遺物を100点ほど展示した。

展示会見学を，午前を小学生，午後を一般に分けて行ったところ，小学生８学級約300人，一般200人ほどの見学者があり，短時間のわりに盛況であった。

内容は，土器・石器・木製品・勾玉類などを遺跡ごとに展示し，古墳時代の塩崎の復原図，発掘写真とも，小学生にもわかるような展示品の説明に工夫をこらした。

配布資料も，イラストや復原図などいれてわかりやすさを心がけた。

地元の小学生に埋蔵文化財に対する理解を広めるうえで，学校を借用して展示会を設けたのは，一方法として評価できるものと考える。

(2) 中央道発掘遺物展

７月30日から８月28日の１ヶ月間に渡り，松本市日本民俗資料館を会場として，「中央道発掘遺物展」を松本市，松本市教育委員会，長野県考古学会との共催のもとに実施した。

第56図　展示会風景

今回の遺物展は日本民俗資料館が企画の中心となり，長野自動車道松本インターの開通を記念して行われたもので，当センターが調査した岡谷市から東筑摩郡明科町までの中央道関連遺跡から出土した遺物を主に展示することとなり，センターの資料公開の趣旨に沿って協力することになった。

資料館側との対応は松塩筑事務所の普及公開係が中心となり，展示方法や展示品，パン

フレットの内容などについて数回に及ぶ綿密な話し合いがもたれ，開館前日の展示にはセンターの職員が資料館に赴き，最終的な詰めを行った。

展示内容は４つの部門に分けた。まず，発掘に至る経過と発掘の実際を写真によって構成し，埋蔵文化財に対する理解と，当センター業務を一般へ普及させるためのコーナーを最初に設けた。次に先土器・縄文時代，弥生・古墳時代，古代・中世の３つの時代ごとに各時代の生活復原や使用した道具をテーマに，土器・石器・土偶・鉄製品・墨書土器・装身具などやく400点に及ぶ遺物で構成した。また，縄文時代のコーナーには明科町北村遺跡の人骨を，出土した土坑のレプリカで，弥生時代では集落の復原模型を，古代・中世では古代の竪穴住居址の復原家屋を作成し，より分かりやすい展示に心掛けた。また，８月７日には滋賀大学小笠原好彦教授を迎え，「古代集落の諸問題」と題した講演会も行われた。

展示期間中はちょうど夏休みと重なり，松本城を訪れる観光客が資料館も合わせて見学したため，その期間の入館数は203,290人にも上った。松本平から出土した遺物がこれだけの大勢の人の目に触れる機会がなかったため，今回の遺物展は資料公開の絶好の機会となった。

しかし，反省点も多く出された。それはセンター全体で対応する体制が整わないまま，準備に入いり，中途半端な展示になったことである。また，センター業務の理解や資料公開義務について，展示が十分な理解を得られる内容であったか，といった問題も出された。さらに，博物館の企画展示のテーマとして出土品展がふさわしいかとの指摘もあった。

今回の遺物展は資料館に協力する形で進められたが，センターの資料公開業務とは何か，どうあるべきか，といった課題を今後に残したものとなり，今後普及公開が本務として位置付けられるべき方向性を考える機会となった。

(3) 上信越自動車道関連遺跡出土品展

平成元年３月２日(木)～５日(日)の４日間，長野県佐久創造館において「上信越自動車道関連遺跡出土品展」を開催し，1,400名を越える見学者を迎えた。

昭和61年10月に佐久調査事務所を開所して以来，佐久市分の23遺跡の調査をほぼ終了し，その総決算として今回の出土品展を企画した。

縄文，弥生，古墳，奈良，平安，中・近世という時代別の遺物展示に写真や復原図を併せ，見学者にわかり易く，また興味をひくように工夫を凝らした。展示品は土器と石器を中心に200点余にものぼり，また石器製作に係る石片も展示しその過程の復原も試みた。

吹付遺跡の柄鏡形敷石住居址を復原するにあたり，再展示できるように配慮しながら準備段階での検討が重ねられた。その結果，深鉢などの出土遺物を据えることにより一層臨場感が得られ，見学者の質問もあいつぎ，好評であった。

今回は“体験コーナー”の充実をはかり，石器製作の実演やパソコンを用いた歴史クイズなどを設けた。自ら鹿の角を手にして奮闘する方も多く，当時の人々の巧みさに驚いたり，また真剣な表情で画面にむかうちびっこ学者の歓声も聞かれた。

昨年度からの出土品展を通して“佐久の歴史”を再認識された見学者も多く，埋蔵文化財の保護の必要性が着実に地域へ浸透してきているようだ。

第57図　展示会風景

3．研究会・学習会

研究・研修活動として，講師として招へいし，あるいは来所の機会をとらえて，多くの方々から御指導や御助言をいただき，研究会・学習会も開催した。

第２表　講師招へい及び来所による指導・学習会

期　日	講　師		指導内容など
63.4.21	筑波大学教授	岩崎　卓也	佐久調査事務所調査全般について
4.25・26	明治大学教授	戸沢　充則 外２名	北村人骨の整理について
	東京大学助教授	赤沢　威	
	独協医科大学講師	茂原信生 外１名	
	三菱化成生命科学研究所	南川　雅男	
5.21	独協医科大学講師	茂原　信生 外１名	北村人骨の整理について
5.30・31	橿原考古学研究所副所長	石野　博信	松塩筑出土品全般
6.13・14	国学院大学教授	小林　達雄	下茂内遺跡の調査について（講演）「縄文文化のはじまり」
6.21	長野市教育委員会	青木　和明	石川条里遺跡の調査について
6.23・24	宮崎大学助教授	藤原　宏志 外１名	石川条里遺跡の調査について
6.29	奈良国立文化財研究所	木下　正史 外４名	石川条里遺跡の調査について
7.3・4	明治大学教授	戸沢　充則	北村人骨の整理について
	独協医科大学講師	茂原　信生	

7．4・5	宮崎大学助教授	藤原　宏志	石川条里遺跡の調査について
7.21・22	独協医科大学	五十嵐由里子	北村人骨の整理について
8．4	長野県遺跡調査指導委員	戸沢　充則 外３名	長野調査事務所調査全般
8．8	滋賀大学教授	小笠原好彦	松本平の古代集落について
8.18	信州大学医学部助手	西沢　寿晃	大星尻古墳群の埋葬人骨について
9．8	㈶愛知県埋文センター	石黒　立人	弥生土器について
9.15	宮崎大学助教授	藤原　宏志 外４名	石川条里遺跡の調査について
9.30	奈文研考古第２調査室長	木下　正史 外２名	石川条里遺跡の調査について
10．5	長野県遺跡調査指導委員	戸沢　充則 外３名	長野調査事務所調査全般
10.12	長野県考古学会々長	森嶋　　稔	下茂内遺跡の調査について
10.13	明治大学教授	戸沢　充則	長野調査事務所調査全般
10.14	明治大学教授	戸沢　充則	下茂内遺跡の調査について
10.22	京都大学教授	高谷　好一	石川条里遺跡の調査について
10.31	滋賀大学教授	小笠原好彦	松本平の古代集落について
11．2	埼玉県立歴史資料館副館長	栗原　文蔵	佐久調査事務所調査全般
11．7	明治大学講師	勅使河原彰	下茂内遺跡の調査について
11．7・8	奈文研集落研究室長	工楽　善通	石川条里遺跡の調査について
11．8	㈶静岡県埋文センター調査課長	平野　吾郎 外１名	石川条里遺跡の調査について
11.10・11	各務原市教育委員会	渡辺　博人	美濃須恵窯産須恵器について
11.12	東海大学講師	織笠　　昭 外１名	下茂内遺跡の調査について
11.12	福井県小浜市教育委員会	松川　雅弘	佐久調査事務所調査全般
11.14	東京都教育庁社会教育部	宮崎　　博	下茂内遺跡の調査について
11.23	長野県考古学会々長	森嶋　　稔	下茂内遺跡の調査について
12．3	奈文研建造物室長	宮本長二郎	古代・中世の建物址について
12．6	望月高校教諭	吉沢　杜夫	下茂内遺跡の地質について
12．9	飯田市教育委員会	小林　正春	石川条里遺跡の調査について
12.10	㈶群馬県埋文事業団課長	平野　進一	石川条里遺跡の調査について
	主任調査員	石塚　久則	
12.10・11	名古屋大学助手	斉藤　孝正	施釉陶器について
12.12	飯山南高校教諭	高橋　　桂	石川条里遺跡の調査について
12.13	長野県考古学会々長	森嶋　　稔	石川条里遺跡の調査について
12.14	信州大学教授	斉藤　　豊	石川条里遺跡の地質について

12.14	長野県史刊行会編纂委員	伊原今朝男	石川条里遺跡の調査について
	常任編纂委員	宮下　健司	
12.27	飯山南高校教諭	高橋　　桂	下茂内遺跡の尖頭器について
	飯山市教育委員会	望月　静雄	
64.1.4	橿原考古学研究所主任研究員	関川　尚功	長野調査事務所出土品全般
元.1.13	野尻湖博物館	中村　由克 外1名	下茂内遺跡の地質について
1.23・24	明治大学教授	戸沢　充則 外3名	北村人骨の整理について
	東京大学助教授	赤沢　　威	
	独協医科大学講師	茂原　信生 外1名	
1.24	筑波大学教授	岩崎　卓也	長野調査事務所出土品全般
1.24	信州大学助教授	斉藤　　豊	石川条里遺跡の地質について
1.31	奈文研建造物室長	宮本長二郎	石川条里遺跡の建築材について (講演)「建築材と遺構」
2.2～4	東京大学教授	石井　　進	松本平の中世集落について (講演)「中世村落の実態」
2.7	日本考古学協会員	森山　公一	下茂内遺跡の尖頭器について
2.20	筑波大学教授	岩崎　卓也	長野調査事務所出土品全般 (講演)「古墳について」
3.1	奈文研主任研究官	光谷　卓実	石川条里遺跡の木製品について (講演)「年輪年代学」
3.14	信州大学助教授	斉藤　　豊	石川条里遺跡の地質について (講演)「善光寺平の地質」

4．刊行物

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3』(塩尻市内その2)

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5』(松本市内その2)

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10』(松本市内その7　豊科町内)

『長野県埋蔵文化財センター年報　5』(1988年度)

『長野県埋蔵文化財センター紀要　2』(1988年度)

『長野県埋蔵文化財ニュース　No.25』

Ⅲ　機構・事業の概要

1．機　構

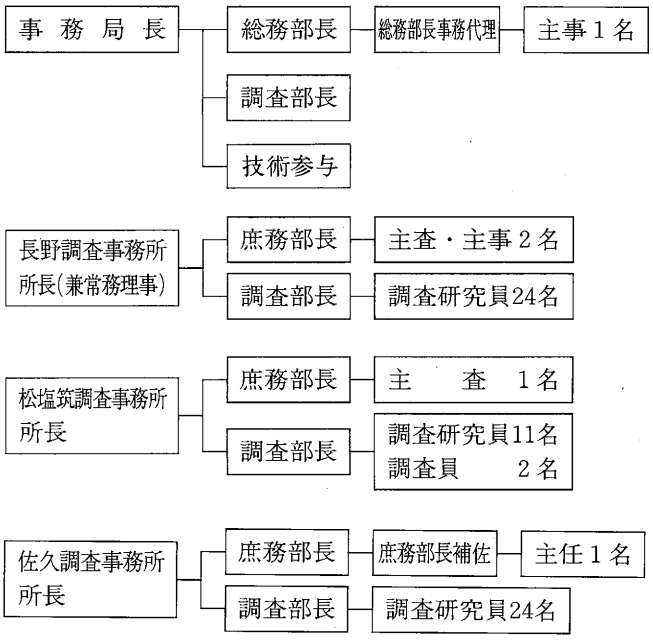
(1)　組織　　（元．3．31現在）

○理事会

理 事 長(県教育長)
副理事長
常務理事(1名)
理　　事(県企画局長)
〃　(県高速道局長)
〃　(県教委文化課長)
〃　(県考古学会長)
〃　(市町村長代表)
〃　(市町村教育長代表)
〃　(考古学研究者代表)

監　　事(県会計局会計課長)
〃　(県教委総務課長)

○事務局



(2)　事務所所在地

本　　部	長野市大字南長野字幅下692-2　長野県教育委員会事務局文化課内
事務局 長野調査事務所	長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
松塩筑調査事務所	塩尻市大字広丘高出字西原1977
佐久調査事務所	佐久市大字安原字蛇塚1367

2．事　業

(1)　理事会及び会計監査

理事会

○第15回理事会　昭和63年5月25日　会場　長野市　山王共済会館

第1号議案　昭和62年度事業報告書について

第2号議案　昭和62年度決算報告書について

○第16回理事会　平成元年３月29日　会場　長野市　山王共済会館

第１号議案　平成元年度事業計画書（案）について

第２号議案　平成元年度収支予算書（案）について

第３号議案　昭和63年度収支補正予算書（案）について

会計監査

昭和63年５月９日実施　昭和62年度事業報告書及び収支決算書について

(2)　調査事業

中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線に係る埋蔵文化財発掘調査――長野県教育委員会からの委託

ア　調査遺跡及び面積

中央自動車道長野線関係　　明科町・坂北村・長野市地域内６遺跡　51,442㎡

関越自動車道上越線関係　　佐久市地域内16遺跡　138,170㎡

イ　整理作業

中央自動車道長野線関係　塩尻市地域内１遺跡，松本市・豊科町地域内７遺跡の報告書作成，及び，松本市地域内５遺跡の整理作業

(3)　事業費

中央自動車道長野線関係　　698,729千円

関越自動車道上越線関係　　350,135千円

(4)　普及活動（54～58ページ参照）

(5)　職員研修

ア　講師招へい及び来所による指導・講習会等（58～60ページ参照）

イ．奈良国立文化財研究所関係

期　間	日数	課　程	参加者
63．４．14～４．28	15	生物課程	上田典男
５．11～６．７	28	遺構探査・予備調査	臼田武正
６．15～６．30	16	石器調査	大竹憲昭
７．21～８．26	37	一般	新海節生
10．12～10．25	14	遺跡環境	平林　彰
11．30～12．21	22	古墳時代遺跡調査	宇賀神誠司
元．１．10～１．13	4	低湿性遺跡調査	伊藤友久
１．20～２．８	20	保存科学	西山克己
２．15～２．28	14	建築遺構調査	百瀬忠幸
３．９～３．23	15	埋蔵文化財情報	市川隆之
参加者10名　延べ185日		他に講師（低湿性遺跡調査課程）１名	

ウ．海外研修

期　　日	内　　容
元．3．5～10	日本文化の発展に多大な影響を与えた韓国の文化遺産を訪ね朝鮮文化を生みだした風土をはだで感じ，日本文化と朝鮮文化の接点を探った。 慶州（天馬塚，仏国寺，石窟庵，国立慶州博物館，法住寺など） 扶余・公州（定林寺跡，扶余博物館，武寧王陵，公山城など） ソウル（韓国民俗村，青磁窯，景福宮，中央博物館など）

エ．その他学会関係研修会，研究会

期　　日	内　　容
63．4．24	佐久地方遺跡発掘調査報告会（10名）
10．8～9	日本考古学協会シンポ「日本における稲作農耕の起源と展開」（4名）
10．29～30	保存科学研究会「水浸出土木材の保存処理法」（1名）
11．23	県考古学会第1回旧石器研究部会（5名）
元．2．5	シンポジウム「旧石器時代・槍の文化史」（1名）
2．7～8	シンポジウム「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」（1名）
3．28～29	条里制研究会「地割の施行段階」石川条里発表（2名）

オ．県外埋蔵文化財施設・遺跡等視察研修

期　日	視　察　・　研　究　地	参加者
63．10．8～9 元．3．8～10	水田址調査の実施研修と調査法　（静岡）	（3名）
この他埋文センター・博物館・研究施設・調査現場の視察・研修を行った。 延べ85ヶ所　43名		

カ．全埋文協などへの参加

期　日	会　議　名	開催地	参　加　者
63．4．28	埋文協関東・中部ブロック会議	土浦市	塚原隆明 笹沢浩 永田伸男
6．9～10	埋文協総会	京都	半田順計 永田伸男
6．28	「日本列島発掘展」企画実行委員会	東京	丸山敞一郎
7．27～28	関越自動車道関係群馬長野連絡協議会	長野・佐久	伊藤万寿雄 畑幹雄 丸山敞一郎 永田伸男 近藤尚義
9．19～23	埋文協連絡協議会研修会	北海道	半田順計 小平和夫
10．27～28	埋文協関東・中部ブロック会議	前橋市	伊藤万寿雄 笹沢浩 柳沢洋良
10．27～28	関越自動車道関係4県連絡会議	佐渡	塚原隆明 畑幹雄 丸山敞一郎 永田伸男
11．10～11	関東甲信越静埋文行政担当者会議	鬼怒川	関次郎

キ．長野県教育センター・産業教育センター研修

期　日	学校別	分　野	講　座　名	参加者
教育センター（※印　企画研修・△印　公開講座）				
63．5．24～26	小中	教育機器	教育メディアの活用	小林　秀行
6．23～24	高	社　会	社会科教育基礎	野村　一寿 中平　智昭 内山　美彦
7．20～21	小中	理　科	地学的教材の観察実験	中村　敏生
8．8～11	小中	理　科	臨海（生物）	太田　典孝
8．9～11	高	社　会	地域と教材開発	市村　勝已 二木　明
8．31～9．2	小中		コンピューターの教育利用基礎	春日　文彦
10．4		教職教養	※明日を考える	太田　典孝 宮脇　正実 二木　明 高田　実
10．6		教職教養	※国際人を育てるには	二木　明 宮脇　正実
11．8		教職教養	※生きるということ	太田　典孝
11．17		教職教養	※明日への学校教育	山崎　光顕
12．2		教育相談	※相談の心	山崎　光顕
元.1.31～2．1	高	同和教育	高校の同和教育	斉藤　伸介
産業教育センター				
63．5．18～20		特別講座	パソコン入門(1)	池田　哲
7．29		特別講座	ワープロ入門(2)	竹内　稔
8．31～9．2 10．17～19		情報処理	ＢＡＳＩＣプログラミング基礎(3)	越川　長治
11．9～11 12．19～21		情報処理	ＣＡＩ基礎(3)	宮脇　正実
元．1．18～20		特別講座	パソコン入門(3)	伊藤　友久 太田　典孝 中平　智昭

ク．姉妹校制度研修

期　日	訪問学校	研修内容	参加者
元．2．21	更級農業高校	授業参観・講話	春日文彦　内山美彦 中平智昭　斉藤伸介
2．22	広丘小学校	授業参観・講話	百瀬新治　石上周蔵
2．27	通明小学校	授業参観・講話	山崎光顕　中村敏生 太田典孝
2．27	篠ノ井西中学校	授業参観・講話	平林芳明　池田　哲

ケ．県内市町村及び関係機関への協力・指導等

期　日	市町村等	協力・指導内容等
昭和63年4月 ～ 平成元年3月	・佐久市ほか1市6町5村 ・長野県史刊行会ほか1ヶ所 ・長野県老人大学校ほか5ヶ所	・市町村教委発掘，整理，報告書づくり，展示 ・県史および市町村誌編集 ・考古学講座講演
延べ32回　　協力・指導延38名		

昭和63年度役員及び職員

理　事　会

理　事　長	村山　　正（県教育長）〈63.11.25 辞任〉　樋口　太郎（県教育長）〈63.11.26 就任〉
副理事長	高橋　弘典〈63.6.6 辞任〉　伊藤万寿雄〈63.6.7 就任〉
常務理事	塚原　隆明　　伊藤万寿雄〈63.6.7 副理事長へ〉
理　　事	山極　達郎（県企画局長）　根岸伝治郎（県高速道局長） 濱　　篤（県教委文化課長）　稲玉　貞雄（更埴市長）〈64.1.7 辞任〉 宮坂　博敏（更埴市長）〈元.3.6 就任〉　森嶋　　稔（県考古学会長） 奥村　秀雄（長野市教育長）　神村　　透（考古学研究者）
監　　事	藤沢　亮三（県会計局会計課長）　岡田　　泉（県教委総務課長）

事　務　局

局長兼総務部長	半田　順計
総務部長事務代理	永田　伸男
主　　事	柳沢　洋良（兼）
調　査　部　長	笹沢　　浩（兼）
技　術　参　与	佐藤　今雄

調査事務所

	長野調査事務所	松塩筑調査事務所	佐久調査事務所
常務理事所長	塚原　隆明		伊藤万寿雄〈63.6.7 副理事長〉
所長兼庶務部長	塚原　隆明	堀内　計人	畑　　幹雄〈63.6.7 所長兼任〉
庶務部長	半田　順計（兼）		
庶務部長補佐			中沢　克明
事務職員	主査　永田　伸男（兼） 主事　柳沢　洋良	主査　藤森　幸枝	主任　関　　次郎
調査部長	笹沢　　浩	宮沢　恒之	丸山敞一郎
調査研究員	久保　直隆　福島　厚利 池田　　哲　宮尾　栄三 越川　長治　平林　芳明 山崎　光顕　山崎　博也 春日　文彦　中村　敏生 竹内　　稔　臼居　直之 平林　　彰　太田　典孝 青木　一男　三上　徹也 寺内　隆夫　伊藤　友久 綿田　弘実　西山　克己 市川　隆之　斉藤　伸介 内山　美彦　中平　智昭	青沼　博之　百瀬　新治 岡沢　秀紀　小平　和夫 原　　明芳　大竹　憲昭 石上　周蔵　上田　典男 市村　勝巳　望月　　映 野村　一寿	三石　俊司　輿水　太仲 木内　英一　木内　行雄 臼田　武正　吉沢　信幸 井上　城典　小林　秀行 宮脇　正実　寺島　俊郎 百瀬　忠幸　近藤　尚義 宇賀神誠司　小平　恵一 降籏　史敬　伊藤　隆之 新海　節生　高田　　実 岡村　秀雄　河西　克造 二木　　明　中野　亮一 山上　秀樹　下島　章裕
調　査　員		百瀬　陽三　関　　全寿	

長野県埋蔵文化財センター年報　5　1988

発 行 日　平成元年3月31日

編集発行　(財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4
TEL 0262—93—5926

印　　刷　(株)中　信　社　佐久市岩村田1154-8
TEL 0267-67-2152